

博士論文

大学生を対象とした **Implicit Relational Assessment Procedure**
による関係フレーム理論の枠組みからみた潜在的自尊感情の検証

2020 年度

古谷 大樹

明星大学大学院

人文学研究科心理学専攻

15DP-002

目次

| | |
|---|-----|
| 概 要..... | 2 |
| 序 論..... | 4 |
| 第 1 章 関係フレーム理論の観点による自己評価..... | 5 |
| 第 2 章 自尊感情..... | 10 |
| 第 3 章 潜在的自尊感情の測定法..... | 17 |
| 第 4 章 Implicit Relational Assessment Procedure..... | 21 |
| 第 1 節 IRAP 概要..... | 21 |
| 第 2 節 IRAP により ISE を測定した先行研究の概観..... | 26 |
| 第 3 節 IRAP により ISE を測定した先行研究の総括..... | 32 |
| 第 5 章 IRAP による ISE の検討点及び本研究の目的..... | 40 |
| 第 1 節 本稿で実施する研究の検討点..... | 40 |
| 第 2 節 本稿における各研究の目的..... | 41 |
| 本 論..... | 44 |
| 第 6 章 研究 1 : Vahey 式による日本人大学生の ISE の検証(古谷・竹内, 2019)..... | 45 |
| 第 7 章 研究 2 : メジャー式による日本人大学生の ISE の検討(古谷・竹内, in press).... | 53 |
| 第 8 章 研究 3 : IRAP により測定した ISE における指標を行動とした緩衝機能の検証..... | 61 |
| 第 9 章 研究 4 : IRAP で測定する ISE の得点を高める要因についての検証..... | 70 |
| 結 論..... | 77 |
| 第 10 章 総合考察..... | 78 |
| 第 1 節 3 つの検討点について本研究の結果から明らかになったこと..... | 78 |
| 第 2 節 3 つの検討点について本研究の結果から明らかになったこと..... | 79 |
| 第 3 節 検討点以外の本研究の結果からの考察..... | 80 |
| 第 4 節 本研究の課題点..... | 83 |
| 第 5 節 臨床的意義及び今後の展望..... | 84 |
| 第 11 章 本稿の総括..... | 85 |
| 引用文献..... | 87 |
| 参考文献..... | 100 |
| 謝 辞..... | 101 |

概 要

人は、物理的な特徴の有無に関わらず、刺激と刺激を恣意的に関係づけることができる。この刺激と刺激の関係づけに着目した理論として、関係フレーム理論(Relational Frame Theory; 以下, RFT とする)がある。RFT では、自分という存在も刺激の 1 つとして捉えており、自分と肯定や否定を示す刺激との恣意的な関係づけが、自己評価を制御すると考えている。

本稿は、自分と関係づけられた肯定語や否定語との関係性と強度を、個別に抽出することができる尺度 Implicit Relational Assessment Procedure(以下, IRAP とする)により、日本人の大学生を対象として、RFT の枠組みから潜在的自尊感情(Implicit self-esteem; 以下, ISE とする)を検証したものである。

自尊感情は大別すると、質問紙により測定する顕在的自尊感情(Explicit self-esteem; 以下, ESE とする)と ISE の 2 種類に分けられる。この 2 種類の中で、IRAP は ISE を測定する尺度であり、IRAP により ISE を測定した研究が複数存在する。IRAP により ISE を測定した先行研究を概観したところ、一定数の大学生を対象とした場合、自分と肯定語を等位(自分=肯定語)として関係づけられている傾向が明らかとなっており、自分を肯定的に評価していると解釈されている。加えて、自分と肯定語の刺激間関係づけが強い者ほど、心理的に健康度が高いとの報告がある。その一方で、自分と否定語については、相違(自分≠否定語)として関係づけられている傾向を報告した研究があるものの、この知見と一致しない結果も報告されている。また、IRAP で ISE を測定する際に使用する刺激セットは、大きく分けると Vahey et al. (2009)の刺激セットと Timko et al. (2010)以降の刺激セットの 2 種類がある。

これらを踏まえ、本稿では日本人大学生を対象として、ISE を IRAP で測定し、「自分—肯定語」と「自分—否定語」に対する等位及び相違の関係性やその強度の観点から、ネガティブ事象に対する ISE の緩衝機能の検証及び臨床的意義についての考察を目的とした。この目的のために、本稿では、(1)ISE を測定する 2 つの刺激セットそれぞれの IRAP における結果の再現性の検証、(2)ISE の先行研究で明らかとなった ISE の緩衝機能と、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の D-IRAP 得点との関連性の検証、(3)「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の強度及び関係性に関する変数の検証の 3 つの検討点を挙げ、これらを

検討するために、4つの研究を実施した。

研究1では、Vahey et al. (2009)の刺激セットを、研究2では、Timko et al. (2010)以降の刺激セットを使用し、先行研究の結果が再現性されるかを検証した。加えて、研究2では、ISEと心理的健康度との関連性について検証した。研究3では、従来のISEの知見として得られているネガティブな刺激の影響を和らげる緩衝機能について、指標を行動として検証した。最後に研究4では、研究3で得られた知見を参考に、高難易度課題の達成が「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の関係づけの強さに影響を与えるか検証した。

本稿における4つの研究で得られた知見を総括すると、日本人大学生を対象とした場合においても先行研究と同様の傾向を示すこと、自分＝肯定語の関係性は安定して抽出されること、自分＝肯定語の関係づけが強い者ほど、物事を楽観的に捉え、ネガティブなフィードバックを与える課題を長く続ける傾向が明らかとなった。また、自分＝否定語の者も、ネガティブなフィードバックを与える課題を続ける傾向が示された。そして、高難易度の課題を達成し、ポジティブなフィードバックを受けると、自分＝肯定語の関係づけが強まる可能性を示唆した。その一方で、高難易度の課題を達成後に自分＝否定語の関係づけも促進する可能性も示唆された。つまり、高難易度の課題を達成することは、自己肯定を強める側面と、自己否定を強める側面があると考えられる。

以上のことから、自己評価における自己肯定への肯定と自己否定への否定は、異なるということを示唆し、これらを個別に検証する意義を提示した。

序 論

第1章 関係フレーム理論の観点による自己評価

関係フレーム理論の概要

人は、物理的な特徴の有無に関わらず、刺激と刺激を恣意的に関係づけることができる (Törneke, 2010 武藤・熊野訳 2013)。例えば、「野球」という競技を文字にすると、日本語では「野球」、英語では「Baseball」である。2つの文字(刺激)は、形態的に異なっているものの、同じ競技を指す文字(刺激)である。この2つの文字が、同じ競技を示す文字(刺激)と直接教えられた者は、「野球」と同じ意味を持つ文字(刺激)を選択するように求められた際に、「Baseball」を選択することが可能であろう。このような、刺激間の関係性の学習により生じる反応を通して、認知や言語¹を行動分析学の視点から、説明を試みている理論に、関係フレーム理論(Relational Frame Theory; 以下、RFT とする; Hayes, Barnes-Holmes, & Roche, 2001)がある。

RFT における関係づけるとは、複数の刺激事象に対して、何らかの反応が起こっていることを指している(長谷川, 2017)。人は、日常生活の中で、刺激間の関係性に関する複数の範例(ある刺激間の大小を比較することや、ある刺激と刺激が同じもしくは違うと反応することなど)を経験し、関係づける反応自体を獲得していく (Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, Roche, & Smeets, 2001)。例えば、上述の例の場合、何かしらの刺激同士を、同じと関係づけられる反応が獲得されていなければ、「野球」と「Baseball」を同じ内容を意味する刺激(文字)として関係づけることができない。つまり、この関係づける反応の獲得は、様々な刺激と刺激を恣意的に関係づける際の、ベースとして位置づけられている。

そして関係づけの成立には、直接的な経験(学習)により獲得する場合と、自身の経験(学習)に基づく推測で獲得する場合とがあり、それぞれ反応を制御する(Bach & Moran, 2008 武藤・吉岡・石川・熊野訳 2009)。前者により制御される反応を関係反応、後者により制御される派生的関係反応という(大月・木下, 2011)。関係反応は、複数の刺激間の相対的な特徴に対応して生じる反応であり(長谷川, 2015)、派生的関係反応は、直接的な訓練が行われていない場合においても生じる反応である(Bach & Moran, 2008 武藤・吉岡・石川・熊野訳 2009)。派生的関係反応の例として、例えば、野球という競技が日本語で「野球」と書くことを学習している状態で、「Baseball」が野球という競技を指すということを学習したと

¹ RFT は、行動分析を背景としていることから、認知構造や神経構造を説明する理論ではない(長谷川, 2015; Hayes et al., 2001)。

する。その場合、「野球」と「Baseball」という文字が同じ競技を示すと、直接教えられていなくても、野球と同じ競技を指す文字の選択を求められたときに、推測から「Baseball」を選択することができる。他にも、刺激間の関係づけにより、片方の刺激の有する機能が、もう片方の刺激の機能を変換させる(木下・大月, 2011)。例えば、「Baseball」という言葉の意味を学習していないが、野球を好きな人がいるとする。その後、「Baseball」と「野球」が同じ競技を指す文字だと学習したならば、「Baseball」という文字の好感度が上がることや、「好きなスポーツは？」と聞かれた際に「Baseball」と答えることが可能となる。このような、ある機能を持つ刺激と関係づけられることで、機能を変換されることを RFT では、刺激機能の変換という(木下・大月, 2011)。刺激間の関係づけは、直接的な学習以外にも、自身の推測により成立し、反応を制御することや、成立すると片方が有する機能を変換させる(Dymond, Roche, Forsyth, Whelan, & Rhoden, 2007)。RFT では、恣意的に様々な刺激間の関係づけが行われることにより、人は複雑な言語や認知を獲得していくと想定している(Hayes et al., 2001)。そして、RFT では、生起した反応から刺激間の関係性についての分析が、RFT の基本的な分析手法となる。

RFT は、複数の刺激間で同様の機能が成立している状態を指す刺激等価性の理論を参考にし、その理論の発展系として考えられている(Hayes et al., 2001)。刺激等価性が刺激間で成立した場合、同じ刺激クラス内の刺激が提示されると、共通の反応クラスを引き起こすようになる(武藤, 2011a)。刺激等価性のパラダイムでは、実験者が用意した刺激に対して、規定された反応(反射律, 対象律, 推移律, 等価律)が維持された際に、刺激等価性が成立したと判断する(Sidman & Tailby, 1982)。一方、RFT では、等価以外の刺激間の関係性も、人の認知や言語に深く関与していると考え、比較や階層など、他の刺激間の関係性²についても分析対象としている(Hayes et al., 2001)。例えば、大小 2 つのボールを提示し、大きい方を取るように求められた場合、この 2 つのボールの大きさを比較して、選択する必要がある。この場合、2 つの大小異なるボール(刺激)間の相対的な特徴から判断する必要があり、刺激等価性の理論のみでは、説明が困難である。このような背景から RFT では、等位(等価)のみではなく、相違、反対、比較、階層など様々な刺激間の関係性を分析対象としている(Hayes et al., 2001)。

² 様々な刺激間の関係性を示す用語を RFT では、包括して関係ユニットと呼んでいる(木下・大月, 2011)。

RFT における自己評価

ブラックレッジ & モーラン (2009 木下訳)では、RFT で扱う刺激を、「一般的に人が直面する、認識する、または何らかの方法で反応を示す、人、モノまたは事象のいずれかを意味する」と、広範囲で捉えている。また例として、思考、感情、記憶、人、他者の発言や行為、音、物体、匂い、身体的感覚、味覚を挙げている(ブラックレッジ & モーラン, 2009 木下訳)。このような観点から、RFT では自分という存在も刺激として扱っている。そして、自分という存在にも、恣意的に複数の刺激が関連づけられることを想定している。例えば、「私は良い人間です」など自分に対してポジティブな発言(評価)をしている人がいるならば、その人は、自分と良いなどの肯定語を等位(自分=良い)の関係性で関係づけていると想定される。そして、自分=良いといった言語関係の関係づけが確立されている場合、自分と良いを関係づける過去の経験(例えば、頻繁に他者から賞賛されている)を通して、確立されると考えられる。また、木下・大月 (2011)では、人は自身の行動を観察し、その行動に対して言語的に反応することが可能であると述べており、その言語的反応を通して、自分と何かしらの刺激とを恣意的に関係づけることも可能と考えられている。例えば、何かしらの行動が良い結果をもたらした際に「今回、自分は良くやった」と言語的反応することで、自分と肯定語の関係づけが行われると予想される。このような状況が繰り返されることで、自分と肯定的な言語刺激を等位の関係性として学習し、自分に対する評価を求められた際に、肯定的な評価を与えると想定される。つまり、RFT における自己評価とは、良いや悪いなどの肯定や否定を示す言語的反応と自分という存在について、恣意的に学習した刺激間の関係性の程度を指すと考えられる。そして、この RFT の観点における自己評価の高い人物とは、自分と肯定的な刺激との恣意的な関係づけが成立しやすい出来事を、繰り返し経験している人物であると考えられる。

RFT の観点による自己評価は、主に臨床領域で重視されている。例えば、武藤 (2011b)では RFT の観点から、刺激間関係性に関する分析モデルを例示している。このモデルでは、パニック障害のクライアントの状況や発言を参考に、言語関係のネットワークを示している。このクライアントは、「不安が(私の)限界を越えたら、(私は)発狂してしまう」や「そのように発狂してしまうのは、私のネクラな性格によるものではないか」と発言していた。この発言から、私に対して、不安>私、発狂=私、ネクラ=私など、私を中心に複数の刺激が関係づけられていることを想定している。つまり、本人の現在の状況や自己報告から、関係づけられた自分という存在と肯定的もしくは否定的な言語刺激との関係性を推測してい

る。

自己評価における自己肯定への肯定と自己否定への否定

James (1982, 今田訳 2001)では、自己評価を自己に対する満足及び不満足と述べている。つまり James は、自己評価を自分への満足と不満足という肯定的な側面と否定的な側面の2種類を想定していた。従来、自己評価を尋ねる際に、「あなたは自分のことが好きですか?」といった肯定文を使用し、それに対する反応(回答)から測定するであろう。その一方で、「あなたは自分のことが嫌いですか?」と否定文を用いて尋ねた場合においても、同様に自己評価を測定しているといえる。つまり、自己評価は、肯定文や肯定語に対する評価(反応)と、否定文や否定語に対する評価(反応)に、2分することができる。しかしながら、肯定文に対する肯定的な評価(反応)と否定文に対する否定的な評価(反応)は、同様に自分への肯定感を尋ねており、分けることへの有用性については疑問がある。この疑問に対して、肯定語と否定語のそれぞれに対する評価を比較した桑原 (1986)の研究がある。桑原 (1986)では、性格を示す形容詞に対して、自己評価を求めた。その際に、肯定的な意味合いを示す形容詞(例えば、やさしい)と、相反する否定的な意味を示す形容詞(例えば、きびしい)を用意し、どの程度自分に当てはまるか7件法で評価を求めた。各形容詞に対する評価点を、大中小の3群に分け、大群と小群の平均値の差を分析したところ、肯定語に対する評価は、社会的外向性を示す形容詞(例えば、指導的)で差が大きく示され、一方で否定語に対する評価は、情緒的不安定を示す形容詞(例えば、なげやりな)で差が大きく示された。このことから、桑原 (1986)では、肯定語に対する肯定的な評価と否定語に対する否定的な評価は、異なるパーソナリティ像を示していると考え、肯定語に対する肯定的な評価を積極的自己肯定、否定語に対する否定的な評価を消極的自己肯定として、分けて考えることを提案した。また、自己評価感情の1つである自尊感情について、肯定文と否定文への評価を分けて分析した福留・藤田・戸谷・小林・古川・森永 (2017)がある。福留他 (2017)では、自尊感情の質問紙の順項目と逆転項目への評価を、それぞれ「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒絶」として、この2つを分けて分析している。その結果、肯定的自己像の受容は、否定的自己像の拒絶と比較して、攻撃性との正の相関が、有意に高かった。また、否定的自己像の拒絶は、肯定的自己像の受容と比較して、抑うつ・不安と負の相関が、有意に高かった。このことから、福留他(2017)は、肯定文に対する自己評価と、否定文に対する自己評価とでは、異なる心理的側面が反映され、この2つの自己評価を分ける有用性を示した。

この2つの自己評価の観点を RFT に当てはめると、自分と肯定語が等位として関係づけられるのか相違として関係づけられるのか、そして、自分と否定語が等位として関係づけられるのか、相違として関係づけられているのかということとなる。

REC モデル

刺激間の関係性について測定する最も単純な方法は、直接尋ねることである。例えば、「あなたは自分に自信がありますか？」と尋ねるとする。この際に「はい」と答える場合は、自分と自信という肯定的な属性を示す刺激との関係性が等位として確立していると解釈し、「いいえ」と答える場合は、相違として確立していると解釈するであろう。しかしながら、この場合、懸念すべき点がある。それは、直接的に人種差別や政治的思想についてなど、自分の本音を表明しにくい内容であるほど、本音を隠し社会的に望ましい回答(反応)を示す傾向が、報告されている点である(Edwards, 1957)。特に本音と建て前を使いわける日本人(Kitayama & Uchida, 2003)は、上述の質問に対して「いいえ」と答えやすいことが予想される。このように、直接的な質問から刺激間の関係性を解釈することは、回答が歪曲しやすいことに、注意する必要がある。その一方で、このような刺激間の関係性を問う際に、社会的望ましさの要因を低減させる方法もある。その方法の1つとして、ある刺激間の関係性について、即時的に評価(反応)を求める方法が挙げられる。

RFT では、刺激が提示されてから、関係反応が生起するまでの時間の経過により、関係反応の種類が変化するとしている。この変化に着目するモデルとして、Relational Elaboration and Coherence Model (Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, Stewart, & Boles 2010; 以下、REC モデルとする)がある。REC モデルでは関係反応を、刺激が提示されてから即時的に生じる Brief and immediate relational responses (以下、BIRRs とする)と、ある程度の時間の経過後に生じる Extended and elaborated relational responses (以下、EERRs とする)に分けている(Hughes & Barnes-Holmes, 2013)。このモデルでは、刺激が提示されてから反応までの時間の経過を厳密に定義してはいないが、時間の経過により BIRRs から EERRs への変化することを想定している³。この2つの関係反応の例として、質問紙に対する回答を EERRs、タイムプレッシャー下により生じる即時的な反応を BIRRs として挙げている(Hughes & Barnes-Holmes, 2013)。そのため、関係反応を分析対象とす

³ Barnes-Holmes et al. (2010a)では、BIRRs を刺激が提示されてから数秒後に生じる反応として想定している。

る際に、測定する方法で抽出される関係反応に違いがあるとしている。また BIRRs は、EERRs と比較して上述した社会的に望ましい回答(反応)への歪曲の影響を受けにくいとされている(Hughes & Barnes-Holmes, 2013)。つまり、刺激が提示されてから、自己評価の反応が生起するまでの時間が長くなるほど、社会的な望ましさに影響する反応が生起する。

本稿の主旨について

上述した REC モデルの BIRRs の観点から、自己評価に関する研究も実施されており、自分と肯定語の言語関係が等位である者ほど、心理的健康度が高いことが明らかとなっている(Timko, England, Herbert, & Forman, 2010)。しかしながら、質問紙など EERRs の観点からも、自分への肯定感を示す者ほど、心理的健康度が高いと報告されている(Rosenberg & Owens, 2001)。その一方で、BIRRs で測定した自己評価が、ネガティブな出来事の影響を緩衝する(和らげる)との報告がある(Greenwald & Farnham, 2000)。そして、この傾向は EERRs で測定した自己評価では示されていない(Greenwald & Farnham, 2000)。しかしながら、BIRRs で測定した自己評価は、自己肯定への肯定と自己否定への否定の、どちらが影響しているかの、検討はなされていない。

そこで、本稿では、RFT の REC モデルの BIRRs 観点から、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」のそれぞれの刺激間の関係性とその強度を測定する意義について、主に緩衝機能の観点から論じていく。また、BIRRs に基づく自己評価を対象とした緩衝機能の研究では、自己評価を自己評価感情の 1 つである自尊感情として位置付けている。そのため、本稿では、自分への肯定感や否定感に関する刺激間の関係性を、自尊感情として取り扱っていく。

本稿は大きく分けて序論部、本論部、結論部の 3 部で構成されている。本論部では、自尊感情や RFT の観点から BIRRs により自尊感情を測定する尺度 Implicit Relational Assessment Procedure (以下、IRAP とする; Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, Power, Hayden, Milne, & Stewart, 2006) の先行研究を概観し、検討すべき点を挙げる。本論部では、検討点を明らかにするために実施した 4 つの研究について示す。そして、結論部では、本研究で得られた結果を総括し、当該領域を研究する意義について述べる。

第 2 章 自尊感情

従来の自尊感情の測定法

自尊感情(Self-esteem)⁴とは、「自己に対しての肯定的、あるいは否定的な態度」(Rosenberg, 1965)と定義されている。他にも、「自分が価値のある、尊敬されるべき、優れた人間であるという感情」(遠藤・井上・蘭, 1992), 「自分の自己概念がどれくらい肯定的に知覚されているか、その特性や質の程度」(VandenBos, 2007), 「自己に対する主観的な評価のうち、自分自身を好ましい存在だと感じたり、有能であると思ったりする程度」(Zeigler-Hill, 2013) など、複数の定義が提唱されている。自尊感情の定義について、遠藤(2013)では、「自分自身を基本的に良い人間、価値ある存在だと感じていることであるという点で共通している」と述べている。

従来、自尊感情を対象とした研究では、質問紙により自尊感情を測定している。自尊感情の質問紙は、上述した定義に当てはまるような項目(例えば、「自分に対して肯定的である」⁵)で構成されており、各項目に対して、どの程度当てはまっているかを、いくつかの選択肢の中から選び回答する。自尊感情を測定する質問紙の中でも、最も多く用いられているのは、Rosenberg (1965)が作成した10項目で構成された質問紙であろう。本邦においても邦訳されたものが複数存在している⁶ (山本・松井・山成 1982; 星野, 1970; 安藤, 1987)。また、Rosenberg (1965)の質問紙は、肯定文の順項目と否定文の逆転項目で構成されており、2因子の構造となっている(Carmines & Zeller, 1979)。この構造に着目し、順項目を自分への肯定感の肯定、逆項目を自分への否定感の否定として、個別に分析している研究もある(福留他, 2017)。

他にも質問項目を1項目のみ(Robins, Hendin, & Trzesniewski, 2001), もしくは2項目(箕浦・成田, 2013)のみに減らしたものや、時間や状況を通して比較的安定した持続的な自尊感情を示す特性自尊感情(trait self-esteem)と、個人が一瞬一瞬に経験する出来事や状況によって短時間のうちに急速に変化する自尊感情を示す状態自尊感情(state self-esteem)とに、自尊感情の性質を分けて、測定する質問紙も存在する(阿部・今野, 2005)。また、継続的に自尊感情の質問紙への回答を求め、その変化を検証する方法もある(Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991)。

⁴ 本研究における「自尊感情」は、すべて英文における“Self-esteem”のことを指している。

“Self-esteem”の論文によっては「自尊心」や「自己評価」と邦訳したり「セルフ・エスティーム」とカタカナ表記で示したりと「自尊感情」以外の言葉で表現する場合もある(潮村, 2008)。本稿では、これらを「自尊感情」で統一する。

⁵ この項目は、Rosenberg (1965)を翻訳した山本他(1982)の質問紙の1項目である。

⁶ 並川・脇田・野口(2006)の調査時点では、山本他(1982)が本邦で最も用いられているとの報告があった。

一般的に、自尊感情を対象とした研究では、質問紙で自尊感情を測定し、自尊感情の高低と心理的特性との関係性について、着目している。先行研究を概観すると、自尊感情の得点が高い者ほど、抑うつや不安といったネガティブな感情が低い、人生への満足度といったポジティブな感情が高い、精神的な回復力といわれるレジリエンスと正の相関があるとの報告がある (O'Brien, Bartoletti, Leitzel, & O'Brien, 2006; Rosenberg & Owens, 2001; 小塩・中谷・金子・長峰, 2002; Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Pinel, Simon, & Jordan, 1993)。つまり、「自分は価値のある人間だ」と自己評価が肯定的である者ほど、心理的な健康度が高い人間であり、自尊感情は心理的な適応指標として考えられてきた。

その一方で、自尊感情が高い者ほど社会的な不適応さを促進するという報告もある。例えば、自尊感情が高く自己愛も高い者の攻撃性が強くなる (Bushman, Baumeister, Thomaes, Ryu, Begeer, & West, 2009) ことや、内集団をひいきしやすくなる (Rubin & Hewstone, 1998) ことが報告されている。このことから、自尊感情の高さは適応指標とのみではなく、不適応指標とも関連していることが明らかとなっている (遠藤, 1999)。

さらに、質問紙などの自己報告式尺度は、社会的に望ましい回答へと歪曲されるとの指摘もある (Edwards, 1953)。つまり、質問紙の結果は、自身が生活する社会的な習慣や文脈に影響を受けやすい。実際に Schmitt & Allik (2005) では、53 カ国の国民に対して、自尊感情を測定したところ、国ごとに差が示されており、日本人は低い自尊感情を示していた。潮村 (2008) では、各国特有の望ましさとバイアスが入り、純粋に自尊感情のみを測定することが難しいと指摘している。また、社会的望ましさの影響は、自身の氏名を無記名で評価させた状況においても影響を受けるとの指摘がある (Edwards, 1953; 野口, 1964)。

このように自尊感情を高めることや、自尊感情の測定法については、慎重に考える必要があると指摘されており、そもそもの自尊感情を研究することに対する有用性についても見直す動きがある (佐藤, 2016)。

潜在的自尊感情

自己報告式の尺度を用いた自尊感情に問題点が挙げられている中で、質問紙のように直接質問に答えるのではなく、ある特定の課題の結果から、自尊感情を測定する方法が開発されていく。直接的な質問を行わずに、ある特定の態度や認知を測定する尺度を潜在的尺度と言い、この尺度を用いて測定される自尊感情を、潜在的自尊感情 (Implicit self-esteem; 以下、ISE とする) と言う (Greenwald & Banaji, 1995; Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-

Browne, & Correll, 2003)。一方、質問紙など自己報告式尺度で測定する自尊感情を顕在的自尊感情(Explicit self-esteem; 以下、ESE とする)と言う(Jordan et al., 2003)。Jordan et al. (2003)では、ESE は質問紙などの自己報告式尺度を用いた意図した自己評価、ISE は潜在的尺度を用いた意識外の自己評価と述べている。また Bosson, Swann, and Pennebaker (2000)では、ISE を「自己に関連した刺激に対する自発的な反応を導く非意識的で自動的な自己評価」と述べている。ISE を対象とする研究の方向性を大別すると、ISE と ESE の得点の解離に着目した研究と、ISE と ESE の得点からそれぞれの機能の違いに着目した研究とに分けられる。

ISE と ESE の得点の解離に着目した研究

まず初めに、ISE と ESE の得点の解離について検証した研究から概観していく。当該研究では、ISE 及び ESE の得点に基準を設けて、4 つの群(ISE 高 ESE 高群、ISE 高 ESE 低群、ISE 低 ESE 高群、ISE 低 ESE 低群)に振り分け、各群の比較を行なっている(Jordan et al., 2003)。群の振り分けの基準に関しては、1SD(Jordan et al., 2003)や 0.25SD(片受・濱, 2016)、中央値(原島・小口, 2007)で分けるなど、各研究で異なる基準を設けている。

2 つの自尊感情(ISE と ESE)の解離に着目する研究の着想は、ESE の得点が高い者が、心理的に適応的な指標と関連性を示す一方で、不適応の指標とも関連性を示すという知見への注目から始まっている(Jordan et al., 2003)。Jordan et al. (2003)では、高い ESE を示す者の中に ISE も高く安定した自尊感情の者と、ISE は低い防衛的な自尊感情を有している者の存在を指摘した。この仮説を検証するために、ESE が高い者の ISE の高低に着目し、自己愛、内集団ひいき、認知的不協和との関連性について大学生を対象に検証した。その結果、ESE が高い者の中で、ISE が低い者は高い者と比較して、自己愛の傾向が強く、内集団ひいきを行いやすく、自分の評価と他者の評価が不一致の場合その解消をより試みていた。Jordan et al. (2003)では ISE が高く、ESE が低い者を防衛的高自尊感情、両方の自尊感情が高い者を安定的高自尊感情と名付けて分類した。そして、防衛的高自尊感情の者は、個人内で ESE と ISE の高低に不一致がある場合、その不一致を解消しようとして防衛的反応が生じるとされている(Jordan et al. 2003)。Jordan et al (2003)の報告以降、ISE と ESE の不一致の特徴を明らかにするために、様々な研究が行なわれていく。

まず、Jordan et al (2003)で明らかとなった、防衛的高自尊感情者の特徴である自己愛・内集団ひいきについての追試について述べていく。原口・小島 (2007)や藤井 (2014)では、

日本人の大学生を対象として Jordan et al. (2003)の追試を行ったところ、防衛的高自尊感情を示した者に、内集団ひいきの傾向が見られた。これは防衛的高自尊感情者の特徴が、日本人大学生にも示されるということを示している。また自己愛に関して、防衛的高自尊感情者は ISE の低さを補うために、ESE が高まるというマスクモデルを、Bosson, Lakey, Campbell, Zeigler-Hill, Jordan, & Kernis (2008)が提唱し、関連する実験を対象にメタ分析を実施した。しかしながら、マスクモデルを支持する分析結果は示されなかった。また川崎・小玉 (2010)で日本人大学生を対象に追試を行ったが、結果は再現されなかった。

他にも、2つの自尊感情間の解離のタイプとして ISE が高く、ESE が低い者も、不適応の特徴を有していることが明らかとなっている。この解離の傾向を、Schröder-Abé, Rudolph, Wiesner, & Schütz (2007)では、高い自尊感情を根源として持っていたが、生活の中で自尊感情が、低まるような出来事を経験し、徐々に低減されていった状態と想定し、ダメージ型の自尊感情と名付けている⁷。このダメージ型の自尊感情者の特徴を検証しようと、Schröder-Abé et al. (2007)では、否定的な印象を与えるようなフィードバックを文章で提示し、その内容を読む時間を指標とした。その結果、ダメージ型の自尊感情を示している者ほど、読む時間が短くなる傾向を示した(Schröder-Abé et al., 2007)。このことから、ダメージ型の自尊感情の者は、他者からの拒絶を意味する否定的な社会的情報を避けやすいことが示唆されている。他にもダメージ型の自尊感情の者は、抑うつや孤独感、そして希死念慮を感じやすい傾向が示された(Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers, 2012; Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers, 2013; Kim & Moore, 2019)。また精神障害とダメージ型の自尊感情者との関係性についても検証が行われている。境界性人格障害者を対象に行った Vater, Schröder-Abé, Schütz, Lammers, and Roepke (2010)の研究では、ダメージ型の自尊感情を示す者ほど、重篤度が高いことを示している。

さらに、ISE と ESE の解離の大きさにも着目されており、ISE と ESE の得点間の解離が大きい者ほど、不適応の傾向が強まるとの報告がある。市川・望月 (2015)では、ISE と ESE の得点間の解離が大きい者ほど、境界性パーソナリティの指標と、回避性パーソナリティの指標の得点が高くなると報告している。また、稲垣・澤田 (2018)では、得点間の解離の差が大きい者ほど、他者軽視の傾向が強いと報告している。

⁷ 「ダメージ型の自尊感情」の命名に関して、Schröder-Abé et al. (2007)では Millon & Davis (1996)や Volkan & Ast (1994)を参考にしている。

ISE と ESE の得点からそれぞれの機能に着目した研究

次に、ISE と ESE の得点からそれぞれの機能に着目した研究を概観していく。当該研究では、実験参加者の属性による ISE と ESE の得点の違いや、2つの自尊感情と他の指標との関連性について着目している。

Yamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, Shiomura, Kobayashi, Cai, and Krendl (2007)では日本人、アメリカ人、中国人の大学生を対象に、ESE と ISE をそれぞれ測定し、国ごとに比較検討した。その結果、ESE の得点は、日本人大学生が最も低くかったものの、ISE の得点は各国間で差が見られなかったことや、条件を変えることで日本人大学生の得点が最も高く示されることが明らかとなった。この結果から、ISE と ESE は、異なる傾向を示す指標であることが明らかとなっている。

またESEの研究と同様に、ISEの高低と心理的適応についての検証も実施されている。その中でも、ISEが高い者は、ネガティブな刺激が提示された際に、その影響を緩衝する(和らげる)機能を有しているとの報告がある。Greenwald & Farnham (2000)では、高難易度の課題と低難易度の課題を用意し、大学生の実験参加者をそれぞれの難易度に振り分け、課題終了後に得点をフィードバックした。この研究におけるネガティブな刺激とは、高難易度課題を実施することによる、得点の低さを指している。そして、フィードバック後の反応(成功失敗の自己評価、現在の気分、課題で測定された能力に対する重要性、課題を再度行った場合の得点)と2つの自尊感情(ISEとESE)との関連性を検証した。その結果、高難易度課題を実施した実験参加者の中で、ISEが高い者ほど、課題で測定された能力が重要であると答えやすく、かつ同じ課題を再度行った場合より高い得点を得ることができると答える傾向を示した。その一方でESEでは、ISEのような傾向を示さなかった。ネガティブなフィードバックが提示されたにも関わらず、このような結果を示したことから Greenwald and Farnham (2000)では、ISEの高さは、ネガティブな刺激を緩衝する機能があると提唱した。この研究の追試として、藤井 (2016)では、韓国人女子大学生を対象に中間及び期末テストに対して、感じる困難度の評定から高群と低群に振り分け、抑うつ感・不安感やテストの重要性と、2つの自尊感情(ISEとESE)との関連性を検証した。その結果、中間テストでは示されなかったものの、期末テストではISEが高い者ほど、抑うつ感・不安感が低い傾向を示した。この結果に藤井 (2016)では、中間及び期末テストに対する抑うつ感・不安感と課題の困難度について比較したところ、中間テストより期末テストを高い得点をつけており、よりネガティブになりやすい状況下で、ISEの緩衝機能が作用

すると考察している。他にもSchmeichel, Gailliot, Filardo, McGregor, Gitter, and Baumeister (2009)では、ISEの高い者ほど死の恐怖を想像させた際に、その心理的な恐怖から回復しやすいとの報告をしている。

ISEが高い者ほど、ネガティブな刺激の影響を緩衝するという肯定的な側面が報告されている一方で、ISEが高い者は、他者軽視(小塩・西野・速水, 2009)や一定の条件下で他者の不幸を喜ぶ感情であるシャーデンフロイデ(藤井・澤田, 2014)の傾向が示されており、ISEにおいてもESEと同様に否定的な側面についても報告がなされている。

また、2つの自尊感情が予測する行動の違いに着目している研究もある。Rudolph, Schröder-Abé, Riketta, and Schütz (2010)では、2つの自尊感情が、それぞれ異なる自信と関連する行動を予測すると仮説を立て、その検証を行っている。自己報告式尺度で測定されるESEは、意識的に統制された行動を予測し、潜在的尺度で測定されるISEは、自動的に自発した行動を予測すると仮説を立てた。対象となる行動は、3分間の口頭発表場面における非言語行動であり、自発的な行動(唇をなめる、噛むなどの神経質な唇の動きや、指遊びをするなどの神経質な手の動作)及び統制的な行動(特定の語彙を強調する際などの手の動作)の2種類に分け、2種類の自尊感情との関連性を検証した。その結果、自発的な行動は、ISEと相関を示し、ISEが高い者ほどその動作が少ない傾向を示した。一方で、ESEは、統制的な行動との相関を示した。このことから、2つの自尊感情は、それぞれ予測する行動に違いがあることを示唆した。また、ISEと行動指標を検証したHolland, Wennekers, Bijlstra, Jongenelen, and van Knippenberg (2009)の研究3では、人が自身の名前を好む傾向を利用し、参加者の名前に含まれる文字を含む、解決不可能なアナグラム課題を継続する時間と、ISEとの関連性について検証した。その結果、ISEが高い者ほど、解決不可能にも関わらず、長時間アナグラム課題を続ける傾向が示された。

以上のように、ISEはESEと異なる機能を有していると考えられており、ISEとESEが予測する変数の違いや、ISE独自の特性について検証がなされている。

REC モデルにおける ISE と ESE

2つの自尊感情は、ISEが無意識の自己評価、ESEが意識的な自己評価に基づく自尊感情として、それぞれ分けて考えられている。そして、ISEは潜在的尺度、ESEは質問紙により測定される。上述したRECモデルの観点からでは、潜在的尺度で測定するISEをBIRRs、質問紙で測定するESEをEERRsとして捉えられる。

その一方で、ISE を測定する全ての尺度が BIRRs により測定しているわけではない。ISE を測定する尺度には、タイムプレッシャーを与える尺度と与えない尺度とがあり、与えない尺度は、BIRRs の定義に当てはまらなないと考えられる。次の章では、ISE を測定する潜在的尺度について述べていく。

第 3 章 潜在的自尊感情の測定法

測定法概要

ISE を測定する尺度は、文字や数字に対する選好度を指標とする尺度と、刺激が提示されてから反応までの時間(反応潜時)を指標とする尺度の 2 種類がある(Bosson et al., 2000)。まず、文字や数字の選好度を指標とする尺度について述べていく。当該尺度において、代表とされる尺度に Name Letter Task (以下、NLT とする; Nuttin, 1985)がある。NLT とは、アルファベットや 50 音など、文字に対する選好度を点数で評価し、ISE を測定する尺度である。この方法では、自分の名前に含まれる文字に対して、高い点数をつけるほど、ISE が高いと解釈する(Nuttin, 1985)。NLT から派生して、イニシャルのみを分析対象とするイニシャル選好課題や、数字の選好から誕生日に関連する数字を対象とする誕生日選好課題、星座を対象とする星座選好課題、直接名前の選好を求める方法などがある(Bosson et al., 2000; 津田・伊藤, 2012; 丹藤, 2018; 藤井, 2016)。

次に、刺激が提示されてから反応までの時間(反応潜時)を、指標とする尺度について述べていく。当該尺度において、代表的な尺度に Implicit Association Test(以下 IAT とする; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)がある。IAT は、刺激の分類課題を通じて、カテゴリーと属性という 2 種類の概念間の連合強度を測定するための、コンピュータ課題として開発された⁸(Greenwald et al., 1998)。IAT で自尊感情を測定する場合、例えば、カテゴリーとして「自分」と「他者」、属性として肯定語と否定語(例えば、「快い」と「不快」)を使用する。そして、それらに関連する刺激語(例えば、「私」、「あなた」、「好き」、「嫌い」など)をキー押しで分類させる。例えば、刺激語に「私」が提示された際には、カテゴリーの「自分」が提示されている位置を参照し、その位置と対応するキーを押すことが求められる。ISE を測定する際の、IAT のモニター上の刺激の提示の例を、Figure 1 に示す。

このとき、「自分—否定語」と「他者—肯定語」を組み合わせたときより(Figure 1 におけ

⁸ コンピュータ上以外でも、紙面上で実施する紙筆版 IAT も存在する(小塩他, 2009)。本稿において IAT と表記する場合は、コンピュータ式の IAT を指すこととする。

右側の黒枠を指す)も、「自分—肯定語」と「他者—否定語」を組み合わせたときに(Figure 1における左側の黒枠を指す)刺激語の分類の反応潜時が短くなるのであれば、その人にとっては、「自分」と肯定語及び「他者」と否定語という概念間の連語が強いと解釈し、この連語が強い(分類する速度が早い)ほど、ISEが高いと考えられる。つまり、IATを使用した場合ISEの高い者とは、自己肯定的でかつ他者否定的であると言える。そして、大学生を対象とする場合、生活している国の文化に関わらず自己肯定感バイアス(「自分—肯定語」と「他者—否定語」の組み合わせが提示されている際の分類が早い)を示すことが明らかとなっている(Yamaguchi et al., 2007)。一方で、「自分」と対となる刺激として非特定の「他者」ではなく「親友」や「ヒトラー」、「サンタ」など特定の他者に変えると、他者の好感度によって、IATの反応潜時も変化する(Karpinski, 2004)。またIATは、ISE以外にも、偏見やステレオタイプといった、公共の場で自身の態度を表明しにくいテーマも取り扱う、汎用性の高い尺度である(Gawronski & De Houwer, 2014)。多数の領域で行われている分、IATを用いた研究は数多く存在しており、潜在的側面を測定する尺度の中でも高い信頼性を示している(Gawronski & De Houwer, 2014)。

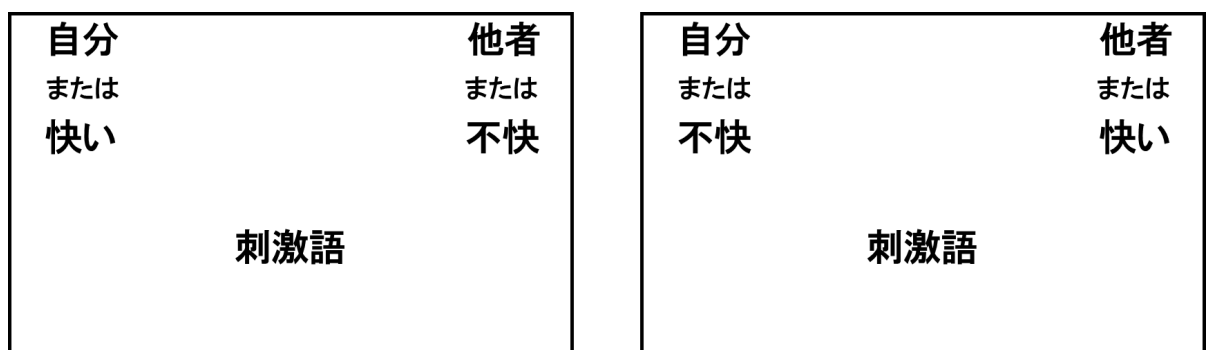


Figure 1. ISE を測定する際の IAT における刺激の提示方法の例。Figure 1 では、黒枠をコンピュータのモニターとしている。以下、Figure において黒枠を用いる場合、モニターを表現していることとする。左側の黒枠は「自分—肯定語」と「他者—否定語」の組み合わせであり、右側の黒枠は「自分—否定語」と「他者—肯定語」の組み合わせである。モニター左右上にそれぞれ、カテゴリーと属性を組み合わせ提示する。2つの黒枠は、モニター上にそれぞれ個別に提示し、刺激語分類の反応潜時が記録される。モニター中央部の刺激語には、「私」、「あなた」、「好き」、「嫌い」など左右上の何れかの刺激に関連する刺激語が提示される。

IATでISEを測定する場合は、上述したように、「自分—肯定語」と「他者—否定語」の組み合わせと、「自分—否定語」と「他者—肯定語」の組み合わせに対する分類課題を通して測定する。そして、「自分—肯定語（他者—否定語）」が提示されている際に、刺激語の分類が素早いと、ISEが高いと解釈される。その一方で、この場合「自分—肯定語」の影響が強いのか、もしくは「他者—否定語」の影響が強いのかについては、明確に判断できない。この点に関してIATには、1種類のカテゴリに対して2種類の属性を個別に提示し、分類課題の反応潜時を比較するSingle-Target IAT(以下、ST-IATとする; Bluemke & Friese 2008)などの方法がある。例えばカテゴリに「自分」、属性に肯定語と否定語を使用する場合、「自分—肯定語」と「自分—否定語」の組み合わせをそれぞれ提示し、刺激語の分類を実施する。そして、2つの組み合わせ間の反応潜時の差を基盤として、得点を算出する(Bluemke & Friese 2008; Figure 2)。ST-IATでISEを測定する場合、「自分—肯定語」と「自分—否定語」の組み合わせに対する連合強度の比較となり、自己肯定と自己否定の相対的な比較から結果を算出する。そのため、「他者」の要因を除くことが可能となる。

他にも、反応潜時を指標とする尺度として、Extrinsic Affective Simon Task(以下、EASTとする; De Houwer, 2003)やGo No-go Association Test (以下、GNATとする; Nosek & Banaji, 2001)などがある。

大別した2つの種類の尺度間では指標や測定法が異なっているが、一貫してBosson et al. (2000)の「自己に関連した刺激に対する自発的な反応を導く非意識的で自動的な自己評価」を参考に設定されている。

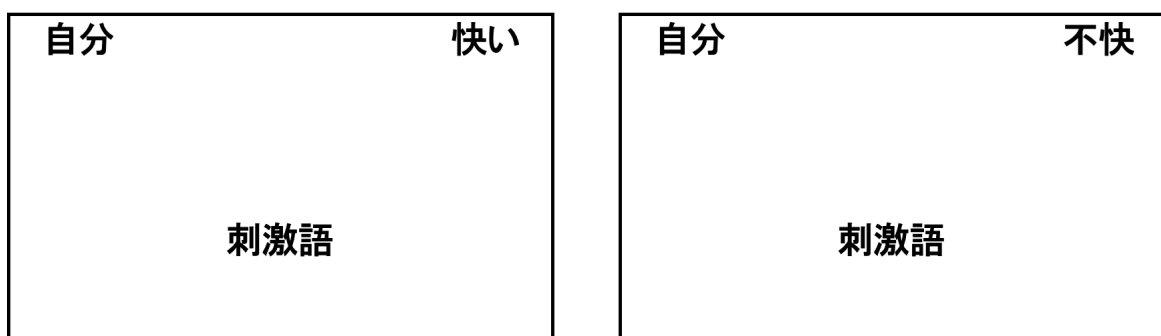


Figure 2. ISEを測定する際のST-IATにおける刺激の提示方法の例。ST-IATでは、カテゴリの「自分」のみを抽出し、「他者」の要因を排除してISEを測定することが可能となる。

また Bosson et al. (2000)では、複数ある ISE の測定法の比較を行っている。その結果 IAT, イニシャル選好課題, 誕生日選好課題が高い再検査信頼性と時間的安定性が示された。加えて, Bosson et al. (2000)では, IAT と NLT の相関が低いことを報告している。同じ ISE を測定しているにも関わらず, 相関が低いということは, それぞれの測定方法で, 異なる ISE の側面を捉えていることが示唆されている。その一方で, どちらの尺度を用いた場合でも, 同様の傾向を報告している研究もある。防衛的高自尊感情の特徴の 1 つである内集団ひいきを検証するに際して, 原島・小島(2007)では IAT, 藤井(2014)では NLT を測定法として用いているが, 同様の傾向が示された。他にも, De Raedt, Schacht, Franck and De Houwer (2006)では, IAT, NLT, EAST の 3 つの異なる測定法を用いて, うつ病者の ISE を測定したところ, 全ての測定法で自己肯定感バイアスが見られた。このことから, どの尺度を用いた場合においても, 同様の知見が得られる傾向がある。

測定法ごとの質問紙との関係性

次に ISE と質問紙の関係性について述べていく。始めに, ISE と ESE の関係性について述べていく。ISE と ESE の相関については, 弱い相関もしくは相関が示されないことが明らかとなっている(Bosson et al., 2000)。このことから, 2 つの自尊感情は, 独立していると考えられている(Jordan et al., 2003)。Jordan et al. (2003)では, ISE と ESE の関係性を, Wilson, Linsey, and Schooler (2000)の二重態度モデルを参考に説明している。二重態度モデルによると, 1 つの概念に対して人は, 顕在的な態度と潜在的な態度の 2 つを態度を有していると述べており, 自尊感情についても ISE と ESE の 2 つの態度の存在がしていると仮定している。このモデルは, 研究結果にも現れており, Greenwald and Farnham (2000)や藤井 (2016)のように, ISE のみ高難易度課題後のネガティブなフィードバックに対して, その影響を緩衝していることや, Rudolph et al. (2010)のように, 自発的な行動を ISE が予測し, 統制的な行動を ESE が予測していることなど, ISE と ESE で異なる側面を有していることを示唆している。

ISE の得点の操作

ISE の研究では, ISE を操作する研究についても行われており, その研究を通して ISE の学習過程についての考察がなされている。Baccus, Baldwin, and Packer (2004)では, ISE を刺激間の連合学習によるものと捉え, 自身と関連する刺激(名前や誕生日など)と社会的に

肯定感を与える刺激(Baccus et al. 2004 では、笑顔の写真を刺激として使用した)を継時的に提示した。その結果、上述した手続きを受けた実験群は、統制群(笑顔、渋面、ニュートラルな表情の写真が、それぞれ刺激として提示された)と比較して、IAT と NLT を合わせた ISE の得点が高く示された。この結果から、Baccus et al. (2004)では、ISE が古典的条件づけ(もしくは評価条件づけ)により学習されると考察している。この結果は、Dijksterhuis (2004)でも同様に報告されており、ISE が自分と肯定的な刺激との連合を通して、学習されていくことを支持している。

RFT 及び REC モデルの観点からみた潜在的尺度

上述したように ISE を測定する尺度は、大きく分けると 2 種類に分けられる。その中でも RFT の観点からでは、刺激間の連合強度について測定する IAT との親和性が高いと考えられる。IAT が測定する刺激間の連合強度は、RFT の用語に置き換えた場合、刺激間の関係性を等位の関係づけとして、測定していると言える。また、REC モデルの観点からでは、タイムプレッシャー下での即時的な反応を求めることから、IAT における反応は BIRRs として考えられている(Barnes-Holmes et al., 2010a)。

その一方で RFT の観点からは、IAT ではその測定法により等位の関係性しか測定できないこととなる。例えば「自分—否定語」の刺激間の関係性が、相違で関係づけられている場合、結果として示すことができない。他にも IAT では、それぞれの刺激間を個別に検討することができないという指摘がある(Stewart, Rogers, Pilch, Stewart, Barnes-Holmes, & Westermann, 2017)。ST-IAT を使用することで、「他者」の要因を排除することはできるが、自己肯定と自己否定の相対的な比較から結果を算出することで、自己肯定と自己否定を分けて検討することができない。ESE を研究対象とした福留他 (2017)では、自分への肯定感と否定感は別の要因として想定し、それぞれの自己評価を分けることへの有用性を報告している。

これらの背景から、RFT で重視している刺激間の関係性について着目する潜在的尺度として IRAP が開発された。次の章では、IRAP について述べていく。

第 4 章 Implicit Relational Assessment Procedure

第 1 節 IRAP 概要

IRAP とは、IAT と RFT を参考に開発された、コンピュータ上で刺激間の関係性とその

強度を、測定する潜在的尺度である(Barnes-Holmes et al., 2006)。IRAP ではモニター上部(ラベル刺激)と中央部(ターゲット刺激)に提示された刺激の組み合わせに対して、モニター左右下に提示される2つの選択肢から、キー押しによる選択を行うまでの反応潜時を基に、ラベル刺激とターゲット刺激の刺激間の関係性と強度を測定する(Barnes-Holmes et al., 2006; Figure 3)。

一般的な IRAP では、ラベル刺激に2種類(例えば、「安心」と「不安」)、ターゲット刺激に2つの属性(例えば、肯定語と否定語)を6種類ずつ、選択肢に2種類(例えば「はい」と「いいえ」)使用する⁹。ラベル刺激の2種類とターゲット刺激の2属性を組み合わせ、4つの試行タイプ(例えば「安心—肯定語」、「安心—否定語」、「不安—肯定語」、「不安—否定語」; Figure 4)を設定する。4つの試行タイプのうち、何れかがモニター上に提示され、選択肢の中から正答のキーを押すまでの反応潜時を記録する。正答の選択については、提示された刺激の組み合わせと、2種類の条件によって設定される。

IRAP における2種類の条件は、それぞれを一致条件、不一致条件と呼ぶ。一致条件とは、ラベル刺激とターゲット刺激の組み合わせに対し、学習履歴と一致している選択が正解となる条件である。

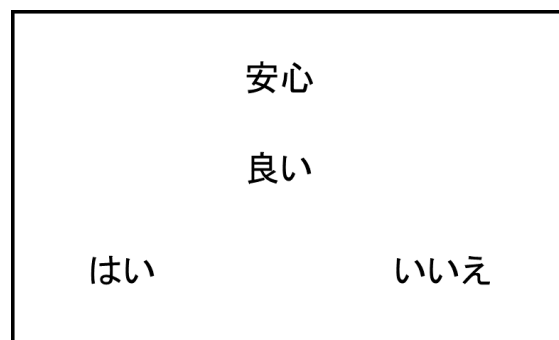


Figure 3. IRAP 刺激の配置の例。モニター上部にラベル刺激(Figure 3 では「安心」)、モニター中央部にターゲット刺激(Figure 3 では「良い」)、モニター左右下に選択肢(Figure 3 では「はい」と「いいえ」)が配置される。左右下の選択肢は、キー押しでの選択が求められる。

⁹ 多くの IRAP では、ターゲット刺激に2属性12種類を用いているが、研究によって、12種類より多く用いる場合(Leech, Barnes-Holmes, & Madden, 2016)や少なく用いる場合(Power, Barnes-Holmes, & Barnes-Holmes, 2009)がある。

例えば、ラベル刺激に「安心」、ターゲット刺激に肯定語が提示された(Figure 4 の左上の試行タイプが該当する)際に、条件が一致条件であるならば、選択肢は「はい」が正解となる。一方、不一致条件とは、一致条件と逆の選択肢、つまり学習履歴と一致しない選択肢が正解となる条件である。例えば、前述した組み合わせと同様の刺激が提示された際に、条件が不一致条件であるならば、選択肢は「いいえ」が正解となる。

ラベル刺激とターゲット刺激のすべての組み合わせが提示された後に、条件の変更を告げる教示が提示され、正答と誤答が入れ替わる。自身の学習履歴と一致する条件において選択肢が素早くなると仮定し、この性質を利用して刺激間の関係性と強さを測定する(Barnes-Holmes et al., 2006)。

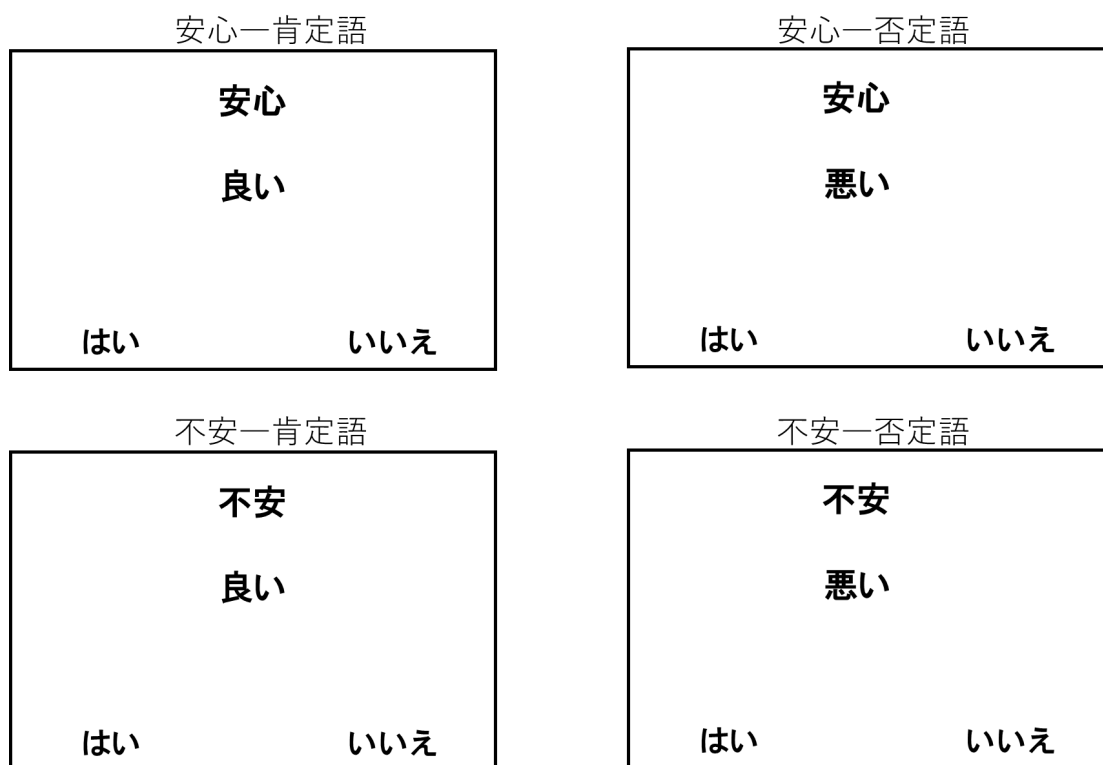


Figure 4. IRAP の 4 つの試行タイプ(刺激ごとの組み合わせ)の例。各黒枠の上に記載されている○○—○○語は、4 つの試行タイプを表しており、左側がラベル刺激の種類、右側がターゲット刺激の属性となる。この表記は、以下の Figure においても同様とする。モニター上には、この 4 つの黒枠の内の 1 つを提示する。そして、正答を選択すると、他の黒枠の刺激を提示する。例示している「良い」や「悪い」には、設定したターゲット刺激の何れかが提示される。

また、IRAPの研究における一致条件と不一致条件という表記に関しては、IRAPを実施する参加者や測定対象により、どちらの条件が学習履歴と、一致しているのか及び一致していないのかが、研究の結果により明らかとなる場合がある。そのため、一致条件や不一致条件という表記以外にも、研究で使用するラベル刺激の種類とターゲット刺激の属性を表記する場合もある¹⁰(Barnes-Holmes, Murphy, Barnes-Holmes, & Stewart, 2010)。

IRAPの手続き

一般的なIRAPでは、正答の選択を行うまでを1試行として、1ブロック24試行¹¹としている。1ブロック終了ごとに条件を変更し、正答と誤答の設定も入れ替わる。2つの条件を、1ブロックずつ行うことを1セットとしている。正答の選択を行った場合、400ms後に次の刺激の組み合わせが提示される。誤答の選択を行った場合ターゲット刺激の下に赤い「x」印が提示され、その後正答の選択を行った場合400ms後に次の刺激が提示される。

またIRAPには練習フェイズと本番フェイズを設けており、練習フェイズ内にて1セット内の結果が、設定された反応潜時の中央値¹²と正答率を達成した場合、本番フェイズへと移行する。練習フェイズは回数が設けられており、既定の回数までに条件を達成できなかった場合、分析対象から除外となる。練習フェイズから本番フェイズへの移行基準は、1ブロック(連続する2つの条件)の結果が該当する。反応潜時の中央値と正答率の基準は、研究によって異なっている。反応潜時の中央値は2000ms, 2500ms, 3000msで設定され(Barnes-Holmes et al., 2010b; Stewart et al., 2017)、正答率は80%, 75%, 70%の設定されていることが多い¹³(Nicholson, & Barnes-Holmes, 2012; Murphy, MacCarthaigh, & Barnes-Holmes, 2014; Campbell, Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, & Stewart, 2011)。基準を低めることで、除外率を下げることはできるが、反応時間の中央値を3000msの設定で行うより、2000msの設定で行う方が、IRAPの得点(詳しくは後述とする)と信頼性が高まると

¹⁰ 条件名について、例えばラベル刺激がXとY、ターゲット刺激の属性を肯定と否定とする場合、pro-X/anti-Y条件とpro-Y/anti-X条件と表記される場合が多い。

¹¹ 1ブロック24試行は一般的なIRAPにおける、ラベル刺激2種類ターゲット刺激12種類のすべての刺激の組み合わせが提示されることを仮定している。ターゲット刺激に用いる刺激の種類の数によっては、この1ブロックを24試行以上とする場合もある(Barnes-Holmes et al., 2010b)。

¹² 一般的には中央値としているが、平均値としている研究もある(Stewart et al., 2017)。

¹³ 初期のIRAPでは、練習フェイズから本番フェイズへの移行基準を設けていない研究もある(Vahey, Barnes-Holmes, Barnes-Holmes, & Stewart, 2009)。

の報告がある(Barnes-Holmes et al., 2010b)。

IRAPの結果の示し方

IRAPの結果は、本番フェイズ内の反応潜時を D-algorithm によって変換した D-IRAP 得点で示す(Barnes-Holmes et al., 2010a)。D-algorithm とは、各々の参加者の認知機能等による反応潜時のばらつきを制御するために Greenwald, Nosek, & Banaji (2003)が、考案した変換方法である。D-IRAP 得点は、端的に言うと、1セット内の一致試行及び不一致試行の平均の反応潜時の差を、標準偏差で割り変換する(Barnes-Holmes, et al., 2010a)。D-IRAP 得点の詳しい変換方法は、Barnes-Holmes et al. (2010a)を参照とする。D-IRAP 得点への変換は、4つの試行タイプごとの反応潜時を変換する方法や、特定のラベル刺激もしくはターゲット刺激の属性が提示されていたときの反応潜時を変換する方法、そして全体の反応潜時を変換する方法がある(Vahey et al., 2009; Dimaro, Roberts, Moghaddam, Dawson, Brown, & Reuber, 2015; Hussey, Thompson, McEnteggart, Barnes-Holmes, & Barnes-Holmes, 2015)。また D-IRAP 得点は、一致試行と不一致試行の反応潜時の平均値の差を基盤とするため、正の値も負の値も取りうる指標である(大月・木下, 2011)。D-IRAP 得点の解釈方法として、正の値をとる場合は、一致試行と設定された条件の方が不一致試行と設定された条件より早く反応していることを示し、一致試行と設定された刺激関係が個人の中でより生じやすいことを示している。負の値をとる場合は、その逆を示している(大月・木下, 2011)。D-IRAP 得点の範囲は-2 から+2 となっている(Hussey et al., 2015)。また D-IRAP 得点に、変換する際にも除外基準を設けている研究もある。その際には、練習フェイズから本番フェイズへの移行条件と同様の基準を設けることが多い。

IRAPを用いた先行研究

IRAP は、刺激間の強度や関係性の測定を通して、RFT の視点から潜在的な態度や認知の検証ツールとして使用されている(Barnes-Holmes et al., 2010a)。測定対象としては、例えば、性的趣向(Rönspies, Schmidt, Melnikova, Krumova, Zolfagari, & Banse, 2015; Dawson, Barnes-Holmes, Gresswell, Hart, & Gore, 2009), 魅力バイアス(Murphy et al., 2014), 政治的思想(Drake, Kramer, Habib, Schuler, Blankenship, & Locke, 2015)など偏見やステレオタイプといった、公共の場で自身の態度を表明しにくいテーマを取り扱っている。他にも精神障害の潜在的側面の検証(Nicholson et al., 2012)や、発達障害児の概念間

の関係性を学習するツール(Kilroe, Murphy, Barnes-Holmes, & Barnes-Holmes, 2014)としても用いられている。

IRAP の RFT 及び REC モデルによる位置づけ

IRAP は、提示されたラベル刺激及びターゲット刺激の関係性から、反応を求める課題である。このことから、IRAP における選択肢に対する反応(選択)は、関係反応として考えられている(Barnes-Holmes et al., 2006)。加えて、関係反応を時間的な経過から分類した REC モデルの観点からは、即時的な反応を求めていることから BIRRs として解釈されている(Hughes & Barnes-Holmes, 2013)。そして、BIRRs を通して、IRAP 実施前に確立された刺激間の関係性と強度を測定している(Barnes-Holmes et al., 2010a)。その際に、IAT のように等位の関係性のみではなく、「いいえ」などの相違を示す選択肢を提示することで、相違の関係づけの強度についても、測定することが可能となっている。

第 2 節 IRAP により ISE を測定した先行研究の概観

対象となる論文とその報告件数

第 1 節では、IRAP の概要について概観してきた。第 2 節では、IRAP を尺度として ISE を取り扱った研究を参照していく。ISE を IRAP で取り扱った論文は計 9 編出版されており、計 10 件の研究が報告されている。ISE を取り扱う IRAP では、ターゲット刺激に肯定語及び否定語を使用し、ラベル刺激と組み合わせ、刺激が提示されてから正答の選択を行うまでの反応潜時を測定している。その研究の中でも、ラベル刺激や選択肢として使用した刺激のセットに違いがある。先行研究を参照するにあたり、これらを整理するために、同様の刺激セットを使用した研究ごとに分類した(Table 1)。その結果、5 種類に先行研究を分類した。次に、分類した種類ごとに研究を概観していく。概観していくに辺り、各 5 種類について、1 件の研究を詳細に述べていく。

Table 1

IRAPにより ISE を測定した研究の刺激セットごとの分類表

| IRAPの刺激セット | 著者 | 年代 | 参加者の属性 | 人数 |
|--|-----------------------|------|---------------------------------------|--|
| ラベル刺激「同類」「反対」 選択肢「名前」「Not 名前」 | Vahey et al | 2009 | 大学生・四人 | 大学生 30名・四人 21名 |
| ラベル刺激「自分」「自分ではない」 選択肢「はい」「いいえ」 | Timko et al (研究 2) | 2010 | 大学生 | 100名 |
| | Pilch et al | 2017 | 大学生 | 56名 |
| ラベル刺激「自分」「自分ではない」 選択肢「名前」「Not 名前」 | Remue et al | 2013 | 大学生 | 72名 |
| | Remue et al | 2014 | 大学生 | 64名 |
| ラベル刺激「自分はしたい」「自分はしたくない」 選択肢「名前」「Not 名前」 | Raedt et al | 2017 | 大学生 | 36名 |
| ラベル刺激「自身の名前」「異性の名前」 選択肢「同類」「反対」 | Scanlon et al | 2014 | 研究1 ADHD児・定型発達児 研究2 ディスレクシア児・定型発達児 | 研究1 20名(定型発達児10名) 研究2 20名(定型発達児10名) |
| ラベル刺激「自分」「他者」 選択肢「はい」「いいえ」 | Dimaro et al | 2015 | 心因性非てんかん発作者・ てんかん者・定型発達者 | 心因性非てんかん発作者30名・ てんかん者25名・定型発達者31名 |
| | Stewart et al | 2017 | 大学生 | 94名 |

ラベル刺激に「同類」と「反対」選択肢に参加者の名前を使用した研究

まず、ラベル刺激に「同類」と「反対」、選択肢に参加者の名前を使った研究を参照していく。この条件に、該当する論文は1件である。

Vahey et al. (2009)は、IRAPで初めてISEを取り扱った論文である。ISEを測定するにあたり、ラベル刺激に「同類」と「反対」、ターゲット刺激に「良い」などの肯定語と「悪い」などの否定語、そして選択肢として参加者の「名前」(例えば、参加者がJohnならば「John」と参加者の名前の前にNotを付記した「Not 名前」(例えば、参加者がJohnならば「Not John」)を使用した。さらに刺激の組み合わせを「同類—肯定語」、「同類—否定語」、「反対—肯定語」、「反対—否定語」の4つに分け、「同類—肯定語」と「反対—否定語」を肯定的な意味合いを示す組み合わせ、「同類—否定語」と「反対—肯定語」を否定的な意味合いを示す組み合わせとした。そして、各組み合わせに対して、「名前」と「Not 名前」の選択を求めた。このIRAPでは、2種類の意味合いを示す組み合わせに対し、自分か他者かの選択までの反応潜時を指標として、ISEを測定している。このときに、肯定的な意味合いを示す組み合わせに対して、「名前(自分)」の選択が「Not 名前(他者)」の選択より反応潜時が短い場合、自分を肯定的に評価していると解釈する。つまり、肯定的な意味合いを示す組み合わせの場合、自己肯定 VS 他者肯定、否定的な意味合いを示す組み合わせ

の場合、自己否定 VS 他者否定の相対的な比較となる。そして、IRAP の条件として、一致条件と不一致条件を設けた。一致条件では、肯定的な意味合いを示す組み合わせの場合、参加者の「名前」の選択が、否定的な意味合いを示す組み合わせの場合、「Not 名前」の選択が求められる。一方で、不一致条件では、その逆の選択が求められる。例えば、提示された組み合わせが肯定的な意味(ラベル刺激に「同類」、ターゲット刺激に「良い」など)を示す場合、一致条件では「名前」の選択が求められ、不一致条件では「Not 名前」の選択が求められる。この IRAP では、一致条件下での選択が素早いほど、自分を肯定的に評価していると解釈し、不一致条件下での選択が素早いほど、自分を否定的に評価していると解釈する。Vahey et al. (2009)では、実験参加者として、大学生とオープンエリアへの移動が許可されている囚人、そして移動が許可されていない囚人を 3 群に分けて、ISE の違いを検証した。また、Vahey et al. (2009)では、全ての反応潜時から変換した全体の D-IRAP 得点と、ターゲット刺激に肯定語が提示された際の反応潜時から変換した D-IRAP 得点(以下、D-IRAP_{pos} とする)、そしてターゲット刺激に否定語が提示された際の反応から変換した D-IRAP 得点(以下、D-IRAP_{neg} とする)をそれぞれ算出した。その結果、大学生とオープンエリアへの移動が許可されている囚人は、D-IRAP_{pos} 及び D-IRAP_{neg} の同程度の得点を示した。その一方で、許可されていない囚人は、この 2 群と比較して有意に低い D-IRAP 得点を示した。この結果から、社会的な制限が厳しい者は、自由に移動することが許可されている者の方より、自尊感情が低くなるのではないかと、Vahey et al. (2009)では述べている。また、IRAP の研究では、それぞれの D-IRAP 得点に対して 0 得点を理論的中央値とした、一群の *t* 検定を実施している。Vahey et al. (2009)でも、それぞれの群ごとに一群の *t* 検定を実施した結果、大学生は全ての D-IRAP 得点で有意差が示されており、一致条件での選択が、素早く行われていた。このことから、IRAP でも IAT と同様に、自己肯定感バイアスが示された。加えて、全ての参加者の D-IRAP 得点と、ESE の得点を対象に相関係数を算出したところ、有意な弱い相関を示した。

ラベル刺激に「自分」「自分ではない」選択肢に「はい」「いいえ」を使用した研究

続いて、ラベル刺激「自分」と「自分ではない」選択肢「はい」と「いいえ」を使用した IRAP の研究を参照していく。この条件に、該当する研究は 2 件ある。

Timko et al. (2010) では、大学生を対象に IRAP で ISE を測定している。ラベル刺激に「自分」と「自分ではない」、ターゲット刺激に肯定語と否定語、選択肢に「はい」と「い

いいえ」¹⁴を使用した。そして、ラベル刺激とターゲット刺激の組み合わせを「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「自分ではない—肯定語」, 「自分ではない—否定語」の4種類の試行タイプを設定し、それぞれの組み合わせに対して「はい」と「いいえ」のどちらの選択が素早いかを測定した。そして、Vahey et al. (2009)と同様に IRAP の条件として、一致条件と不一致条件の2つの条件を設定した。一致条件では、「自分—肯定語」と「自分ではない—否定語」の組み合わせの場合「はい」の選択が、「自分—否定語」と「自分ではない—肯定語」の組み合わせの場合「いいえ」の選択が正答となる。不一致条件では、その逆の選択が正答となる。結果の解釈として、一致条件下での選択が素早いほど、自分を肯定的に評価していると解釈し、不一致条件下での選択が素早いほど、自分を否定的に評価していると解釈する。さらに、生活の質を測定する質問紙 Quality of Life Index (以下、QLI とする; Ferrans & Powers, 1985)と精神病理の症状を測定する質問紙 Brief Symptom Inventory (以下、BSI とする; Derogatis and Melisaratos, 1983)をそれぞれ実施し、D-IRAP 得点との相関係数を算出した。その結果、まず各組み合わせ及び全体の D-IRAP 得点に一群の *t* 検定を実施したところ、「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「自分ではない—否定語」, そして全体の D-IRAP で有意差が示された。この結果は、一致条件下での選択が素早く行われていたことを示している。また、4つの試行タイプの D-IRAP 得点の中では、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点が最も高く、1 要因の分散分析を実施したところ、有意差が示された。加えて、全体の D-IRAP 得点と質問紙で有意な相関は示さなかったものの、「自分—肯定語」の試行タイプの D-IRAP 得点のみ、QLI の総合得点や健康の因子と正の有意な相関が、BSI の抑うつ因子と負の有意な相関が示されていた。このことから、自分=肯定語の関係性が強い者ほど、心理的な健康度が高いと考察している(Timko et al., 2010)。

また、同様の刺激セットを使用した Pilch & Hyla (2017)では、全体及び各試行タイプの D-IRAP 得点を対象に、一群の *t* 検定を実施したところ、「自分—肯定語」, 「自分ではない—肯定語」, 「自分ではない—否定語」, そして全体の D-IRAP 得点で有意差が認められた。加えて、Pilch & Hyla (2017)では、ESE との相関も算出しており、その結果「自分—否定語」と有意な正の相関を示した。

¹⁴ IRAP の選択肢に関して、Maloney, Foody & Murphy (2020)によると、True/False, Right/Wrong, Yes/No を同様の機能を持つ選択肢として捉えている。Timko et al. (2010)や後述する先行研究では、True/False を選択肢として使用しており、正しい誤りと訳すことが一般的であるが、Maloney et al. (2020)を参考することと、本稿の研究では「はい/いいえ」を使用していることから、True/False の選択肢を「はい/いいえ」と表記することとする。

ラベル刺激に「自分はしたい」「自分はしたくない」選択肢に「はい」「いいえ」を使用した研究

続いて、ラベル刺激に「自分はしたい」と「自分はしたくない」、選択肢に「はい」と「いいえ」を使用した IRAP の研究を参照していく。この条件に、該当する研究は 3 件ある。

Remue, De Houwer, Barnes-Holmes, Vanderhasselt, and De Raedt (2013)では、抑うつと ISE に着目して研究を行っている。一連の研究でうつ病者は、IAT で ISE を測定した際に、自己肯定感バイアスが示されている(De Raedt et al., 2006)。この結果に対し、Remue et al. (2013)では、IAT で測定される ISE は、理想の自分を参照している可能性があり、そのため、自己肯定感バイアスを示したのではないかと指摘した。そして、ISE を測定する際に理想の自分と現実の自分のそれぞれを、参照する尺度の必要性を述べている(Remue et al., 2013)。このことから、Remue et al. (2013)では、理想の自分と現実の自分のそれぞれを参照する 2 種類の IRAP の刺激セットを用いて、ISE を測定した。実験参加者は、定型発達の大学生を対象としている。理想の自分を参照する IRAP には、ラベル刺激に「自分はしたい」と「自分はしたくない」を、現実の自分を参照する IRAP には「自分」と「自分ではない」をそれぞれ使用した。両 IRAP とも、ターゲット刺激には肯定語と否定語を、選択肢には Timko et al. (2010)と同様に「はい」と「いいえ」であった。理想 IRAP では、ラベル刺激とターゲット刺激の組み合わせを「自分はしたい—肯定語」、「自分はしたい—否定語」、「自分はしたくない—肯定語」、「自分はしたくない—否定語」の 4 種類の試行タイプを設定した。現実 IRAP については、Timko et al. (2010)と同様であった。そして、抑うつ程度を測定する BDI-II-NL(Van der Does, 2002)を実施し、その数値で高群と低群に振り分け、それぞれの群の D-IRAP 得点を検証した。その結果、BDI-II-NL 高群では、理想 IRAP は、現実の自己と比べて、有意に得点が高くなっていた。その一方で、低群では、その反対の結果を示していた。抑うつ指標の高い群において、理想 IRAP が高く示されたことから、IAT が理想の自分を参照した結果であることを支持している。加えて、全体 D-IRAP 得点を対象に、一群の t 検定を行ったところ、2 種類の IRAP とも有意差が示されていた。

また、Remue, Hughes, De Houwer, De Raedt (2014)では Remue et al. (2013)と同様の属性の参加者と IRAP の刺激セットを用いつつ IAT でも ISE を測定し、理想及び現実を参照する IRAP との関連性を検証した。その結果、IAT との相関を算出したところ、どちらの IRAP とも有意な相関は示されなかった。

ラベル刺激に「自分の名前」「異性の名前」選択肢に「同類」「反対」を使用した研究

続いて、ラベル刺激に「自分の名前」と「異性の名前」、選択肢に「同類」と「反対」を使用した研究を参照していく。この条件に、該当する研究は2件である。

Scanlon, McEntegart, Barnes-Holmes, & Barnes-Holmes (2014)では、定型発達児と発達障害児を対象に、ISEを測定した2件の研究を報告している。またこの研究は、定型発達児と発達障害児のISEの比較を目的としているが、他にも注意や認知に障害のあるADHDと、文字を読むことに障害のあるディスレクシアの児童に対して、IRAPの実施が可能であるのかについての検証も目的としている。この研究でのIRAPでは、ラベル刺激に参加児の名前と参加児とは異なる性別の名前(参加者が男児の場合、ラベル刺激の1種類は自身の名前、もう1種類は女児の名前であるLolaとなり、参加者が女児の場合、異性の名前はPeterとなる)、ターゲット刺激に肯定語と否定語、選択肢に「同類」と「反対」を使用した。4つの試行タイプは、「参加者の名前—肯定語」、「参加者の名前—否定語」、「異性の名前—肯定語」、「異性の名前—否定語」であった。Scanlon et al. (2014)では、研究1で定型発達児とADHD児を、研究2で定型発達児とディスレクシア児を対象とした。その結果、発達障害児も定型発達児と同様に、IRAPを完了することが可能であった。また、ISEの結果については対象児ごとに、4つの試行タイプのD-IRAP得点に違う傾向を示していた。定型発達児やディスレクシア児は、一群のt検定の結果「参加者の名前—肯定語」のD-IRAP得点で有意差(研究2の定型発達児は有意傾向、 $p = .059$)を示したが、ADHD児では有意差を示さなかった。

ラベル刺激に「自分」「他者」選択肢に「はい」「いいえ」を使用した研究

最期に、ラベル刺激に「自分」と「他者」、選択肢に「はい」と「いいえ」を使用した研究を参照していく。この条件に該当する研究は2件ある。

Stewart et al. (2017)では、妄想と自尊感情の関連性について検証している。Kesting, Bredenkohl, Klenke, Westermann, & Lincoln (2013)では、社会的排斥を経験すると、妄想が向上し、自尊感情が低下すると指摘している。そこでこの研究では、大学生を対象にIRAP及びIATでISEを検証し、社会的排斥経験後の得点の変化を検証している。社会的排斥を経験させる課題として、サイバーボールと言われるゲームを実施し、課題前後にIRAPとIATでISEを測定した。実験群はサイバーボール内にて社会的排斥を経験させるために、

パスがもらえないよう設定された。また、妄想の傾向を測定するパラノイア・チェックリスト(Freeman et al, 2005)を実施し、ISE との相関を検証した。Stewart et al. (2017)の4つの試行タイプは、「自分—肯定語」、「自分—否定語」、「他者—肯定語」、「他者—否定語」であった。そして、D-IRAP 得点は、4つの試行タイプごとに算出している。その結果、実験群は課題後 IAT の得点が有意に減少した。これは、「自分—肯定語(他者—否定語)」が提示された際の、反応潜時が長くなった、もしくは「自分—否定語(他者—肯定語)」が提示された際の、反応潜時が短くなったことを意味する。一方、IRAP の D-IRAP 得点は「自分—肯定語」と「他者—否定語」の組み合わせで変化を示さなかったものの、「自分—否定語」と「他者—肯定語」の組み合わせで変化を示した。この結果は、IAT の得点の変化が、「自分—肯定語(他者—否定語)」が提示された際の反応潜時の変化ではなく、「自分—否定語(他者—肯定語)」が提示された際に、反応潜時が短くなった可能性を示唆している。加えて、4つの組み合わせごとに一群の t 検定を行ったところ、「自分—肯定語」のみ有意な差が見られた。また、妄想の頻度及び確信度と「他者—否定語」に有意な正の相関が示されていた。

第3節 IRAPによりISEを測定した先行研究の総括

第2節では、IRAPによりISEを測定した先行研究の概要を、刺激セットごとにまとめて概観した。第3節では、これらの先行研究の総括について述べていく。

ISEを測定するIRAPの刺激セットごとの大別

10件のIRAPによるISEの先行研究を、刺激セットごとに大別すると、Vahey et al. (2009)とTimko et al. (2010)以降の研究に分けられる。Vahey et al. (2009)では、ラベル刺激に「同類」と「反対」、選択肢に自分と自分以外の人を表す刺激を使用し、Timko et al. (2010)以降の研究ではラベル刺激に自分と自分以外の人、選択肢に関係性を問う刺激を使用している。この測定法の、違いによる共通点及び相違点について述べる。また、本稿では刺激セットごとのIRAPによる測定法の混同を避けるため、Vahey et al. (2009)の方法をVahey式、Timko et al. (2010)以降の方法を多くの先行研究が用いていることからメジャー式とする(Vahey式は1件、メジャー式は9件である)。この2つの測定法による刺激セット及び4つの試行タイプの例をFigure 5に示す。

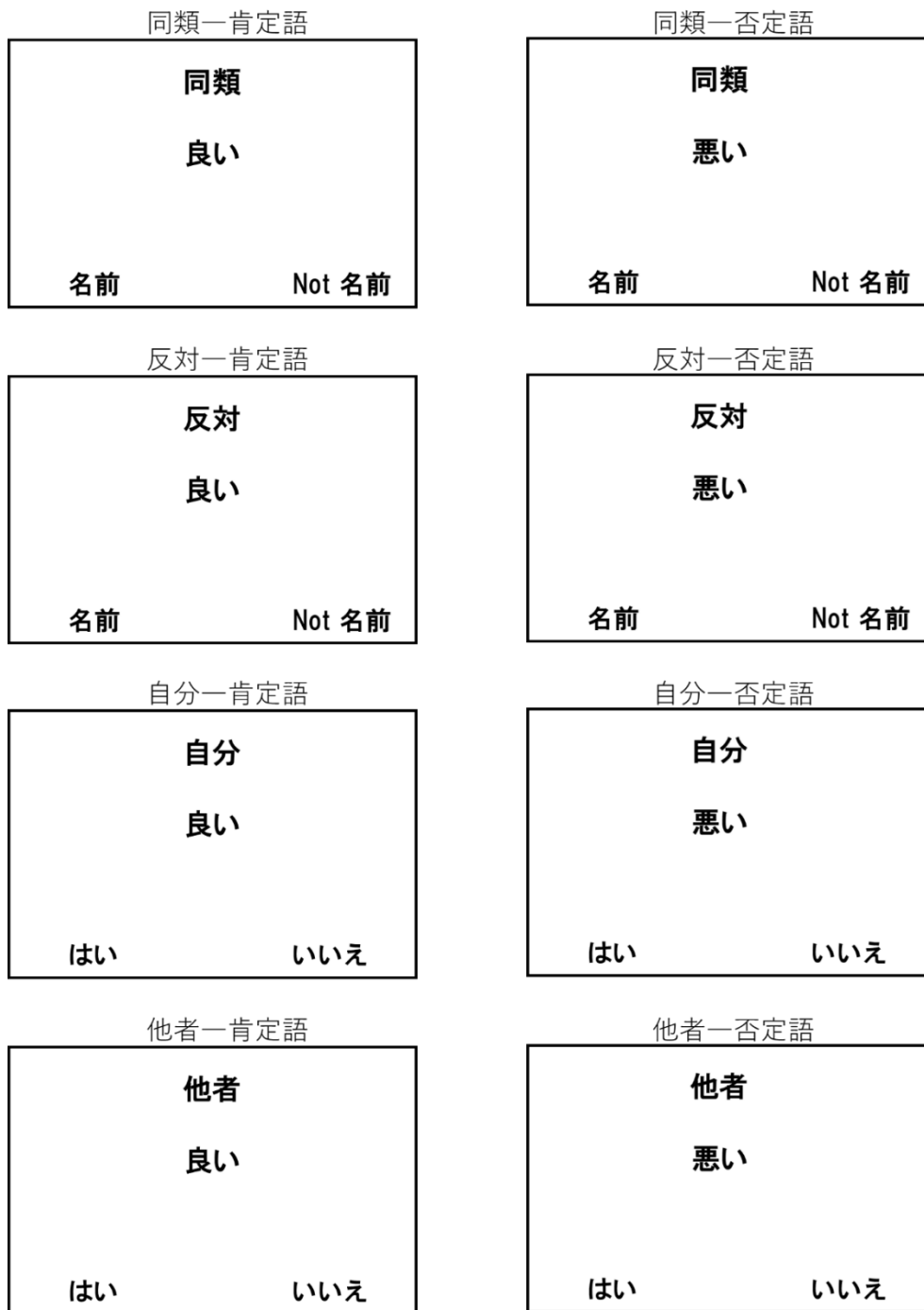


Figure 5. ISE を測定する Vahey 式及びメジャー式における刺激の提示位置及び 4 つの試行タイプの例。上の 4 つの黒枠が Vahey 式に、下の 4 つ黒枠がメジャー式に該当する。ターゲット刺激は、両方法で共通しているが、ラベル刺激と選択肢に相違がある。詳しくは本文参照とする。

この 2 つの方法の共通点としては、大学生を対象とした場合、どちらの方法を用いたとしても、自己肯定的な傾向を示すという点である。この結果は、従来の ISE の傾向と類似している。他にも、ターゲット刺激に肯定語と否定語を使用する点が共通している。

一方相違点としては、ラベル刺激と選択肢の刺激が異なることである。IRAP では、2 つの選択肢のうち、どちらを素早く選択できるかが指標となるため、Vahey 式の場合、肯定的及び否定的な刺激関係が「自分」か「他者」かの、相対的な比較となる。例えば、ラベル刺激が「同類」、ターゲット刺激に肯定語が提示された際に、「自分」を選択するのが素早いのか、もしくは「他者」を選択するのが素早いのか、結果に反映される。つまり、RFT の考え方では、自分と他者の比較関係に関する BIRRs を指標としている。そのため、肯定的な刺激関係が提示された場合自己肯定 VS 他者肯定、否定的な刺激関係が提示された場合自己否定 VS 他者否定の構図となる。

一方、メジャー式では「自分—肯定語」、「自分—否定語」、「他者—肯定語」、そして「他者—否定語」に対する「はい」と「いいえ」のどちらを素早く選択できるかを指標とする。つまり、ラベル刺激とターゲット刺激の関係性が等位なのか、相違なのかの BIRRs が求められる(Stewart et al., 2017)。例えば、「自分—肯定語」の試行タイプが提示された場合、自分=肯定語 VS 自分≠肯定語の構図となる。また、このメジャー式の場合、各刺激の組み合わせの D-IRAP 得点を、個別に測定することが可能となる。4 つの試行タイプごとに、D-IRAP 得点の結果を示すことで、各々の試行タイプについて、等位の関係性として学習しているのか、もしくは相違の関係性として学習しているのかを検証する。そして、4 つの試行タイプ間の D-IRAP 得点の比較や、4 つの D-IRAP 得点ごとに質問紙の得点や行動の頻度などの他の指標と関連性を検証することができる。

メジャー式における刺激の種類の違いによる共通点と相違点

またメジャー式の方法を用いた先行研究である 9 件においても、使用する刺激の種類により、4 つの研究に分けられる。各研究で、ラベル刺激に自分(Scanlon et al. 2014 では自身の名前が提示される)を参照する点は共通しているが、「自分」と対となる刺激として「自分ではない」(5 件)、「他者」(2 件)、「異性の名前」(2 件)を使用する場合がある。さらに、「自分はしたい」と「自分はしたくない」という自身に対する理想的な評価を測定する IRAP も 3 件報告されている(Table 1)。

そして、このラベル刺激の違いが、結果にも影響を与えている。大学生を対象としてかつ4つの試行タイプごとのD-IRAP得点に対して、一群の t 検定を実施した3件の研究に着目すると、「自分ではない」をラベル刺激として用いたTimko et al.(2010)では「自分—肯定語」,「自分—否定語」,「自分ではない—否定語」で、Pilch & Hyla (2017)では、「自分—肯定語」,「自分ではない—肯定語」,「自分ではない—否定語」で有意差が認められた。一方で、Stewart et al.(2017)では「他者」をラベル刺激として用いた結果、「自分—肯定語」のみ一群の t 検定で有意差が示された。つまり、ラベル刺激が「自分ではない」か「他者」かにより結果に違いを示す。この結果を考察すると、「自分ではない」と「他者」という刺激の捉え方が違うと考えられる。IATの自分と対となる刺激を変更したKarpinski (2004)でも、特定の他者を表す刺激を使用すると、その他者に対する好感度が連合強度に影響を与えていた。Karpinski (2004)の視点から考察するならば、「他者」よりも「自分ではない」の方が漠然としており、ネガティブに評価しやすいのかもしれない。

また、IRAPにおける刺激の選定についてHussey et al. (2015)では、ラベル刺激とターゲット刺激が二重否定となる場合、実験参加者の混乱を招き望ましくないと述べている。IRAPにおけるISEの測定において、Hussey et al. (2015)の述べている二重否定に該当するのは、ラベル刺激に「自分ではない」を使用した場合となる。ラベル刺激に「自分ではない」を使用して、ターゲット刺激に否定語が提示された場合が二重否定となる。

IRAPによるISEの分析方法

D-IRAP得点に対する分析方法に関しても、各研究で共通点と相違点がある。共通点としては、多くの研究でD-IRAP得点に対して、一群の t 検定を行なっている点である(8件の先行研究が該当する)。一群の t 検定を実施することで、算出されたD-IRAP得点がどちらの条件下での選択が素早いのか、つまり刺激間の関係性と強度を検証している。また、大学生を対象とした4つの試行タイプごとのD-IRAP得点を算出している3件の先行研究では、一致条件下で「自分—肯定語」の選択が素早い傾向があり、一群の t 検定で有意な差が示されている。つまり、自分と肯定語の関係性に関しては、「はい」が選択しやすいことを指しており、IRAPを尺度としたISEの特徴と言える。

相違点としては、D-IRAP得点の示し方である。先行研究でのD-IRAP得点の示し方は、大きく分けて、全てのD-IRAP得点の平均から算出するD-IRAP得点、ラベル刺激ごとやターゲット刺激の属性ごとに算出するD-IRAP得点、4つの試行タイプごとに算出するD-

IRAP 得点の 3 種類がある。この 3 種類は、1 種類のみ算出して報告する場合もあれば、すべてを算出する場合もある。ISE を対象とした研究では、全体 D-IRAP 得点を示している研究が 8 件、ラベル刺激ごとの D-IRAP 得点を示している研究は 1 件、ターゲット刺激の属性ごとの D-IRAP 得点を示している研究は 3 件、4 つの試行タイプごとに D-IRAP 得点を示している研究は 5 件である。一般的に IRAP では、全体 D-IRAP 得点と、4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点を算出することが多い。そして、4 つ試行タイプごとの D-IRAP 得点を算出する場合、各試行タイプの得点に対して分散分析を行うことや、質問紙との相関を検討している。

質問紙との関連性

従来の ISE 研究と同様に IRAP においても、ISE がどのような心理的特性と関連性しているのか、検討がなされている。IRAP では、他の潜在的尺度と異なり、4 つの試行タイプごとに結果を示すことで、それぞれの試行タイプと、他の尺度との関連性を検証できる利点がある。IRAP による ISE の研究において、4 つの試行タイプと他の尺度の得点との、関連性を検討した研究は 2 件ある。Timko et al (2010)では、「自分—肯定語」と生活の質を測定する QLI と正の有意な相関、BSI の抑うつ因子と負の有意な相関を示しており、自分＝肯定語の関係性が強い者ほど、心理的健康度が高いと述べている。また、Stewart et al. (2017)では、「他者—否定語」と妄想の頻度及び確信度で、有意な正の相関を示しており、他者＝否定語の関係性が強い者ほど、妄想を引き起こしやすく、その妄想を現実と確信しやすいことが明らかとなっている。

他にも、ESE との相関も検証されており、IRAP により測定した ISE と ESE の相関を算出した研究は 3 件ある。Vahey et al.(2009)では、全体の D-IRAP 得点と有意な相関($r=.34$)を示した。Remue et al. (2014)では、抑うつの尺度の得点から高群低群に分け実施した現実及び理想の IRAP の D-IRAP 得点について、ESE との相関係数を算出したところ、抑うつ高群の現実 IRAP とのみ有意な相関($r=.42$)を示した。Pilch & Hyla (2017)では全体 D-IRAP 得点と 4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点について、ESE との相関係数を算出したところ、「自分—否定語」の D-IRAP 得点のみ有意な相関($r=.3$)を示した。何れの研究においても、従来の ISE の先行研究と同様に、ESE とは弱い相関もしくは無相関である。

IAT との関連性

IRAP は IAT を参考にしていることから、ISE の研究においても、IAT との比較研究を実施している。IRAP と IAT の両方で、ISE を検討している研究としては 2 件ある。Remue et al. (2014) では、IAT との相関を算出したが、有意な相関は示されなかった。これは、IRAP と ISE で異なる側面の ISE を測定していると考えられる。ISE の尺度間で相関が示されない傾向は、先行研究とも一致する知見である (Bosson et al., 2000)。また Stewart et al. (2017) では、IAT で測定した ISE の得点の変化を、IRAP の 4 つの試行タイプの D-IRAP 得点で、詳細に変化を捉えられると報告しており、このことから、IRAP は ISE の変化をより詳細に抽出することが可能な尺度と評価している。

データの除外基準の設定に伴う除外率

続いて、データの除外基準に伴う除外率について述べていく。IRAP で ISE を対象とした研究の、データの除外基準及び除外率を Table 2 に示した。除外基準に関しては、練習フェイズから本番フェイズへの移行条件に設けるものと、本番フェイズ内のデータを対象に設けるものの、2 つのパターンがある。それぞれのパターンに反応潜時の中央値と正答率を対象に設定している。Stewart et al. (2017) 以外では、この 2 パターンのうち、どちらかのみに制限を設けている。データの除外率については、0%~22%の範囲を示しており、基準が厳しくなるほど、除外率が上がっている。Table 2 の中でも、Scanlon et al. (2014) のみ、データの除外率が 0% である。Scanlon et al. (2014) は、データの除外基準が、反応潜時の中央値を 3000ms 以下、正答率を 70% 以上としているため、他の研究と比較すると、設定が緩くなっている。その他にも、除外率が低い理由として、Scanlon et al. (2014) では、IRAP 開始前に事前に詳しい説明や、4 つの試行タイプがプリントされている画像を見せながら練習を実施している。つまり、IRAP 開始前に練習をすることで、除外率を下げる可能性が示唆されている。また、ISE を対象としていないが、実験用の刺激セットではない、刺激セットで IRAP の練習をしてから、実験用の IRAP を実施することで、除外率が下がるとの報告もある (Kishita, Muto, Ohtsuki & Bares-Holmes, 2014)。Scanlon et al. (2014) では、子どもを対象としたため、IRAP 開始前の説明や練習は必要であったと考えられる。そして、Scanlon et al. (2014) のような手続きを、大学生に実施した場合にも応用し、除外率を減らすことが、可能であると考えられる。しかしながら、その際に、D-IRAP 得点の結果にどの程度の影響を及ぼすかについての、検討が必要となる。

Table 2
データ除外基準及び除外率

| 著者 | 年代 | 本番フェイズへの基準 | | 本番フェイズ内での基準 | | 除外率 |
|-----------------------|------|------------|-----|-------------|-----|----------|
| | | 反応潜時 | 正答率 | 反応潜時 | 正答率 | |
| Vahey et al | 2009 | × | × | × | 70% | 8人(15%) |
| Timko et al (研究 2) | 2010 | 3000ms | 65% | × | × | 6人(6%) |
| Pilch et al | 2017 | 2000ms | 80% | × | × | 7人(12%) |
| Remue et al | 2013 | 2500ms | 80% | × | × | 16人(22%) |
| Remue et al | 2014 | 2000ms | 80% | × | × | 10人(15%) |
| Raedt et al | 2017 | 2000ms | 80% | × | × | 4人(11%) |
| Scanlon et al | 2014 | × | × | 3000ms | 70% | 0人(0%) |
| Dimaro et al | 2015 | 3000ms | 80% | × | × | 9人(10%) |
| Stewart et al | 2017 | 2500ms | 80% | 2500ms | 75% | 8人(8%) |

注) ×は基準を設けていないことを指している。

「自分—肯定語」と「自分—否定語」に対する評価

IRAP で ISE を測定する場合、各々の刺激間の関係性に対する評価(反応)を、D-IRAP 得点化することにより、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」に対する評価(反応)を個別に抽出することができる。つまり IRAP では、自己評価における自己肯定と自己否定をそれぞれ分けて検証することが可能である。そして、この 2 つの自己評価を D-IRAP 得点として算出した先行研究の知見を概観すると、異なる傾向を示している(Timko et al., 2010; Stewart et al. 2017)。

「自分—肯定語」に関しては、チャンスレベルと比較する一群の t 検定の結果、大学生を対象とした場合、全ての先行研究で有意が示されている。また他の試行タイプと比較して高い D-IRAP 得点を示す(Timko et al., 2010)。これは、「自分—肯定語」の組み合わせに対し

て「はい」を選択することが素早いことを意味している。加えて、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点と、生活の質を測定する尺度や、抑うつ指標との相関が示されていることから、心理的な健康度との関連性があると考えられている(Timko et al., 2010)。その一方で「自分—否定語」の D-IRAP 得点に関しては、一群の t 検定で一貫した結果が示されていない。一群の t 検定で有意差を示した Timko et al. (2010)では、「いいえ」の選択が素早かった結果を示しているが、他の研究では有意が示されていない。加えて、「自分—肯定語」で示された質問紙との有意な相関が、「自分—否定語」では示されていない(Timko et al., 2010)。このことから、「自分—肯定語」に「はい」を選択することと、「自分—否定語」に「いいえ」を選択することは、自分を肯定的に評価している点で共通しているが、自己肯定への肯定と自己否定への否定が異なることを示唆している。

全体の総括

IRAP で測定する ISE は、端的に言うならば、自分と他者に対する肯定語と否定語の刺激間の関係性に対する評価を通じて測定される概念である。つまり、自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定に対する評価を包括した概念と言える。この考え方は、IAT とも類似している。

また本稿では、ISE を測定する IRAP の刺激セットを Vahey 式とメジャー式に分けて、先行研究を概観した。Vahey 式では、肯定的な意味合いを示す組み合わせに「自分」、否定的な意味合いを示す組み合わせに「Not 自分」の選択が素早い者ほど ISE が高い人物と想定し、メジャー式では、自分と肯定語及び他者と否定語の関係性が「はい」、自分と否定語及び他者と肯定語の関係性が「いいえ」の選択が素早い者ほど、ISE が高い人物と想定している。

ISE の研究領域において、IAT や NLT を尺度として用いた研究と比べると IRAP を用いた研究は少ない。IAT や NLT が 1990 年代から使用されていることを考えると、2006 年に発表された IRAP の使用数が少ないことも当然のことと考えられる。しかしながら、IRAP が他の尺度に劣っているということには直結しない。現に IRAP を用いることで、刺激の組み合わせごとに結果を示せることや、その組み合わせの結果と他の指標との関連性を検証できることは、IRAP 独自の利点として考えられる(Timko et al. 2010; Pilch & Hyla, 2017; Stewart et al. 2017)。さらに、RFT を基にした関係性の評価という観点から、提示された刺激に対する等位と相違の関係性を測定することが可能であり、IAT では不明瞭であった

点に対して追加の説明を与えることや、各組み合わせのタイプごとに結果を分析することで、新たな知見を提供している。

本稿で実施する研究では、この IRAP の利点を活かし、ISE の試行タイプの中でも、自己評価に関連する「自分—肯定語」と「自分—否定語」に着目していく。上述した通り、この 2 つの自己評価は、異なる傾向を示すことが明らかとなっているものの、研究報告が少なく、より多くの知見が必要と考えられる。そこで、本稿では、この 2 つの自己評価と、ネガティブな出来事に対する緩衝機能との関連性に着目する。これらのことを踏まえ、第 5 章では、先行研究を概観することで、IRAP による ISE の検討すべき点を 3 つ挙げ、それらを検証する 4 つの研究の概要を述べる。

第 5 章 IRAP による ISE の検討点及び本研究の目的

第 1 節 本稿で実施する研究の検討点

本稿では日本人大学生を対象として、ISE を IRAP で測定し、「自分—肯定語」と「自分—否定語」に対する関係性(等位及び相違)やその強度の観点から、ネガティブな出来事に対する ISE の緩衝機能の検証及び臨床的意義についての考察を目的とした。この目的のために、本稿では、(1)ISE を測定する 2 つの刺激セットそれぞれの IRAP における結果の再現性の検証、(2)ISE の先行研究で明らかとなった ISE の緩衝機能と、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の D-IRAP 得点との関連性の検証、(3)「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の強度及び関係性に関する変数の検証の 3 つの検討点を挙げる。

ISE を測定する 2 つの刺激セットそれぞれの IRAP における結果の再現性の検証

IRAP による ISE の先行研究では、刺激セットやデータの除外基準が異なっており、統一的な手続きがない現状である。また大きく分けると Vahey 式とメジャー式の 2 つの方法が存在している。Vahey 式に関しては、1 件の報告のみとなっている。メジャー式に関しても同様の刺激セットを使用した研究は少なく、同様の結果が再現されるかは不明瞭である。また本邦において、IRAP により ISE を測定した研究は、学会誌での報告がない状況である。

このことから、先行研究において対象となっていない、日本人の大学生の ISE を測定した場合においても、結果が再現されるのかの検証を行う。一連の ISE の先行研究では、日本人を対象とした場合においても、自己肯定感バイアスを示すことが明らかとなっている

(原島・小口, 2007; Yamaguchi et al., 2007)。ISE の先行研究の知見から, IRAP を使用した際にも, Vahey 式の刺激セットの場合自己肯定感バイアスが, メジャー式の場合自分＝肯定語の結果が期待される。日本人大学生を対象に IRAP で ISE を測定した際にも, 同様の傾向が示されるかについて, 検証する必要がある。

ISE の先行研究で明らかとなった ISE の緩衝機能と「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の D-IRAP 得点との関連性の検証

従来, 自尊感情を対象とした研究は, 自尊感情の得点と心理的特徴との関連性を検証してきた。ISE を対象とした研究領域でも同様に, ESE との解離や ISE 単体の得点と何かしらの心理的特徴との関連性に着目している。その中でも, ISE の得点が高い者ほど心理的健康であるとの報告がある。例えば, Greenwald and Farnham (2000)や藤井 (2016), そして Schmeichel et al. (2009)では ISE が高い人物ほど, ネガティブな刺激の影響を緩衝すると報告している。しかしながら, その結果が, 自己肯定への肯定によるものなのか, 自己否定への否定によるものなのか, 明らかではない。IRAP を使用した場合, 4つの試行タイプの D-IRAP 得点を示すことが可能であり, より既存の ISE の知見を明らかにすることが可能である。このことから, ISE の既存の知見を参考に ISE の緩衝機能と, 「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」に対する反応との関連性について検証する。

「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の関係性及び強度に関する変数の検証

IRAP で測定した ISE の得点を高める要因について検証する。ISE が高い者ほど, 困難な課題後のネガティブなフィードバックを緩衝するとの知見があるが, この場合逆の可能性も考えられる。つまり, 困難な課題に挑戦する頻度が多く, その課題を達成した者ほど, 自己肯定感が高まり, ISE が高くなることや, 困難な課題への慣れがあり, ネガティブな感情を抱きにくくなるのではないかと考えられる。このことから, 困難な課題を実施した際の, 「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の関係性及び強度について検証する。

第 2 節 本稿における各研究の目的

本稿では, 上述した検討点を検証するために IRAP を用いて, ISE に関する 4つの研究を実施する。4つの研究の概要及び目的について述べていく。これらを検討するために, 4つの研究を実施した。また 4つの研究と 3つの検討点の対応関係を Table3 に示す

Table 3

本稿の研究及び検討点の対応関係

| 本稿の 各研究 | 本稿の検討点 | | |
|----------------------------|--------|---|---|
| | ① | ② | ③ |
| 研究1 Vahey式による ISEの測定 | ○ | | |
| 研究2 メジャー式による ISEの測定 | ○ | ○ | |
| 研究3 ISEの緩衝機能に ついての検証 | | ○ | |
| 研究4 ISEの得点の 操作 | | | ○ |

注) ①は、ISE を測定する 2 つの刺激セットそれぞれの IRAP における結果の再現性の検証、②は、ISE の先行研究で明らかとなった ISE の緩衝機能と「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の D-IRAP 得点との関連性の検証、③は、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の関係性及び強度に関する変数の検証を、それぞれ指している。

まず研究 1 では、Vahey et al 式を使用して、日本人大学生の ISE を IRAP にて測定した場合においても、Vahey et al. (2009)の結果が再現されるかを検証する。一連の ISE 研究では、どの尺度を用いても自己肯定感バイアスが見られており、自己否定的な傾向を示す日本人を対象とした場合でも同様の結果が報告されている(原島・小口, 2007; Yamaguchi et al., 2007)。このことから、IRAP を用いて日本人大学生を対象とした場合においても同様の傾向が示されるのかを検証していく。そして、Vahey et al. (2009)では、検証されていない 4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点を算出し、それぞれの試行タイプの特徴について検証する。

次に研究 2 では、メジャー式の中でも、Stewart et al. (2017)の刺激セットに変更し、

IRAP で ISE を測定する。メジャー式の中でも Stewart et al. (2017)の方法とする理由としては、Hussey et al. (2015)の二重否定の組み合わせを作らない「他者」を使用している点と、大学生を対象に 4 つの D-IRAP を算出している点からである。そして研究 1 と同様に、日本人大学生を対象とした場合においても Stewart et al. (2017)の結果が再現されるか及び ISE と緩衝機能との関連性についての検証も行う。

続いて研究 3 では、ISE のネガティブ刺激に対する緩衝機能について、行動指標を用いて検証する。ISE の尺度として IRAP を使用した場合による緩衝機能及び行動指標との関連性について検証がなされていない。IRAP を使用した場合、4 つの試行タイプごとに結果を示せることから、緩衝機能として抽出される試行タイプを詳細に検討することができる。このことから、研究 3 では、行動を指標として緩衝機能について検証する。

最後に研究 4 では、IRAP で測定した ISE の得点を高める要因について検証する。IRAP で測定した ISE に関する得点を実験的に操作した研究としては、Stewart et al. (2017)がある。この研究では、社会的排斥を経験させることで「自分—否定語」と「他者—肯定語」の得点の変化を報告した。研究 4 では、「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の D-IRAP 得点の変化に着目した実験的操作を行い、操作前と操作後で得点が変わるかの検証を行う。また ESE も測定し、ISE との違いについて検証する

本 論

第6章 研究1: Vahey 式による日本人大学生の ISE の検証(古谷・竹内, 2019)

目的

研究1では、上述した IRAP にて ISE を測定する方法の1つである Vahey 式の刺激セットに基づき ISE の測定を行う。Vahey 式では、ラベル刺激に「同類」と「反対」、ターゲット刺激に肯定語と否定語、選択肢に自身の「名前」と自身の名前に「Not」を付記する「Not 名前」を使用している。従来 ISE は、尺度の種類や国の文化に関わらず、定型発達の大学生を対象とする場合、多くの研究で自己肯定感バイアス(IAT における自己肯定及び他者否定)の傾向が報告されている(原島・小口, 2007; Yamaguchi et al., 2007)。Vahey et al. (2009)の大学生の結果でも、自己肯定及び他者否定の傾向を示しており、従来の ISE の傾向を示している。そこで研究1では、自己否定的な傾向を示す日本人(北山・唐澤, 1995)においても、この傾向が再現されるかの検討を行う。そのため、Vahey et al. (2009)と同様に、全体を平均した D-IRAP 得点と、ターゲット刺激に肯定語が提示された際の D-IRAP 得点(以下、D-IRAPpos 得点とする)と否定語が提示された際の D-IRAP 得点(以下、IRAPneg 得点とする)を算出する。Vahey et al. (2009)の大学生の結果では、算出した D-IRAP 得点を対象に一群の t 検定で有意差を示している。このことから、研究1ではそれぞれの D-IRAP 得点に対して一群の t 検定を実施し、自己肯定及び他者否定の傾向を示すか検証する。ISE を測定する際の IAT の構図である自己肯定他者否定 VS 自己否定他者肯定とは異なり、Vahey 式を用いる場合は、自己肯定 VS 他者肯定及び自己否定 VS 他者否定の構図となる。このような構図の違いはあるものの、Vahey et al. (2009)では、自己肯定及び他者否定の結果が示されており、従来の IAT の傾向を支持している。

加えて、研究1では Vahey et al. (2009)では行われていない、各試行タイプの D-IRAP 得点を算出し、それぞれの D-IRAP 得点の詳細な検証を行う。この検証を行うために、各試行タイプの D-IRAP 得点を対象として一群の t 検定及び1要因の分散分析を実施する。

方法

研究参加者

A 大学に通う大学生 30 名(男性 15 名, 女性 15 名, 平均 21.5 歳, $SD=1.9$ 歳)を対象とした。研究倫理への配慮として実験前に、本実験のデータは関係者のみ閲覧可能であること、参加者の意思で実験を中止することが可能であることを説明し、データを匿名で公開する

ことについての同意を得た。

研究場面・研究装置

研究場面として A 大学の 1 室を使用した。室内は 33 m²程度の広さとなっており、室内にある机の上に IRAP で使用するパーソナルコンピュータを設置した。IRAP の実行にはパーソナルコンピュータ dynabookN51(東芝製)を使用した。

IRAP

IRAP2010 日本語版ソフトウェア(木下・大月・酒井・武藤, 2012)を使用した。IRAP で使用する刺激は, Vahey et al.(2009)を参考に選定した。ラベル刺激には「同類」と「反対」を, ターゲット刺激には「良い」などの肯定語と「悪い」などの否定語を, 選択肢には IRAP を行う参加者の「名前」と参加者の名前に「ではない」を付記した「名前ではない(例えば, 太郎ではない)」の文字刺激をそれぞれ用いた(Table 4)。選択肢の名前は漢字で提示した。

手続き

ラベル刺激とターゲット刺激を組み合わせることで、「同類—肯定語」と「同類—否定語」, 「反対—肯定語」, そして「反対—否定語」の 4 種類の試行タイプを設けた。4 種類の試行タイプのうち、「同類—肯定語」と「反対—否定語」を肯定的な意味合いを示す組み合わせ, 「同類—否定語」と「反対—肯定語」を否定的な意味合いを示す組み合わせと定義した。さらに研究 1 の IRAP には, 自己肯定条件と自己否定条件があり, 自己肯定条件では 4 種類の試行タイプのうち, 肯定的な意味合いを示す組み合わせが提示された場合に「名前」を選択することを, 否定的な意味合いを示す組み合わせが提示された場合に「名前ではない」を選択することを, それぞれ正答とした。自己否定条件では自己肯定条件の正答と誤答を逆転させた。4 つの試行タイプと 2 つの条件の関係を Figure 6 に示す。

Table 4

研究 1 で使用した IRAP の刺激

| 刺激の種類 | 属性 | 使用した刺激 | | | | | |
|---------|-----|----------|----|----|--------------|----|-------|
| ラベル刺激 | | 同類 | | | 反対 | | |
| ターゲット刺激 | 肯定語 | 良い | 成功 | 正直 | 利益 | 快活 | 自信 |
| | 否定語 | 悪い | 失敗 | 不正 | 無益 | 不快 | 恥ずかしい |
| 選択肢 | | 実験参加者の名前 | | | 実験参加者の名前ではない | | |

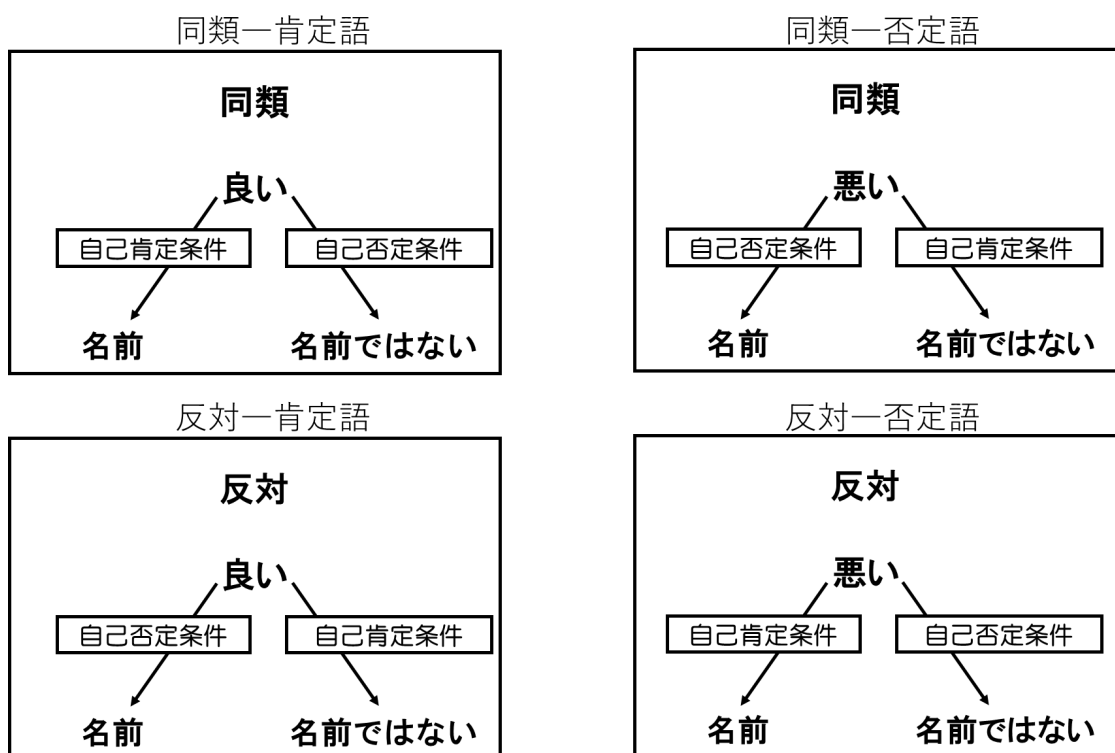


Figure 6. 研究 1 の 4 つの試行タイプの例と正反応の選択肢。各黒枠内の矢印及び自己肯定条件，そして自己否定条件は，それぞれの試行タイプにおける各条件中での正答の選択肢を示している。また IRAP 実施中のモニター上には，矢印及び自己肯定条件，そして自己否定条件の文字は，提示されない。以下，Figure における，条件名および矢印は Figure 6 と同様の意味を指すこととする。

参加者が正答の選択を行った場合、400ms の試行間隔を挟んで次の刺激が提示された。参加者が誤答の選択を行った場合、正答の選択肢を選び直すまでモニターに赤い「x」印を提示した。

4 種類の試行タイプのうち、どれか 1 種類の刺激が提示されてから、参加者が正答を示すまでを 1 試行とし、1 ブロックを 24 試行とした。4 つの試行タイプはランダムな順序で提示され、同じ試行タイプが 2 試行連続して提示されないように調整した。また、選択肢の位置はランダムで左右入れ替わるようになっており、3 試行連続して同じ位置に提示されないようにした。研究 1 では、Vahey et al.(2009)を参考として、自己肯定条件と自己否定条件をそれぞれ 4 ブロックずつ、計 8 ブロック実施した。8 ブロックのうち最初の 2 ブロックを練習フェイズと見なした。残りの 6 ブロックを本番フェイズとして、本番フェイズ内で正答率 70%以下の結果を示した参加者のデータは除外し、それ以外の参加者の本番フェイズの結果を分析対象とした。1 ブロック実施するごとに条件を変更し、その際「次のブロックでは先の試行で正しいとされていた回答と誤っているとされていた回答が逆になります」という文字をモニターに提示した。どちらの条件から開始するかは、参加者ごとにカウンターバランスをとった。

実験を始める前に使用する IRAP の刺激を参加者に提示した。その後、使用するキーの説明を行ったあと、4 つの試行タイプ及び 2 つの条件に関する説明を伝えた。最後にできるだけ早くなおかつ正確に選択するよう伝えた。

本研究では、各条件の反応潜時を算出し、それを D-IRAP 得点に変換した(詳しい変換方法は Barnes-Holmes et al., (2010a)を参照)。D-IRAP 得点は 2 つの条件の反応潜時の差から算出されるため、正負両方の値を示す可能性がある。D-IRAP 得点の値が大きいほど、2 つの条件間で正答の選択までの反応潜時の差が開いていることを示しており、素早く正答の選択をした条件中の言語関係が個人の中で確立していると解釈する(大月・木下, 2011)。研究 1 では、自己否定条件の平均反応潜時から自己肯定条件の平均反応潜時を引いた値を D-IRAP 得点の基盤とした。そのため、本研究の D-IRAP 得点は、自己肯定条件の反応潜時が短い場合に正の値を、自己否定条件の反応潜時が短い場合に負の値を示す。Vahey et al. (2009)同様に、本番フェイズ内での正答率が 70%以下のデータに関しては分析から除外した。

結果

全ての参加者が本番フェイズ内で70%以上の正答率を示したので、参加者30名のデータを分析対象とした。

まず、全体の平均D-IRAP得点は0.36($SD=0.30$)であった。自己肯定条件と自己否定条件の反応潜時に差がなかった場合を理論的中央値(つまり、D-IRAP得点=0)とし、一群の t 検定を行ったところ、理論的中央値との間に有意差が認められた($t(29) = 6.85, p < .05$)。全体の平均D-IRAP得点は正の値を示しており、参加者は自己肯定条件内での素早い選択傾向を示した。

続いて、D-IRAPpos得点及びD-IRAPneg得点をそれぞれ算出した。D-IRAPposはターゲット刺激に肯定語が提示されていた際の反応潜時を、D-IRAPneg得点はターゲット刺激に否定語が提示された際の反応潜時を基盤として算出した。D-IRAPpos得点が0.54($SD = 0.39$)、D-IRAPneg得点が0.22($SD = 0.36$)であった。D-IRAPpos得点及びD-IRAPneg得点に関しても、チャンスレベルと比較するために一群の t 検定を行った。D-IRAPpos得点は($t(29) = 7.54, p < .001$)、D-IRAPneg得点は($t(29) = 3.43, p = .001$)であり有意差が認められた。全体の平均D-IRAP得点と同様に、自己肯定条件内での素早い選択傾向が示された。

次に4つの試行タイプごとの平均D-IRAP得点は、「同類—肯定語」が0.69($SD=0.37$)、「同類—否定語」が0.11($SD = 0.41$)、「反対—肯定語」が0.38($SD = 0.53$)、「反対—否定語」が0.27($SD=0.41$)であった(Figure 7)。4つの試行タイプのD-IRAP得点に関しても、チャンスレベルと比較するために一群の t 検定を行った。その結果、「同類—肯定語」は($t(29) = 10.1, p < .001$)、「同類—否定語」は($t(29) = 1.79, p = .07$)、「反対—肯定語」は($t(29) = 3.92, p < .001$)、「反対—否定語」は($t(29) = 3.59, p = .001$)となり、「同類—否定語」以外の試行タイプで有意差が認められた。全体の平均D-IRAP得点で認められた自己肯定条件における素早い選択傾向は、4つの試行タイプで生じていたが、「同類—否定語」の試行タイプにおいて有意差は示されなかった。

最後に、4つの試行タイプのD-IRAP得点の間の差を検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、試行タイプの主効果が有意であった($F(3, 87) = 12.47, p < .001$)。Ryan's法で多重比較をしたところ、「同類—肯定語」は他の試行タイプよりもD-IRAP得点が有意に高かった($p < .001$)。また、「反対—肯定語」と「同類—否定語」に有意差が認められ($p < .001$)、「反対—肯定語」のD-IRAP得点が相対的に高かった。

考察

研究 1 では、Vahey 式の方法を用いて、IRAP による ISE の検証を行った。まず、全体の D-IRAP 得点及び 4 つの試行タイプの D-IRAP 得点は、各得点ですべて正の値を示していた。このことは、肯定的な意味合いを示す組み合わせに対して「名前」の選択が、否定的な意味合いを示す組み合わせに対して「名前ではない」の選択が、それぞれ素早く行なわれていたことを表しており、IRAP においても日本人大学生は自己肯定的、そして他者否定的な結果を示した。IAT とは構図が違うものの、IAT で日本人大学生の ISE を測定した先行研究と同様の結果を報告しており(原島・小口, 2007; Yamaguchi et al., 2007), IRAP においても日本人大学生の ISE が、自己肯定と他者否定により構成されるという一致した結果を示した。

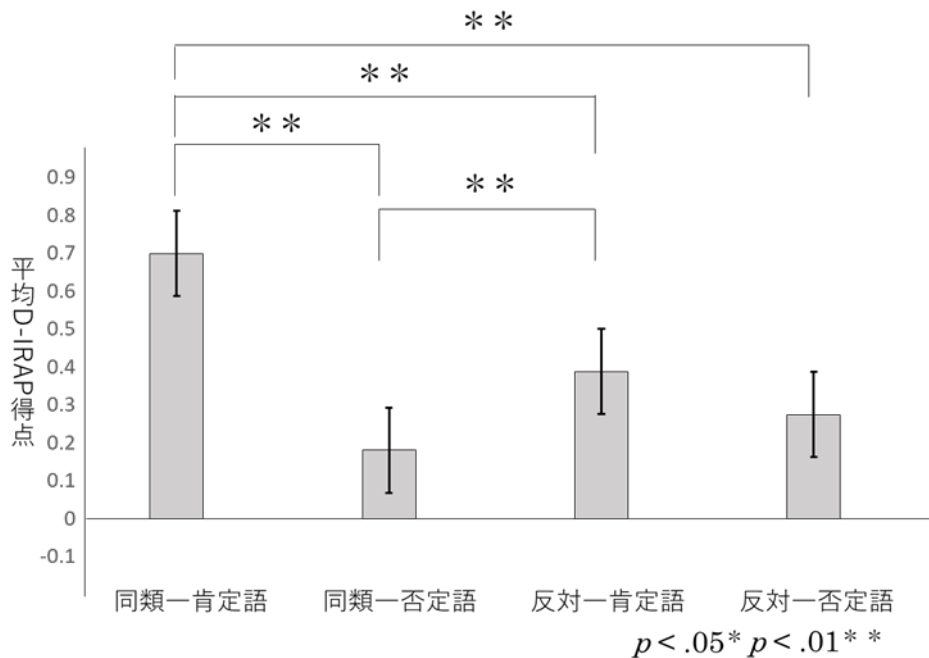


Figure 7. 研究 1 の 4 つの試行タイプごとの平均 D-IRAP 得点。エラーバーは標準偏差を示す。横軸は各試行タイプを示している。自己肯定条件における選択反応が相対的に早かった場合、グラフは正の方向に数値が増加する。自己否定条件における選択反応が相対的に早かった場合、グラフは負の方向に数値が増加する。

続いて、D-IRAPpos 得点及び D-IRAPneg 得点に注目すると、両得点ともに正の値を示しており、自己肯定条件下で選択が素早く行われていたことを示していた。この傾向は Vahey et al. (2009)と同様の傾向であり、結果が再現されたと考えられる。そしてこの結果は、異なる文化間でも同様の傾向を示す可能性も示唆する。

さらに詳細な検討を行うために、4つの試行タイプごとの D-IRAP 得点に注目した。4つのタイプごとの平均 D-IRAP 得点を比較すると、「同類—肯定語」が他の試行タイプよりも高い D-IRAP 得点を示していた。「同類—肯定語」の D-IRAP 得点が相対的に高いとは、肯定的な意味合いを示す組み合わせに対して「自分」と評価しやすい、または「自分ではない(他者)」と評価しにくいことを意味している。また、「同類—否定語」の試行タイプの D-IRAP 得点が相対的に低く、「自分」や「自分ではない(他者)」と評価するまでの時間に差は見受けられなかった。従来の ISE の研究では、「自分—肯定的」と「自分ではない(他者)—否定的」の概念間の連合の強さが基盤として考えられてきたが、研究 1 では、肯定的な刺激と自分もしくは他者との関係性が最も色濃く結果に反映されていた。この知見は、否定的な刺激よりも肯定的な刺激が提示されているときの反応が ISE の高さに繋がる要因である可能性を示唆する。

また、4つの試行タイプの中では、「同類—否定語」において D-IRAP 得点が相対的に低くなった。Markus & Kitayama(1991) は、日本人を含む東洋人の自己に対する認識を相互協調的自己観と呼んでおり、この文化圏で生活を行なっている人々は他者との協調性を重視しており、他者の良い部分に注目し、自らの弱点や問題点に注目することで、社会集団での適応を図ると指摘している。このような東洋特有の自己観が、本研究における参加者が否定的な意味合いを示す組み合わせに対して、「自分ではない」と素早く反応することを妨げたか、もしくは「自分」と素早く反応することを促進した可能性がある。

研究 1 では Vahey 式の方法を用いたことで自己肯定 VS 他者肯定、そして自己否定 VS 他者否定の相対的な比較となり、その結果 Vahey et al. (2009)と同様の傾向を示した。加えて、4つの試行タイプごとに D-IRAP 得点を算出したところ、「同類—肯定語」が最も高く、「同類—否定語」が最も低い得点を示した。

その一方で、それぞれの刺激間関係性について個別検討をしていないことから、「同類—肯定語」の得点が高くなる理由として自分=肯定語の関係づけの強さによるものなのか、他者≠肯定語の関係づけの強さによるものなのか、また「同類—否定語」の得点が低くなる

理由が自己＝否定語の関係づけの強さによるものなのか，他者≠否定語の関係づけの強さによるものなのかが不明瞭である。この点を検討するためには，メジャー式のように各刺激間の関係性について個別に抽出する必要がある。

このことから，研究 2 では，ラベル刺激に「自分」と「他者」を，選択肢に「はい」と「いいえ」を，それぞれ提示するメジャー式の方法を用いた検証を行う。

第7章 研究2：メジャー式による日本人大学生のISEの検討(古谷・竹内, in press)

目的

研究2では、メジャー式のラベル刺激に「他者」を使用した Stewart et al. (2017)の刺激セットを参考にしてISEを測定し、4つの試行タイプごとの検証を行う。研究1ではVahey式の方法でISEを測定したところ、IATと同様にIRAPにおいても日本人大学生が、自己肯定かつ他者否定の傾向を示すことが明らかとなった。そして、4つの試行タイプごとのD-IRAP得点を算出したところ、「同類—肯定語」の試行タイプが最も高いD-IRAP得点を示し、「同類—否定語」の試行タイプが最も低いD-IRAP得点を示していた。しかしながら、研究1では自己肯定VS他者肯定、自己否定VS他者否定の構図となっており、各組み合わせの詳細な検討が行われておらず、「同類—肯定語」の組み合わせのD-IRAP得点の高さが、自己肯定的な評価が素早いことに影響しているのか、もしくは他者肯定的な評価が遅いことに影響しているのか不明瞭であった。加えて「同類—否定語」に関しても、自己否定的な評価が影響しているのかもしくは他者否定的な評価が影響しているのか不明瞭であった。そこで、研究2では、メジャー式の刺激の提示方法を参考とすることで、自己肯定、自己否定、他者肯定、そして他者否定の組み合わせに対する評価を通じて、それぞれ個別に検討することとする。研究1で考察した相互協調的自己観の傾向が示されるならば、「自分—否定語」の組み合わせに対して「はい」及び「他者—否定語」の組み合わせに対して「いいえ」の選択が素早くなると考えられる。その一方で、研究2で参考とする Stewart et al. (2017)のベースラインの結果では、「自分—肯定語」以外の組み合わせにおいて、「はい」と「いいえ」の選択の偏りは示されなかった。Stewart et al. (2017)と同様の傾向を示す場合、相互協調的自己観の傾向はないと考えられる。これらを検証するために、研究2では4つの試行タイプごとの一群の t 検定を実施する。加えて、4つの試行タイプのD-IRAP得点の高さを比較するために、1要因の分散分析を実施する。

また、研究2では、ISEにおける心理的健康度についての検証も行う。Schmeichel et al. (2009)では、NLTやIATで測定したISEの高い者ほど心理的な恐怖から回復しやすいと報告している。他にも、Greenwald & Farnham (2000)では、高難易度課題後のネガティブなフィードバックをISEが緩衝するとの報告をしている。これらのことから、ISEはネガティブな刺激に対して緩衝する機能を有していると想定されている。一方、IRAPを用いた Timko et al. (2010)では、「自分—肯定語」と心理的健康度との関連性を報告している。既

存の ISE の知見と Timko et al. (2010)の知見を合わせると、IRAP における「自分—肯定語」の高い者の心理的健康度とは、ネガティブ刺激を緩衝する機能による可能性がある。この検証を行うために、困難な状況に陥った際にも上手く適応する能力を指すレジリエンスとの関連性を検証する(小塩, 2016)。鈴木(2006)では、レジリエンスを「ストレスフルな経験や脅威の存在にもかかわらず精神的健康や適応行動を維持する個人傾向性あるいはその過程である」と述べている。このことから、両概念ともネガティブな事態に陥った際に機能する概念と考えられる。田中・兒玉(2010)では、レジリエンスと抑うつ症状とで負の相関を示したと報告しており、レジリエンスの高い者は抑うつ感を抱きにくいことが明らかとなっている。加えて、レジリエンスの 4 つの因子と抑うつ症状とも負の相関を示した(田中・兒玉, 2010)。このことから、抑うつ感との負の相関を示した「自分—肯定語」の D-IRAP 得点と関連性を示す可能性がある。本研究では、IRAP で測定した ISE の得点と田中・兒玉(2010)で使用したレジリエンス尺度との相関を算出し、ISE の心理的健康に関する知見の蓄積を行う。

方法

研究参加者

A 大学の大学生 32 名(男性 20 名, 女性 12 名, 平均年齢 22.6 歳, $SD=2.8$ 歳)を対象に, A 大学にて実験者と参加者の 1 対 1 方式で実施した。本研究は所属機関の倫理委員会の審査を受け, 承認を得ている(受付番号 H30-058)。

研究場所・研究装置

研究 1 と同様であった。

IRAP

IRAPはAssociation for Contextual Behavioral Scienceのホームページで公開されている Ghent-Odysseus IRAP(https://contextualscience.org/goirap_software_and_manual)を使用した。IRAPの刺激の配置及び種類に関してはStewart et al. (2017)と研究1を参考にす。ラベル刺激には「自分」と「他者」を, ターゲット刺激には研究1と同様の刺激を, 選択肢には「はい」と「いいえ」を用いた(Table 5)。

Table 5
研究 2 で使用した IRAP の刺激

| 刺激の種類 | 属性 | | 使用した刺激 | | | | |
|---------|-----|----|--------|----|----|-----|-------|
| | | | 自分 | 他者 | | | |
| ラベル刺激 | | | 自分 | 他者 | | | |
| ターゲット刺激 | 肯定語 | 良い | 成功 | 正直 | 利益 | 快活 | 自信 |
| | 否定語 | 悪い | 失敗 | 不正 | 無益 | 不快 | 恥ずかしい |
| 選択肢 | | | はい | | | いいえ | |

質問紙

レジリエンスの尺度として森・清水・石田・富永・Hiew (2002)を、再度因子分析した田中・兒玉(2010)の尺度を使用する。この尺度は、20 項目の質問で構成されており、各項目に対して、「現在の自分」にどの程度当てはまると思うかを、「1.あてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.どちらともいえない、4.ややあてはまる、5.よくあてはまる」の5段階で評定を求めた。得点の範囲は31点から155点であり、高いほどレジリエンスが高いことを示す。また田中・兒玉(2010)のレジリエンス尺度では、自己受容、他者信頼感、自己能力信頼感、楽観的思考の4つの因子がある。

手続き

始めに、レジリエンスの質問紙への回答を求めた。そして、回答後に IRAP を実施した。IRAP はラベル刺激とターゲット刺激を組み合わせることで、「自分—肯定語」と「自分—否定語」、「他者—肯定語」、そして「他者—否定語」の4つの試行タイプを設けた。さらに研究 2 の IRAP には自己肯定条件と自己否定条件があり、自己肯定条件では4つの試行タイプのうち、「自分—肯定語」と「他者—否定語」の試行タイプが提示された場合に「はい」の選択を、「自分—否定語」と「他者—肯定語」の試行タイプが提示された場合に「いいえ」の選択を、それぞれ正答とした。4つの試行タイプと2つの条件の関係を Figure 8 に示す。自己否定条件では自己肯定条件の正答と誤答を逆転させた。参加者が正答の選択を行った場合、400ms の試行間隔を挟んで次の刺激が提示された。参加者が誤答の選択を行った場合、正答の選択肢を選び直すまでモニターに赤い「×」印を提示した。

4 種類の試行タイプのうち、どれか 1 種類の刺激が提示されてから、参加者が正答を示す

までを1試行とし、1ブロックを24試行とした。4つの試行タイプはランダムな順序で提示され、同じ試行タイプが2試行連続して提示しないように調整した。また、選択肢の位置はランダムで左右入れ替わるようになっており、3試行連続して同じ位置に提示されないようにした。

練習フェイズと本番フェイズがあり、練習フェイズにおいて連続する両条件で、1ブロック中の反応潜時の中央値が2500ms以下及び正答率が80%以上を示した場合、本番フェイズに移行した。計8ブロックで上述した条件を満たせなかった参加者は、そこで実験を終了した。本番フェイズは計6ブロック行い、この結果を分析対象とする。どちらの条件から開始するかは、参加者ごとにカウンターバランスをとった。

研究参加者には、研究1と同様の内容をIRAP開始前に教示した。

研究1と同様の手続きでD-IRAP得点に変換した。研究2では、4つの組み合わせごとにD-IRAP得点と全体のD-IRAP得点を算出した。また本番フェイズの6ブロックの中で、1ブロックでも反応潜時の中央値が2500ms以上もしくは正答率80%以下を示した参加者のデータは除外した。

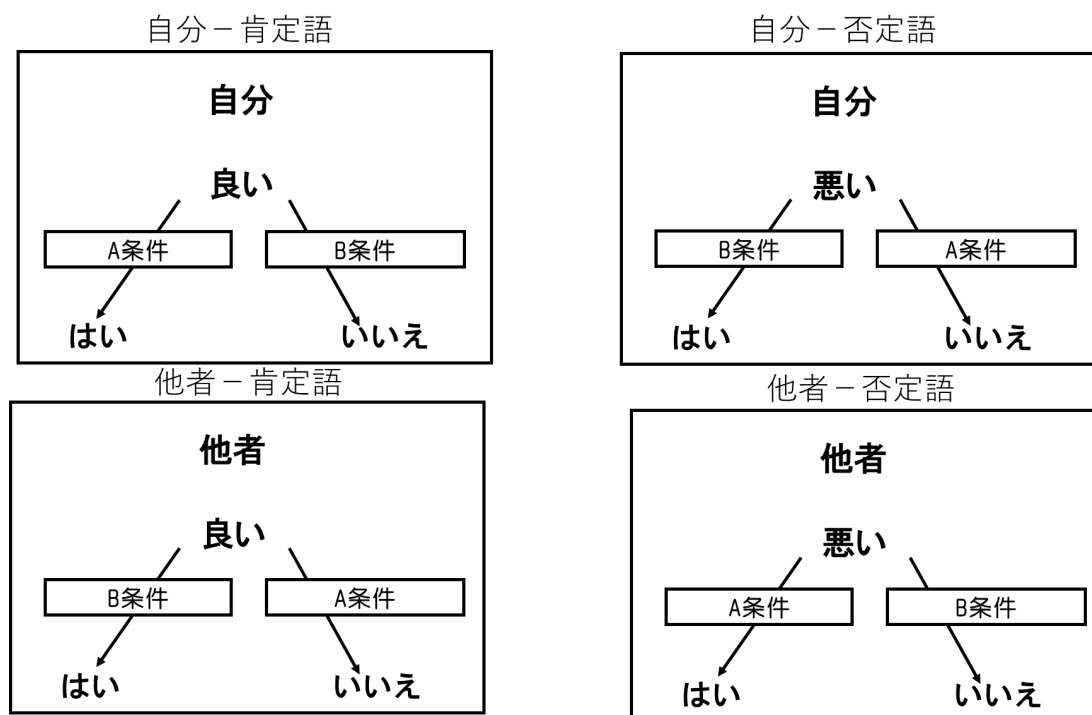


Figure 8. 研究2の4つの試行タイプの例と正反応の選択肢。

結果

参加者 32 名の内 4 名が本番フェイズへの移行条件に達することができなかった。その一方で、本番フェイズ内での除外基準に抵触した参加者はいなかった。そのため、基準を達成した 28 名の結果を分析対象とした。

まず、全体の平均 D-IRAP 得点は 0.08 ($SD = 0.27$)であった。一群の t 検定を行ったところ有意差が認められなかった($t(27) = 1.66, p = .1$)。次に、4 つの試行タイプごとの平均 D-IRAP 得点は、「自分—肯定語」が 0.33($SD = 0.38$)、「自分—否定語」が 0.08 ($SD = 0.32$)、「反対—肯定語」が -0.01 ($SD = 0.42$)、「反対—否定語」が -0.07 ($SD = 0.39$)であった(Figure 9)。そして、4 つの試行タイプの D-IRAP 得点を対象に一群の t 検定を実施したところ、「自分—肯定語」は($t(27) = 4.54, p < .001$)、「自分—否定語」は($t(27) = 1.36, p = .18$)、「他者—肯定語」は($t(27) = .05, p = .95$)、「反対—否定語」は($t(27) = .94, p = .35$)となり、「自分—肯定語」の試行タイプのみ有意差が認められた($p < .05$)。これは、「自分—肯定語」の組み合わせが提示された際に、「はい」を選択することが素早いことを指す。

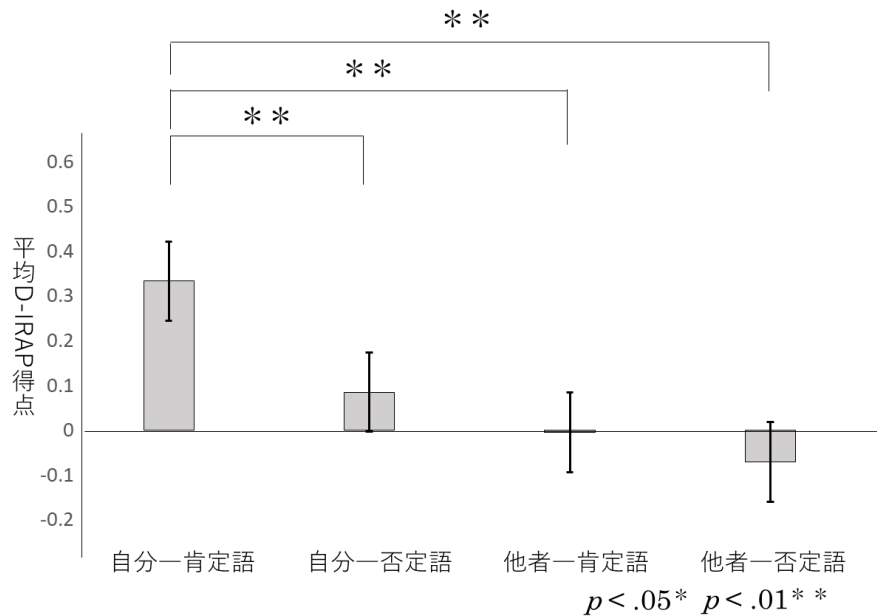


Figure 9. 研究 2 における 4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点。エラーバーは標準偏差を示す。横軸は各試行タイプを示している。A 条件における選択反応が相対的に早かった場合、グラフは正の方向に数値が増加する。B 条件における選択反応が相対的に早かった場合、グラフは負の方向に数値が増加する。以下、Figure おける 4 つの D-IRAP 得点の結果は、Figure 9 と同様の内容を意味している。

Table 6

D-IRAP 得点とレジリエンス得点の相関

| | 自分—肯定語 | 自分—否定語 | 他者—肯定語 | 他者—否定語 |
|----------|--------|--------|--------|--------|
| レジリエンス合計 | -.03 | .11 | .04 | -.05 |
| 自己受容 | -.08 | -.13 | -.08 | -.12 |
| 他者信頼感 | -.30 | -.01 | -.20 | -.02 |
| 自己能力信頼感 | .03 | .27 | .33 | .00 |
| 楽観的思考 | .43* | .24 | -.01 | .07 |

注) 自己受容 $\alpha = .74$, 他者信頼感 $\alpha = .59$, 自己能力信頼感 $\alpha = .72$, 楽観的思考 $\alpha = .64$ $p < .05^*$

次に、4つの試行タイプのD-IRAP得点の間の差を検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、試行タイプの主効果が有意であった($F(3, 81) = 12.47, p < .001$)。Ryan's法で多重比較をしたところ、「自分—肯定語」は他の試行タイプよりもD-IRAP得点が有意に高かった($p < .001$)。

最期に、IRAPの4種類の組み合わせと、レジリエンスの総合得点及び4つの因子を対象に相関分析を実施した(Table 6)。その結果、「自分—肯定語」と楽天的思考で有意な正の相関を示した($r = .43, p = .01$)。「自分—肯定語」の組み合わせに対し「はい」の選択が素早い者ほど、楽天的思考の得点が高くなることを示している。

考察

研究2では、メジャー式の「他者」を使用したStewart et al. (2017)を参考にISEを測定し、D-IRAP得点の比較とレジリエンス尺度との関連性についての検証を実施した。

まず、全体の平均D-IRAP得点及び4つの試行タイプのD-IRAP得点を対象に一群の t 検定を実施したところ、「自分—肯定語」の試行タイプのみ有意差が示された。この結果は、「自分—肯定語」の組み合わせが提示された場合「いいえ」の選択よりも「はい」の選択が、素早く行われていたことを示している。その一方で他の組み合わせに関しては、「はい」と「いいえ」の選択に対する反応潜時に差が示されなかった。これは、Stewart et al. (2017)と同様の傾向を示しており、日本人大学生を対象としても再現されることが示された。また、4つの試行タイプごとのD-IRAP得点を対象に分散分析を行ったところ、「自分—肯定語」とその他の試行タイプとで有意差が示された。つまり、IRAPにより測定されるISEは、「自分—肯定語」が強い影響を与えていることを示唆する。

研究1では、「同類—肯定語」のD-IRAP得点が高く示されたことを、自己肯定の肯定か、

他者肯定の否定の可能性を示唆したが、自分＝肯定(自分－肯定語－はい)の関係づけについては検出されたものの、他者≠肯定(他者－肯定語－いいえ)の関係づけについては検出されなかった。そして、「同類－否定語」の低さを、自分＝否定(自分－否定語－はい)の関係づけか、他者≠否定(他者－否定語－いいえ)の関係づけによる可能性を示唆したが、選択に偏りは示されなかった。つまり、研究1で考察した相互協調的自己観における、自分を否定的に評価し、他者を肯定的に評価する傾向は示されなかった。

また研究1と異なり、研究2では全体のD-IRAP得点で一群の t 検定において有意差が示されてなかった。従来のISEの考え方では、自己肯定かつ他者否定の傾向が示される(原島・小口, 2007; Yamaguchi et al., 2007)。研究2のIRAPで、この傾向が示されるには「自分－肯定語」に「はい」、「自分－否定語」に「いいえ」、「他者－肯定語」に「いいえ」、「他者－否定語」に「はい」の選択がそれぞれ素早く行なわれる必要がある。しかしながら、研究2では、「自分－肯定語」に対して「はい」の選択が素早いことしか検出されなかった。この結果は、研究1と研究2のIRAPに違いがあることを示している。研究1のIRAPでは、「自分」と「他者」の比較に関するBIRRsを求められており、自分と他者の相対的な比較となっている。一方で、研究2では、各刺激間の関係性について等位や相違に関するBIRRsを求められており、自分や他者に対する肯定感と否定感を個別に評価している。つまり、他者に対する否定感とは、他者肯定や自己否定への評価などの比較対象があることにより抽出される傾向であると考えられる。

次にレジリエンスとの関連性について述べる。まず、全体のD-IRAP得点とレジリエンスの総合得点に、有意な相関は示されなかった。この結果は、IRAPで測定したISEには、レジリエンスにおける心理的な回復の機能は有していないことを示唆している。一方で、「自分－肯定語」とレジリエンスの因子である「楽観的思考」とで有意な正の相関を示した。Timko et al. (2010)では、「自分－肯定語」のD-IRAP得点と、抑うつ指標と負の相関、生活の満足度と正の相関があることを報告している。Brissette, Scheier, & Carver (2002)では、楽観性の高い者はネガティブな出来事を肯定的に解釈しやすく、心身の健康を維持する上での要因となると述べている。このことから、「自分－肯定語」の刺激間の強度の強さによる心理的健康度とは、心理的な回復力ではなく、楽観的に物事を捉えることによる可能性を示唆する。

さらに、この結果は自分＝肯定(自分－肯定語－はい)の関係づけと、自己≠否定(自分－否定語－いいえ)の関係づけが異なることを示している。一見この2つの自己評価は、同様の

事柄を指しているようであるが、ESE でこの 2 つが異なることを示唆しているように(福留他, 2017), ISE においても異なる傾向を示す可能性を示唆する。この傾向は Timko et al. (2010)でも、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点で示された相関が、「自分—否定語」の D-IRAP 得点では示されていないことから、この仮説を支持している。

最後に、研究 2 では 32 名中 4 名(12%)の参加者が、本番フェイズへの移行基準を達成できずデータを除外する結果となった。そこで研究 3 では、参加者を 1 人も除外しなかった Scanlon et al. (2014)を参考に、IRAP 開始前に正答の選択肢の確認及び口頭での練習を加える。

第 8 章 研究 3 : IRAP により測定した ISE における指標を行動とした緩衝機能の検証

目的

研究 3 では、Greenwald & Farnham (2000)が提唱した ISE の緩衝機能について、IRAP で測定した ISE との関連性を検証した。Greenwald & Farnham (2000)では、実験参加者を 2 種類の難易度の課題(高難易度・低難易度)の群に振り分け、課題後の様々な評価(成功失敗の自己評価、現在の気分、課題で測定された能力に対する重要性、課題を再度行った場合の得点)と 2 種類の自尊感情(ISE と ESE)の関連性を検証した。その結果、高難易度課題群で ISE の高い者ほど、ネガティブ(低い得点)なフィードバックを与えられたにも関わらず、課題で測定した能力の重要性を高く評価し、再度課題を行えば得点が高められると評価する傾向を示した。一方で、ESE では、そのような傾向が見られなかった。この結果から、Greenwald & Farnham (2000)では、ISE は高難易度課題後のネガティブなフィードバックの影響を緩衝する機能があると考察している。

研究 3 では、Greenwald & Farnham (2000)の手続きを主に 3 点ほど変更し、ネガティブなフィードバックの影響を緩衝する ISE の機能について検証する。1 点目は、ISE の尺度についてである。Greenwald & Farnham (2000)では、ISE の尺度として IAT を使用した。しかしながら IAT を使用した場合、ISE の刺激の組み合わせの中でどの連合の強さが緩衝機能として、作用しているのかは不明瞭である。そこで本研究では、ISE の尺度を IRAP に変更し、緩衝機能について検証する。4 つの試行タイプごとに D-IRAP 得点の結果を示すことで、どの試行タイプの刺激間の関係性と強度がネガティブなフィードバックの影響を緩衝しているのか検証する。

2 点目は、従属変数についてである。Greenwald & Farnham (2000)では、従属変数として課題後の自己評価や気分の程度について求めた。その結果、ISE の高い者は、低い者と比較してネガティブなフィードバックを緩衝し、自身の能力を高く評価したと考えられている。この知見から、ISE の高い者は低い者と比較して、課題後のネガティブなフィードバックの影響を緩衝し、課題を長く続けるのではないかと予想される。そこで、本研究では、課題の続行回数を従属変数として、ISE の高い者は、低い者よりネガティブなフィードバック(低い得点)を与える課題を継続して実施するのか検証する。ISE の高い者が、低い者と比較して、困難な課題を長く続けるならば、ネガティブなフィードバックの影響を緩衝していると想定する。

3点目は、課題の設定についてである。Greenwald & Farnham (2000)では、ネガティブなフィードバックを与える課題を、解決可能な高難易度の課題としている。しかしながら、研究3では、Greenwald & Farnham (2000)異なり、課題の実施回数を従属変数とするため、特定の課題に対する熟練度や得意不得意などの実験外の変数の影響で、課題を続けてしまう可能性がある。そのため、研究3では、熟練度や得意不得意などの変数の影響を低減させることを目的として、必ずネガティブなフィードバックを与えられるように解決不可能な課題を実施する群と、解決可能な課題を実施する群を設定した。

また、結果の分析に関しては、Greenwald & Farnham (2000)同様に ESE も測定し、各群の2つの自尊感情(ISE と ESE)を独立変数、課題の実施回数を従属変数として、交互作用を検証する。その際に、独立変数を量的変数(ISE と ESE のそれぞれの得点)とするので、ISE の緩衝機能を検証した稲垣・澤海・相川 (2018)を参考に、独立変数が量的変数の場合でも、交互作用が検証できる階層的重回帰分析を実施した。

他にも研究3では、緩衝機能の検証とは別にドロップアウトについて検討する。研究2では、12%の参加者がドロップアウトとなりデータから除外されている。そこで、研究3では、Scanlon et al. (2014)を参考に、IRAP のプログラムを起動する前に練習を実施した。しかしながら、この練習が影響することで、研究2の結果とは異なる傾向を示す可能性もある。そこで、研究2と同様に一群の *t* 検定と1要因の分散分析を実施し、練習による結果の影響についても検証する。

方法

研究参加者

A大学の大学生及び大学院生56名(男性22名、女性34名、平均20.2歳、 $SD = 2.1$ 歳)を対象に、解決不可能な課題を行う解決不可能群(28名)と解決可能な課題を行う解決可能群(28名)とにランダムに振り分けた。実験終了後に、実験参加の謝礼として、500円分の図書カードを渡した。本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得ている(受付番号2019-009)。

研究場所・研究装置

研究1及び2と同様であった。

IRAP

研究 2 と同様のプログラム及び刺激セットを使用した。

質問紙

ESE の尺度として、山本他(1982)を用いた。この尺度は、10 項目の質問で構成されており、各項目に対して、どの程度当てはまると思うかを、「1.あてはまらない、2.ややあてはまらない、3.どちらともいえない、4.ややあてはまる、5.あてはまる」の 5 段階で評定を求めた。得点の範囲は 10 点から 50 点であり、高い得点であるほど ESE が高いことを示す。

課題

研究 3 の課題は、ISE の緩衝機能について検証した稲垣他 (2018)を参考に、ランダムに並べられた日本語を正しく並び替えるアナグラム課題とした。アナグラム課題は、Visual Basic 6.0 で作成し、IRAP と同様にコンピュータ上で実施した。アナグラム課題の問題は、市村・上田・楠 (2017)のアナグラムデータベースを参考に、文字数を 5 文字とした。1 セットを 5 問として、ランダムに並べられた文字を並べ替えるよう求めた(例えば、「とはやちり」→「はやとちり」)。フィードバックを調整するために、解決不可能群と解決可能群の 2 つを設定した。解決不可能群では、1 セットの中で解決可能な問題を 1 問とした(他の問題は解決できない)。解決可能な問題を制限することで、必ずネガティブなフィードバックを受けられるように設定した。解決不可能群のアナグラムの問題に関しては、市村他(2017)の文字を 1 文字変更して、解決できない問題を作成した。また、解決不可能であるかを確認するため、心理学専攻の大学院を卒業した 2 名に、問題が解決不可能であるかの確認を依頼し、解決できないことを確認した。解決可能群は、市村他(2017)のアナグラムベース内の正答率 95%以上、解決時間 30 以内の問題を使用した。また、解決不可能群の中の解決可能な 1 問は、解決可能群の基準と同様の問題を使用した。

手続き

まず ESE の質問紙への回答を求め、その後に IRAP を実施した。IRAP の主な手続きは研究 2 と同様であったが、IRAP 実施前の教示に研究 2 の内容に加えて、全ての試行タイプと条件における正解の選択の確認と、参加者に口頭で回答を求めた。その際に、全ての試行タイプに対する 2 つの条件について実験者が尋ね、正答の選択を口頭で答えられるまで繰り返した。

IRAP 終了後にアナグラム課題を実施した。モニターには、上部にランダムに並べられた文字、中央部にテキストボックス、下部に「完了」と記されたボタンを提示した。研究参加者には、上部の文字列を参考に中央部のテキストボックスに正しい文字を入力し、「完了」を押すよう求めた。1 セット 5 問で構成されており、1 問回答までの制限時間を 30 秒とした。正しい回答を入力し「完了」を押した場合、もしくは 30 秒以内に正しい回答ができなかった場合、次の問題を提示した。誤った回答を入力し「完了」を押した場合、テキストボックス内の文字が消えるよう設定した。1 セット終了ごとに、モニター中央部にそのセット内の問題数と正答数(○/5 と提示した。○には 1 セット内の正答数を提示した。解決不可能群は、解決可能な問題が 1 つのみであるため、○には 0 もしくは 1 としか表示されない)、そして下部に「確認」と記されたボタンを提示した。「確認」を押した後に、モニター中央部に課題を続行するか終了するかを尋ねる教示文と、下部に「次へ」と書かれたボタンを提示した。教示文は、「ここからは任意の参加となります。次へのボタンを押すと「続行」・「終了」の選択肢がでてきます。この課題を再度行ってもよいと思う方は「続行」実験を終了したい方は「終了」を押してください」と提示した。そして、「次へ」を押した後に、モニター左右下に、「続行」と「終了」のボタンを提示した。「続行」を選択した場合、再度アナグラム課題を実施した。「続行」は 10 セットまでとした。「終了」を選択した場合、もしくは 10 セット課題を行った場合、「この課題は難しかったですか？」という質問を提示した。その質問に対して 7 段階での評定を求めた。

結果

参加者 56 名のうち、解決可能群の 1 名が本番フェイズへの移行条件に達することができなかった。そのため基準を達成した 55 名(解決不可能群 26 名、解決可能群 25 名)の結果を分析対象とした。

まず各群の全体の平均 D-IRAP は、解決不可能群が 0.05($SD = 0.30$)、解決可能群が 0.06($SD = 0.29$)であった。対応のない t 検定を実施したところ有意差は示されなかった($t(53) = .00, p = .98$)。次に 4 つの試行タイプごとの平均 D-IRAP 得点は、解決不可能群が「自分—肯定語」= 0.38($SD = 0.40$)、「自分—否定語」= 0.003($SD = 0.52$)、「他者—肯定語」= -0.007 ($SD = 0.33$)、「他者—否定語」= -0.09 ($SD = 0.41$)であり、解決可能群が「自分—肯定語」= 0.31($SD = 0.43$)、「自分—否定語」= 0.005 ($SD = 0.44$)、「他者—肯定語」= -0.02 ($SD = 0.39$)、「他者—否定語」= -0.03 ($SD = 0.40$)であった(Figure 10)。群(解決不可能・

解決可能)と4つの試行タイプごとのD-IRAP得点(「自分—肯定語」・「自分—否定語」・「他者—肯定語」・「他者—否定語」)を対象に、2×4の2要因の分散分析を実施した。その結果、4つの試行タイプごとのD-IRAP得点で主効果が示された($F(3, 159) = 15.85, p < .001$)。その一方で、群の主効果は示されなかった($F(1, 159) = 0.01, p = .89$)。そして、各群のESEの得点は、解決不可能群が29.7($SD = 5.63$)、解決可能群が26($SD = 9.61$)であった。対応のないt検定を実施したところ、有意差は示されなかった($t(53) = 1.6, p = .1$)。この結果から、各群のISE及びESEの得点に、有意な得点の差は認められなかった。

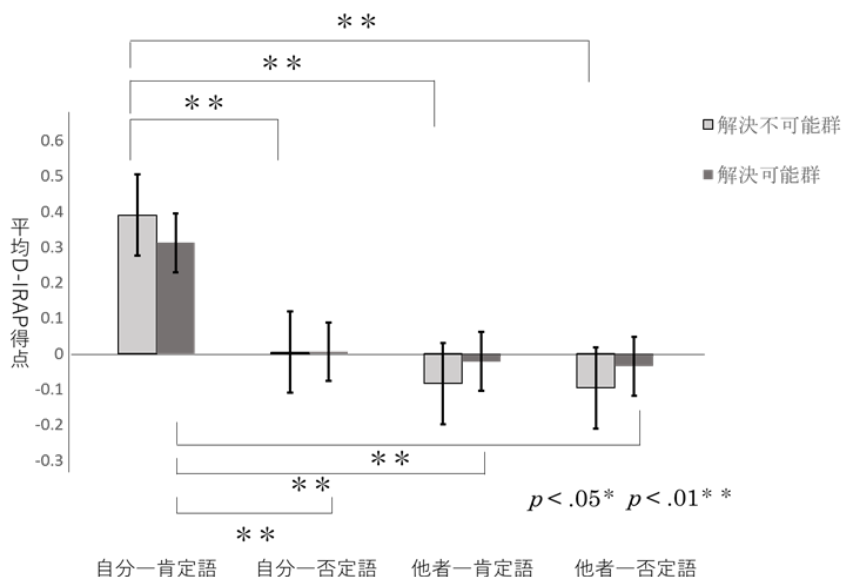


Figure 10. 研究3の群ごとの各試行タイプの平均D-IRAP得点。エラーバーは標準偏差を示している。

また、研究2の手続きから口頭での練習を加えることで、ISEの得点に変化を及ぼすかを検討するため、群ごとに各試行タイプのD-IRAP得点を対象に一群のt検定と分散分析を実施した。解決不可能群及び解決可能群の一群のt検定の結果、両群とも「自分—肯定語」のみ有意差を示した(解決不可能群; 「自分—肯定語」($t(27) = 5.14, p < .001$), 「自分—否定語」($t(27) = 0.04, p = .48$), 「他者—肯定語」($t(27) = -1.3, p = .13$), 「他者—否定語」($t(27) = -1.21, p = .11$)). 解決可能群; 「自分—肯定語」($t(26) = 3.82, p < .001$) 「自分—否定語」($t(26) = 0.05, p = .47$) 「他者—肯定語」($t(26) = -.28, p = .39$) 「他者—否定語」($t(26) = -.43, p = .33$)). 次に、群ごとの4つの試行タイプのD-IRAP得点の間の差を検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、試行タイプ的主効果が両群とも有意であった(解決不

可能群: $F(3, 81) = 12.85, p < .001$, 解決可能群: $F(3, 78) = 6.34, p < .001$ 。Ryan's 法で多重比較をしたところ、両群とも「自分—肯定語」は他の試行タイプよりも D-IRAP 得点が有意に高かった($p < .001$)。この結果は、両群とも研究 2 と同様の傾向を示しており、このことから IRAP 実施前に口頭での練習による結果の変化は示されなかった。

次に、両群を合わせて算出した全体 D-IRAP 得点と 4 つの試行タイプの D-IRAP 結果について、ESE の相関係数を算出したところ、「自分—肯定語」($r = .22, p = .09$), 「自分—否定語」($r = .19, p = .16$), 「他者—肯定語」($r = .22, p = .09$), 「他者—否定語」($r = .23, p = .08$), 全体の D-IRAP 得点($r = .3, p = .02$)であった。全体の D-IRAP 得点のみ有意な弱い相関が示された。

次に各群のアナグラム課題の結果について述べていく。続行の平均回数は、解決不可能群が 5.2 回($SD = 3.0$), 解決可能群が 6.2 回($SD = 2.96$)であった。対応のない t 検定の結果有意差は示されなかった($t(53) = 1.13, p = .26$)。また、アナグラム課題終了後に尋ねた課題に対する難易度の認知は、解決不可能群が 5.4($SD = 1.39$), 解決可能群が 4.6($SD = 1.26$)であった。対応のない t 検定の結果有意差が示された($t(53) = 2.16, p = .03$)。各群で課題の実施回数に差は見られなかったが、難易度の認知には差が見られた。

最期に、群ごとの 2 種類の自尊感情(ISE と ESE)と課題の実施回数の交互作用を検討するために 2 ステップの階層的重回帰分析を実施した。まず、課題に実行回数を従属変数として、Step1 で群(解決不可能と解決可能: それぞれを -1 と +1 を割り当てダミー変数化)と、2 種類の自尊感情である ESE と ISE(全体 D-IRAP 得点, 「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「他者—肯定語」, そして「他者—否定語」のそれぞれの平均 D-IRAP 得点)の変数を独立変数として投入し、Step2 で両変数の交互作用項を投入した(Figure 11)。その結果、「自分—肯定語」と課題の実施回数のみ有意な交互作用を示した($\Delta R^2 = .07, p = .04$)。続けて、単純傾斜効果検定を行ったところ、解決不可能群の結果で有意差が示された($\beta = .31, p = .027$)。このことから、「自分—肯定語」の組み合わせに対して「はい」を素早く選択する者ほど、ネガティブなフィードバックを受けても課題を実施しやすいことが明らかとなった。また、他の指標についても、単純傾斜効果の検定を実施したところ、解決不可能群における「自分—否定語」の D-IRAP 得点で有意差が示された($\beta = .34, p = .003$)。このことから、「自分—否定語」に対して「いいえ」の選択が素早い者ほど、ネガティブなフィードバックを受けても課題を継続して実施しやすいことが明らかとなった。他にも、解決不可能群の全体 D-IRAP 得点で有意傾向が示された($\beta = .37, p = .065$)。この結果は、IRAP にお

ける ISE の組み合わせの全てを含めた場合、有意差が示されないことを意味している。

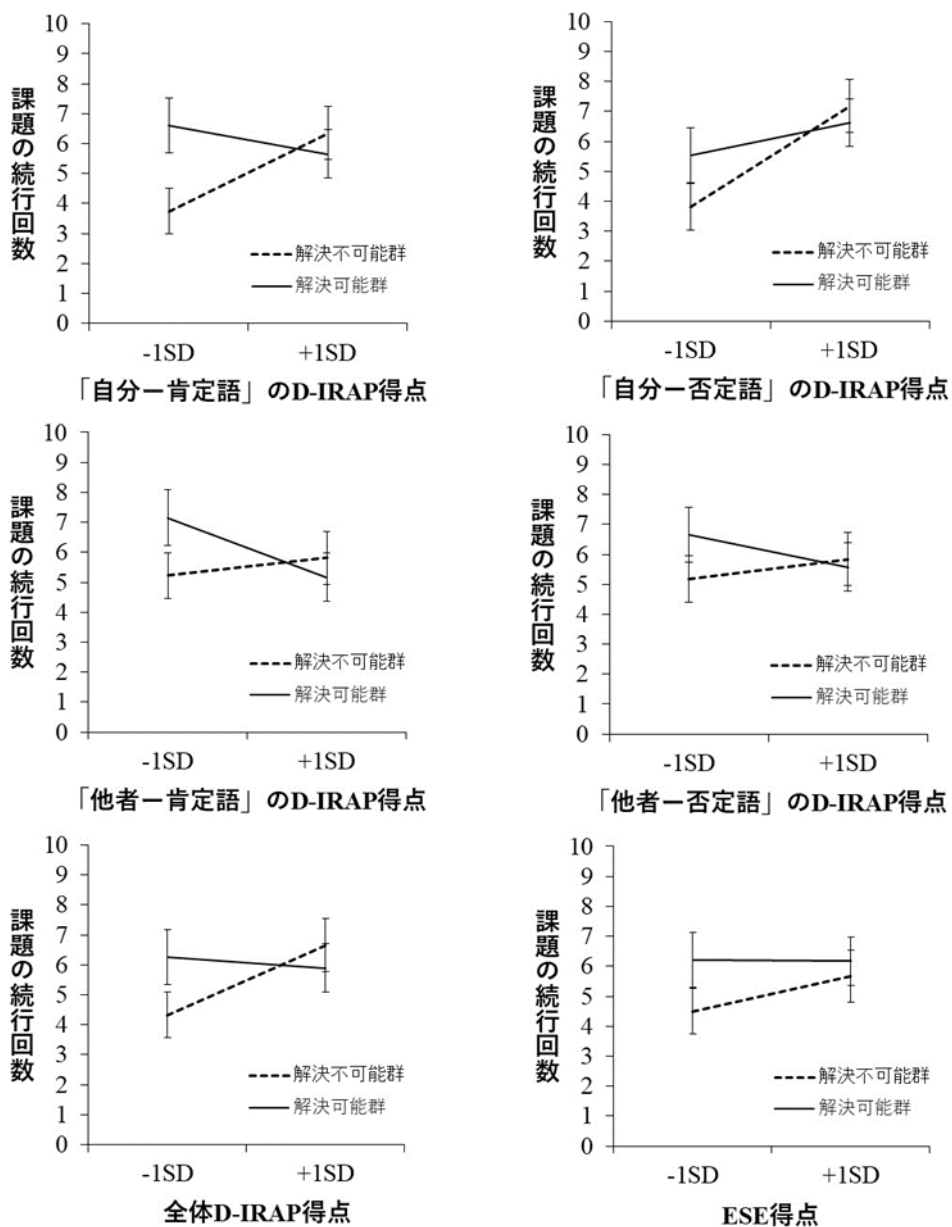


Figure 11. 各自尊感情(ISE 及び ESE)を対象とした階層的重回帰分析の結果。ISE は、全体 D-IRAP 得点と、各試行タイプの D-IRAP 得点ごとに分かれている。エラーバーは標準誤差を示している。

考察

研究 3 は Greenwald & Farnham (2000) の手続きの中で、ISE の尺度と従属変数を変更し、そして必ずネガティブなフィードバックが与えられるように解決不可能な課題に設定して、課題後のネガティブなフィードバックに対して作用する ISE の緩衝機能について検証した。

まず、IRAP で測定した ISE の得点と課題の続行回数の関連性について述べる。解決不可能群において、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点と、課題の続行回数とに有意差が示された。その一方で、解決可能群ではこの傾向を示さなかった。このことから、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点が高い者ほど、ネガティブなフィードバックを与える課題を長く続ける傾向が示された。この結果は、自分=肯定語の刺激間の関係性が強い者ほど(自分—肯定語—はい)、ネガティブなフィードバックの影響を緩衝し、課題を長く続けたと考えられる。加えて、解決可能課題群の結果との交互作用は示されなかったものの、「自分—否定語」の D-IRAP 得点が高い者も、解決不可能群において課題を長く続ける傾向が示された。つまり、自分≠否定語の刺激間の関係性が強い者ほど(自分—否定語—いいえ)、ネガティブなフィードバックの影響を緩衝している可能性が示唆された。その一方で、「他者—肯定語」と「他者—否定語」の D-IRAP 得点と、課題の継続回数との関連性が示されなかった。このことから、ISE の構成要因の中でも、自分と肯定語、そして否定語との刺激間の関係性及び強度が、ネガティブなフィードバックの影響に対する緩衝機能として作用すると考えられる。

また各試行タイプの D-IRAP 得点の結果は、全体の平均 D-IRAP 得点が課題の続行回数と有意差を示さなかったことも説明する。全体の D-IRAP 得点は、緩衝機能として作用しなかった「他者」の要因が含まれていることで、有意差を示さなかったと考えられる。この結果は、試行タイプごとに検討できる IRAP の利点が活かされている。

続いて、ESE の得点と課題の続行回数の関連性について述べる。ESE の得点は課題の続行回数と有意差を示さなかった。この結果は、Greenwald & Farnham (2000) を支持するものであり、ESE は課題後のネガティブなフィードバックの影響を緩衝する機能はないと考えられる。このことから、課題後のネガティブなフィードバックに影響する緩衝機能は、ISE 独自のものと考えられる。

また IRAP 実施前に口頭での練習行ったことで、研究 3 では 56 名中 1 名(1%)のドロップアウトに留まった。これは、研究 2 のドロップアウト率の 12%と比較して、ドロップアウトを防ぐのに有効であったと考えられる。

最期に、研究 3 では ISE の組み合わせの中でも「自分—肯定語」や「自分—否定語」と、緩衝機能との関連性を示し、その一方で ESE との関連性を示さなかった。そして、この結果は、自己評価が REC モデルにおける BIRRs で行われる場合と、EERRs で行われる場合とで、異なることを示唆している。しかしながら、研究 3 の結果からでは、「自分—肯定語」や「自分—否定語」の D-IRAP 得点の高い者が、課題後のネガティブなフィードバックを、なぜ緩衝する(課題を続行する)のかについては不明瞭である。そこで、研究 4 では ISE の得点を操作し、RFT における自己評価の観点から検証する。

第9章 研究4：IRAPで測定するISEの得点を高める要因についての検証

目的

研究4では、IRAPで測定するISEの得点を高める要因について検証する。研究3では「自分—肯定語」や「自分—否定語」のD-IRAP得点が高い者ほど、解決不可能課題を続ける傾向が示された。しかしながら、なぜ「自分—肯定語」や「自分—否定語」のD-IRAP得点の高い者がネガティブなフィードバックを与えられても、課題を続行するのかについては不明瞭であった。

1つの仮説として、ネガティブなフィードバックを与えるような困難な課題に取り組むことに対する経験が、日常生活の中で多い者ほど「自分—肯定語」に「はい」、「自分—否定語」に「いいえ」を選択することが、素早くなるのではないかと考えられる。つまり、これらの知見から困難な課題を行うほど、自己評価が高まるのではないかと考察する。一方で、研究3のようにネガティブなフィードバックのみを与えられた場合、いずれ自己評価は低下する可能性がある。Baccus et al. (2004)では、自分と関連する刺激の後に、肯定的な刺激を繰り返し与えることで、ISEが高まることを報告している。これらのことから、単にネガティブなフィードバックを与える課題を続行しても、自己評価が高まるのではなく、困難な課題を実行し、ポジティブなフィードバックを受けることが必要になると考えられる。この仮説を検証するために、研究4では、異なる難易度の課題(高難易度課題・低難易度課題)を設定し、課題後のD-IRAP得点の変化を検証する。また、研究3で得られた知見は、IRAPにより抽出したBIRRsにおける自己評価である。対照的に、質問紙により抽出したEERRsにおける自己評価では、課題の難易度と続行に関して関連性を示していない。つまり、困難な課題と自己評価の変化に関する関連性はBIRRsによる自己評価と位置付けられる。この仮説を検証するため、ESEも課題前後で測定する。

IRAPにより測定したISEについて、介入前後で比較したStewart et al. (2017)では、介入後のD-IRAP得点の変化を報告している。つまり、ISEに影響する介入を実施した場合、D-IRAP得点は反映できる指標と考えられる。

また研究4では、実験室内ではなく、各参加者にプログラミングファイルを送付し、遠隔で実験を実施した。ISEを対象としたIATの先行研究の中で藤井・澤田(2014)では、遠隔で実験を実施している。その結果、実験室内で実施した場合と、各参加者が自宅で実施した際の結果に、有意な差が示されなかったと報告している(藤井・澤田, 2014)。そこで、研究

3 の IRAP の D-IRAP 得点の結果と比較し、藤井・澤田 (2014)のように実験室内と遠隔での実施した結果についての検討も実施する。

方法

研究参加者

A 大学及び B 大学の大学生を対象に実験参加への募集を行い、参加に同意した 83 名(男性 31 名, 女性 52 名, 平均 18.7 歳, $SD=1.04$ 歳)を対象とした。研究参加者は高難易度課題群(42 名)と低難易度課題群(41 名)にそれぞれランダムに振り分けた。研究倫理への配慮として実験前に、本実験のデータは関係者のみ閲覧可能であること、参加者の意思で実験を中止することが可能であることを説明し、データを匿名で公開することについての同意を得た。

IRAP

Visual Basic 6.0 で IRAP を作成し、EXE ファイル形式で研究参加者に配布し、研究参加者が所持しているパーソナルコンピュータで実施することを求めた。

質問紙

研究 3 と同様に ESE の質問紙を実施した。質問紙は、質問項目が記されたデータを配布し、回答後にデータの送信を求めた。

課題

研究 3 と同様に Visual Basic 6.0 で作成したアナグラム課題とした。IRAP と同様に作成したアナグラム課題を、EXE ファイル形式で参加者に配布した。研究 4 のアナグラム課題では、並び替える文字数を高難易度課題群は 5 文字、低難易度課題群は 3 文字として、文字数で難易度を調整した。高難易度課題群は、市村他 (2017)のアナグラムデータベースを参考に、熟知価が 4 以上、解決時間が 30 秒以上かかる問題を使用した。低難易度課題群は小柳・石川・大久保・石井 (1960)のリストを参考に、熟知価が 4.5 以上の 3 文字の名詞を使用した。また、小柳他 (1960)はアナグラム課題のリストではなかったため、文字の位置を入れ替えアナグラム課題の問題とした。

手続き

ESE の質問紙と IRAP を 2 回ずつ、アナグラム課題を 1 回実施した。順番としては、ESE, IRAP, アナグラム課題, IRAP, ESE の順で実施した。IRAP の手続きは、研究 2 と同様であるが、遠隔での実施のため研究 3 のように、口頭での練習は実施していない。また、実験を開始する前の注意点として、携帯及び PC のメール等の通知を切ることを、EXE ファイルを送る際に伝えた。

1 回目の IRAP 終了後、アナグラム課題を実施した。アナグラム課題は、両群 30 問として、1 問回答までの制限時間は設けなかった。刺激の提示位置及び回答方法は、研究 3 と同様であった。研究 3 と異なる点として、解決できない問題は入っていなかった。正しい回答を入力した場合、モニター中央部に「正解です」の文字を提示し、そして 100ms 後に下部に「次へ」と記されたボタンを提示した。誤った回答を入力した場合は、研究 3 と同様の設定であった。正しい回答が 3 分以上行われなかった場合、「最初の文字は○番目です」という頭文字のヒントを与えた。全問正解した際に、モニター中央部に「全問正解です」の文字を提示し、アンケートへの回答を求めた。アンケートは、「この課題は難しかったですか？」と尋ね、7 件法での回答を求めた。その後、2 回目の IRAP を実施した。また、アナグラム課題は、1 問目の問題が提示されてから、30 問目の問題が正解するまでの時間を測定した。アンケートへの回答及びアナグラム課題中の時間の測定は、難易度の設定が適切であったかを検証する指標とした。

結果

参加者 83 名のうち、高難易度課題群の 4 名、低難易度課題群の 5 名が本番フェイズへの移行条件に達することができなかった。さらに本番フェイズ内で高難易度課題群 1 名、低難易度課題群 2 名の参加者が基準以下の結果を示した。そのため両基準を達成した 71 名(高難易度群 37 名、低難易度群 34 名)の結果を分析対象とした。

まず各群のアナグラム課題前の D-IRAP 得点及び ESE の結果について述べていく。全体の平均 D-IRAP は、高難易度課題群が $0.04(SD=0.27)$ 、低難易度課題群が $0.09(SD=0.26)$ であった。対応のない t 検定を実施したところ有意差は示されなかった($t(69) = 0.76, p = .44$)。次に 4 つの試行タイプごとの平均 D-IRAP 得点は、高難易度課題群が「自分—肯定語」= $0.3(SD=0.42)$ 、「自分—否定語」= $0.09(SD=0.39)$ 、「他者—肯定語」= $-0.06(SD=$

0.4), 「他者—否定語」 = -0.11 ($SD = 0.37$), 低難易度課題群が「自分—肯定語」 = 0.29 ($SD = 0.44$), 「自分—否定語」 = 0.06 ($SD = 0.38$), 「他者—肯定語」 = 0.05 ($SD = 0.4$), 「他者—否定語」 = -0.02 ($SD = 0.4$) であった(Figure 12)。群(高難易度課題と低難易度課題)と4つの試行タイプごとのD-IRAP得点(「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「他者—肯定語」, 「他者—否定語」)を対象に, 2×4 の2要因の分散分析を実施した。その結果, 4つの試行タイプごとのD-IRAP得点で主効果が示された($F(3, 159) = 16.5, p < .001$)。その一方で, 群の主効果は示されなかった($F(1, 159) = 0.58, p = .44$)。そして, 各群のESEの得点は高難易度課題群が28.3 ($SD = 8.43$), 低難易度課題群が29 ($SD = 7.65$)であった。対応のない t 検定を実施したところ, 有意差は示されなかった($t(69) = 0.2, p = .94$)。この結果から, 各群のISE及びESEの得点に偏りはなかったと考えられる。

次に, 実験室内で実施したIRAPの結果と自宅で実施したIRAPの結果について偏りが示されないか検証した。この検証には, 実験室内で実施した研究3の結果と参加者が自宅で実施した研究4の介入前の結果を対象とする。研究3及び研究4は, 群ごとにD-IRAP得点の結果を分けて算出したが, この比較では研究ごとに各群の結果を統合して比較する。そのため研究3は55名を, 研究4は71名を対象とした。全体D-IRAP得点は, 研究3が0.06 ($SD = 0.29$), 研究4が0.07 ($SD = 0.26$)であった。対応のない t 検定を実施したところ, 有意差は示されなかった($t(124) = 0.22, p = .81$)。次に, 4つの試行タイプごとのD-IRAP得点は, 研究3が「自分—肯定語」 = 0.35 ($SD = 0.41$), 「自分—否定語」 = 0.004 ($SD = 0.49$), 「他者—肯定語」 = -0.04 ($SD = 0.4$), 「他者—否定語」 = -0.06 ($SD = 0.43$), 研究4が「自分—肯定語」 = 0.3 ($SD = 0.42$), 「自分—否定語」 = 0.08 ($SD = 0.38$), 「他者—肯定語」 = -0.007 ($SD = 0.4$), 「他者—否定語」 = -0.06 ($SD = 0.39$) であった。各研究(研究3と研究4)と4つの試行タイプごとのD-IRAP得点(「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「他者—肯定語」, 「他者—否定語」)を対象に, 2×4 の2要因の分散分析を実施した。その結果, 4つの試行タイプごとのD-IRAP得点で主効果が示された($F(3, 372) = 20.3, p < .001$)。その一方で, 研究間の主効果は示されなかった($F(1, 372) = 0.13, p = .71$)。このことから, 実験室内と自宅でそれぞれ実施したIRAPの結果に有意差が示されなかったことを示唆する。

次に, 難易度の設定が適切であったかを検証したアナグラム課題後のアンケートの回答とアナグラム課題の実施時間の結果について述べていく。アナグラム課題の群ごとの開始から終了までの平均時間は, 高難易度課題群平均1629秒 ($SD = 830$ 秒), 低難易度課題群平均230秒 ($SD = 47$ 秒)であった。対応のない t 検定を実施したところ有意差が示された(t

(69) = 9.81, $p > .001$)。また、課題後のアンケートで難易度を尋ねた項目について、高難易度課題群は平均 6 点($SD = 1.1$)、低難易度課題群は平均 2.7 点($SD = 1.7$)であった。対応のない t 検定を実施したところ有意差が示された($t(69) = 9.56, p > .001$)。このことから、研究 4 における高難易度課題群の難易度が、低難易度課題群と比較して、高かったことを示唆する。

次に各群のアナグラム課題後の D-IRAP 得点及び ESE の結果について述べていく。全体の平均 D-IRAP は、高難易度課題群が 0.02($SD = 0.23$)、低難易度課題群が 0.07($SD = 0.26$)であった。続いて、4 つの試行タイプごとの平均 D-IRAP 得点は、高難易度課題群が「自分—肯定語」= 0.48($SD = 0.34$)、「自分—否定語」= -0.06 ($SD = 0.42$)、「他者—肯定語」= -.022 ($SD = 0.29$)、「他者—否定語」= -0.08 ($SD = 0.38$)、低難易度課題群が「自分—肯定語」= 0.38($SD = 0.33$)、「自分—否定語」= -0.02 ($SD = 0.45$)、「他者—肯定語」= -0.09 ($SD = 0.47$)、「他者—否定語」= 0.06 ($SD = 0.43$) であった(Figure 12)。そして、各群の ESE の得点は高難易度課題群が 28.8($SD = 8.44$)、低難易度課題群が 31($SD = 8.06$)であった。

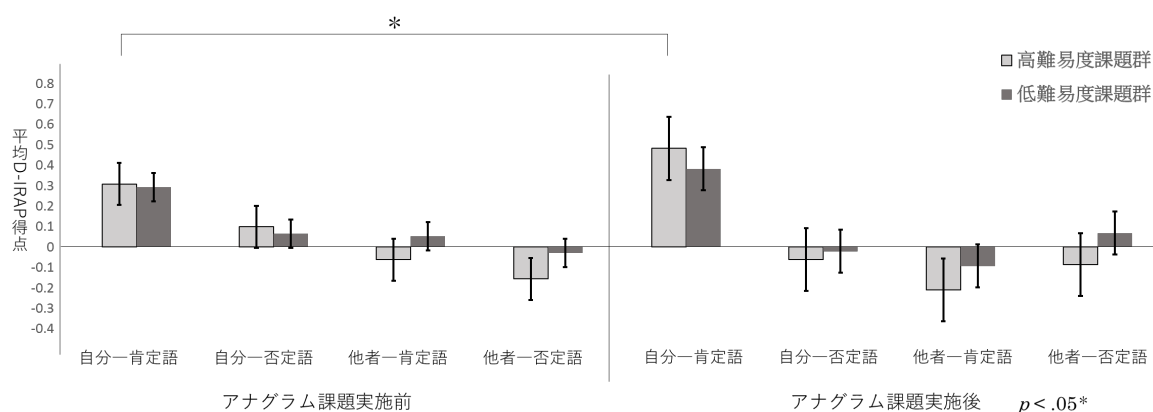


Figure 12. 研究 4 のアナグラム課題前後の 4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点。中心の黒い線からみて左側がアナグラム課題前の結果、右側がアナグラム課題後の結果を示している。

次に、アナグラム課題前後の D-IRAP 得点の変化について述べていく。課題の難易度(高難易度課題と低難易度課題)、4 つの試行タイプごとの D-IRAP 得点(「自分—肯定語」, 「自分—否定語」, 「他者—肯定語」, 「他者—否定語」), 時期(アナグラム課題の実施前と実施後)の要因を対象として $2 \times 4 \times 2$ の 3 要因の分散分析を実施した。その結果、2 次の交互作用は

示されなかった($F(3, 207) = 0.38, p = .76$)。一方で、4つの試行タイプごとのD-IRA得点と時期の要因とで交互作用が示された($F(3, 207) = 6.86, p < .001$)。さらに、各群の4つのD-IRAP得点と時期の要因について、高難易度課題群で有意な交互作用が($F(3, 207) = 4.6, p < .001$)、低難易度課題群で有意傾向の交互作用が示された($F(3, 207) = 2.59, p = .053$)。そして、高難易度課題群における課題前後の「自分—肯定語」D-IRAP得点の変化に有意差が($p = .49$)、「自分—否定語」のD-IRAP得点に有意傾向の変化が示された($p = .79$)。

最後に、ESEの得点について、各群と時期の要因を対象に2×2の2要因の分散分析を実施した。その結果、有意な交互作用を示した($F(1, 69) = 7.72, p = .007$)。そして、低難易度課題群のESEの得点の変化が有意であった($p = .002$)

考察

研究4では、高い難易度の課題を達成することが、ISEの得点の変化に影響を与えるか検証した。その結果、高難易度課題群において、アナグラム課題前後で「自分—肯定語」のD-IRAP得点が有意に上がった。これは、難易度の高い課題を達成したことにより、「自分—肯定語」の刺激間の強度が強まったのではないかと考察する。また、高難易度課題群において、アナグラム課題前後で「自分—否定語」のD-IRAP得点が有意傾向ではあったものの減少した。この結果は、アナグラム課題後に「自分—否定語」の組み合わせに対して、「はい」を選択することが、素早くなったことを示唆している。有意傾向ではあるものの、難易度の高い課題の実施は、自身の否定的な評価に繋がる可能性も示唆する。つまり、高難易度の課題に取り組む成功することは、ISEにおける自分に対する肯定的な評価を高める側面と、自分に対する否定的な評価を高める側面とがあると考察する。

次にアナグラム課題前後のESE得点を比較すると、低難易度課題群において、アナグラム課題前後で有意に得点が上がった。ESEの得点は、困難さを感じづらい課題を達成することで向上しやすいのではないかと考察する。つまり、課題の難易度の観点から、ISEとESEが高まる要因に違いがあると考えられる。

また、本研究の結果を日常場面で置き換えた場合、約30分程度の困難さを認知するような課題に取り組むことで、「自分—肯定語」の刺激間の関係性の強度が強まると考えられる。しかしながら、この結果に関して2つの疑問点がある。1点目は、課題に取り組む時間についてである。例えば、平均1時間程度の困難さを認知するような課題を実施した場合と、平均30分程度の課題とでは、「自分—肯定語」の得点がはたして高くなるのかは、研究4の

結果から断言することができない。受験勉強など、長時間課題に取り組む場合、際限なく強度が強くなるとは考えづらい。どの程度の時間が、自分＝肯定語の関係性を強めることに影響するのか、もしくは適切であるのか検証する必要があると考えられる。2点目は、自分＝肯定語の関係性の持続の期間である。研究4のような手続きにより、自分＝肯定語の強度が高まった場合、どの程度の期間持続するのかは不明瞭である。Van der Kaap-Deeder, De Houwer, Hughes, Spruyt & Vansteenkiste (2018)では、IRAPは状態的な側面を測定する尺度と考察している。IRAPで測定するISEが状態的な側面を検証しているならば、そのときの状況により変化しやすく、自分＝肯定語の強度は長期間継続しない可能性がある。RFTにおける自己評価が、臨床領域でも活用されていることから、このような検討点を精査することは、重要であると考えられる。

また、研究4では、83名中12名(14%)の参加者を除外したことで、高い除外率を示した。1つ原因としては、研究3と異なり、口頭での練習を実施しなかったことが、影響していると考えられる。遠隔で研究参加者の自由な時間で、IRAPの実施を依頼する際には、例えば、練習問題を加えるなどの、除外率を下げる手続きを加える必要があると考えられる。

最後に、実験室内と自宅内でのD-IRAP得点の結果に差が示されなかった。この結果は、研究場面に左右されずに測定可能である尺度ということを示唆している。2019年からCOVID-19(World Health Organization, 2019)のように、世界規模で広がる感染症などの影響により、直接対面式の研究が困難な際の代替的な手段として、使用できる可能性を示唆している。

結 論

本研究では、まず序論部において先行研究を概観し、主に IRAP により測定した ISE 研究を概観した。続いて、本論部では、序論部で示した検討点に基づいて実施された 4 つの研究を示した。最後に、この結論部では、本研究によって明らかになったことを整理し、将来の ISE 研究に求められる課題を示すことにする。

第 10 章 総合考察

第 1 節 3 つの検討点について本研究の結果から明らかになったこと

まず、本稿における各研究の結果を、自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定、そして ESE の観点から、まとめた内容を Table 7 に示す。

Table 7 本稿における各研究の IRAP の試行タイプごとの結果

| 本稿の 各研究 | IRAPの試行タイプ | | | | ESE |
|-----------------------|------------------------------------|-----------------------------------|---------------|---------------|---------------------------------------|
| | 自分—肯定語 | 自分—否定語 | 他者—肯定語 | 他者—否定語 | |
| 研究1 自己VS他者 | 自己肯定>他者肯定 | 自己否定<他者否定 | 自己肯定>他者肯定 | 自己否定<他者否定 | |
| 研究2 楽観的思考 との相関 | 正の相関 ($r = .43$) | 有意差無し | 有意差無し | 有意差無し | 正の相関 ($r = .55$) ※田中・兒玉(2010) |
| 研究3 解決不可能 課題の続行 | 自分=肯定 課題を続行 ($p = .027$) | 自分≠否定 課題を続行 ($p = .003$) | 課題続行の 傾向無し | 課題続行の 傾向無し | 課題続行の 傾向無し |
| 研究4 実験的操作 | 高難易度課題群 有意に増加 ($p = .049$) | 高難易度課題群 減少傾向 ($p = .079$) | 有意な 変化無し | 有意な 変化無し | 低難易度課題群 有意に増加 ($p = .002$) |

注) Table 7 では、統計の結果を除く = 及び ≠ は、それぞれ等位及び相違の関係性を示している。ESE と楽観的思考の正の相関は、田中・兒玉 (2010) の知見である。研究 3 における「自分—否定語」の知見は、解決可能課題群と交互作用を示していない。研究 4 の IRAP の試行タイプごとの知見における増加及び減少とは、D-IRAP 得点の変化を指す。

Table 7 から本稿の結果を概観すると、それぞれの試行タイプで異なる傾向を示していることが明らかである。つまり、ISE を測定する際のそれぞれの試行タイプに対する関係づけは、異なる心理的特性と関連していることが示唆されている。IAT で ISE を測定する際に、

これらの試行タイプは一括りとなっているものの、異なる心理的特性を反映していると考えられるべきであろう。また、Table 7には、ISE との比較を兼ねて ESE の結果も示している。研究 4 の結果を概観してみると、本稿で自己評価としている「自分—肯定語」と「自分—否定語」、そして ESE は異なる傾向を示している。このことから、ISE の自己評価を示す試行タイプ(「自分—肯定語」及び「他者—否定語」と ESE の有する機能が異なるということも示唆している。

以上のことから、本稿の結論部では、主に ISE を測定する IRAP の試行タイプが異なる傾向を示しているという観点から述べていく。その際に、ESE も交えて述べていく。

第 2 節 3 つの検討点について本研究の結果から明らかになったこと

ISE を測定する 2 つの刺激セットそれぞれの IRAP における結果の再現性の検証

本稿では IRAP の先行研究で使用された刺激セットを、Vahey et al. (2009)の Vahey 式と Timko et al. (2010)以降のメジャー式に分け、ISE を測定した。そして、研究 1 では Vahey 式を、研究 2 以降ではメジャー式の刺激セットを使用した。その結果、研究 1 では自己肯定かつ他者否定の結果が、研究 2 では自分＝肯定語の結果が示され、どちらの IRAP においても、先行研究の結果を再現した。つまり、ISE を測定する IRAP が、大学生を対象とした場合、同様の傾向を再現するということが明らかとなった。このことから、ISE の先行研究と同様に、IRAP で ISE を測定した D-IRAP 得点は、文化差の影響を受けにくい指標であることを示唆する。

また、研究 2 から研究 4 までメジャー式の刺激セットを使用しているが、「自分—肯定語」のみ D-IRAP 得点が一貫して一群の t 検定で有意差を示した。このことから、日本人大学生を対象に IRAP で ISE を測定した際のスタンダードな結果といえる。日本人大学生を対象に、何かしらの実験的な操作を実施しなかった場合、おそらくこの結果が安定して得られるものと考えられる。

ISE の先行研究で明らかとなった ISE の緩衝機能と「自分—肯定語」及び「自分—否定語」の D-IRAP 得点との関連性の検証

本稿における研究 2 及び研究 3 の結果から、「自分—肯定語」の D-IRAP 得点が高い者ほど、楽観的に物事を捉える傾向と、ネガティブなフィードバックを与える課題を続行する傾向が示された。この結果から、ISE の緩衝機能は、「自分—肯定語」の刺激間の関係

性を等位として強く関係づけている者ほど、作用しやすいのではないかと考えられる。この仮説は、「自分＝肯定語」の D-IRAP 得点が高い者ほど、抑うつを感じにくく、生活の満足度を高く感じやすいという先行研究の知見とも一致していると考えられる。

また、研究 2 の結果では、レジリエンスとの相関が示されなかった。この結果から、ISE の緩衝機能とは、困難な出来事からの心理的な回復力というよりも、困難な出来事自体を楽観的に判断しているからという可能性を示唆する。

Seligman (1990, 山村訳, 1991) では、楽観的に物事が捉えられるようになるには、困難な出来事に後続する内的な言語反応を、楽観的な言語反応へと変容させることを推奨している。つまり、楽観性の高い人物とは、困難な出来事を楽観的に評価する言語レパートリーを持っている人物と考えられ、ISE の緩衝機能を支える要因と考察する。そして、このような楽観的な内的な言語反応が、自分＝肯定語の関係づけを強める 1 つの要因と考察する。

その一方で、「自分＝否定語」は、ネガティブなフィードバックを与える課題を続行する傾向が示されたものの、解決可能課題群と交互作用を示さなかったことや、楽観的思考と有意な相関を示さなかった。このことから、自分＝肯定語と自分≠否定は共に、自己肯定的に自分を捉えてはいるものの、異なる心理的特徴を反映するものと考えられる。

「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の強度及び関係性に関する変数

研究 4 では、「自分＝肯定語」及び「自分＝否定語」の関係性及び強度に関わる変数を高難易度課題の達成感と仮説を立て、課題前後の D-IRAP 得点を比較した。研究 4 の結果から、「自分＝肯定語」は等位の関係性で強くなるものの、「自分＝否定語」に関しては、等位の関係性に得点に変化した。つまり、高難易度の課題は、自己肯定的な言語関係の確立を促進する一方で、自己否定的な言語関係の確立も促進する可能性がある。このような背景から、ISE における自己肯定感を高めるには、難しいことに挑戦し続けることが良いとも限らず、適度に挑戦的な課題に取り組むことが、自分＝肯定語の言語関係を確立し、自分＝否定語の言語関係の確立を阻止するのかもしれない。

第 3 節 検討点以外の本研究の結果からの考察

Vahey 式とメジャー式について

研究 1 では Vahey 式の刺激セットを用いて、自己肯定かつ他者否定の結果が、研究 2 で

はメジャー式の刺激セットを用いて、自分＝肯定語の結果が示された。この結果の違いは、他者否定の要因との比較を通して ISE を測定するのか、それぞれ個々に分けて測定するのかによるものと考えられる。研究 1 では、自己肯定 VS 他者肯定、そして自己否定 VS 他者否定の構図となる。一方、研究 2 以降は各組み合わせに対する「はい」VS「いいえ」の構図となる。つまり、他者否定の要因は、他者肯定や自己肯定の要因との比較により、検出される傾向であると考えられる。

ISE の測定法には、大きく分けて NLT を用いる場合と IAT を用いる場合とがある。NLT で ISE を測定する場合は、比較対象として直接的に「他者」の要因を含んでおらず、IAT とは相関を示さないことが報告されている(Bosson et al., 2000)。これらを総合すると 1 つの仮説として、測定する際に「他者」の要因が含まれることで IAT と NLT は、相関を示さないのではないかと考察する。その一方で NLT は、IRAP のメジャー式における「自分＝肯定語」や「自分＝否定語」など、「他者」の要因を含まない ISE の組み合わせと相関を示す可能性があると考えられる。

また、小塩他 (2009) では、IAT で測定した ISE の高い者ほど、他者を軽視する傾向が示されているが、IAT により測定した ISE の高さは、自己肯定と他者否定のそれぞれの連合の強さから算出していることから、他者否定の結果が反映されることにより示される傾向ではないかと考えられる。つまり、IRAP で個別に ISE の組み合わせの刺激間の強さを検証した場合、「他者＝肯定語」もしくは「他者＝否定語」の組み合わせと他者軽視が関連性を示し、「自分＝肯定語」と関連性を示さない可能性がある。

これらのことから、ISE の「他者」を刺激として使用することは、従来の ISE の知見に影響を及ぼしているかもしれない。Bosson et al. (2000) の「自己に関連した刺激に対する自発的な反応を導く非意識的で自動的な自己評価」という観点から、今後の ISE の研究に際して、「他者」の要因を含めるべきか否かは議論する必要があると考えられる。その際には、ISE という構成概念が、「他者」を含めるもしくは含めない場合とで、どちらがより高い精度で心理的特性や行動傾向の予測を行なえるかが焦点となるであろう。

メジャー式における各試行タイプの刺激間の強さ

本稿では、研究 2 から 4 まで日本人大学生を対象にメジャー式で ISE の検討を行ったところ、全ての研究において「自分＝肯定語」の得点が高く示される傾向があった。つまり、IRAP から測定する ISE は、「自分＝肯定語」に対して「はい」の選択が素早くなる

傾向が安定して得られることを示している。

その一方で、その他の試行タイプに関しては、「はい」と「いいえ」における偏りが示されなかった。この結果に対して、2つの仮説を述べる。1つ目は、RFTの観点から「自分—否定語」、「他者—肯定語」、そして「他者—否定語」に関する等位と相違の関係づけが、定型発達者の大学生を抽出した場合に偏らないためと考察する。「自分—肯定語」は、複数の大学生が日常生活の中で、自分自身を肯定的に捉える言語的反応が生じやすく、等位の関係づけが学習しやすいのではないかと考察する。その一方で、自己否定や他者肯定、他者否定に対する言語的反応は、大学生活の中で生じにくく、関係づけの学習がしにくいのではないかと考察する。ただし、この結果はあくまで大学生の集団を対象とした場合に限る。個人に着目した場合、例えば他者からのひどい仕打ちを経験し、他者—否定語の関係づけが強固な者や、その逆を示す者なども想定される。

2つ目は、ある1つの刺激の組み合わせに対するD-IRAP得点が高くなることを想定しているDifferent arbitrarily applicable relational responding effects(以下、DARRERモデルとする; Finn, Barnes-Holmes, & McEntegart, 2018)というモデルの理論が本研究の結果に当てはまると考察する。このDARRERモデルでは、まず選択肢を含めたIRAPで使用するそれぞれの刺激と、ラベル刺激とターゲット刺激の組み合わせについて、肯定的を示す+と、否定的を示す-の記号を割り振っていく。例えば、本稿の研究2から4までのIRAPに対してDARRERモデルに従い+と-を割り振る場合、ラベル刺激の「自分」が+「他者」が-、ターゲット刺激の肯定語が+否定語が-、選択肢の「はい」が+「いいえ」が-となる。そして、ラベル刺激とターゲット刺激の組み合わせについても+と-の記号を割り振る。その際に、ラベル刺激とターゲット刺激に当てはめた記号について、乗算の演算法で割り振る。そのため、「自分(+)-肯定語(+)」と「他者(-)-否定語(-)」は+となり、「自分(+)-否定語(-)」と「他者(-)-肯定語(+)」は-が割り振られる。割り振った記号に着目すると、全ての記号が一貫するのは、「自分(+)-肯定語(+)」に対して「はい(+)」を選択する場合のみとなる。つまり、全ての記号が一貫している組み合わせに対してD-IRAP得点が高まるというモデルである。このDARRERモデルの理論が当てはまるならば、例えばラベル刺激に「他者」と他者が+になるような他人を表す刺激(例えば「犯罪者」など)に変えた場合、他者肯定の結果が検出される可能性がある。

本稿における研究結果からでは、どちらの仮説が正しいのかを判断することができないものの、「他者」の要因に関しても今後検討する必要がある。

IRAPにより測定したISEとESE

IRAPにより測定したISEとESEの関連性を検証した研究3では、従来のISE研究と同様に弱い有意な相関を示している。しかしながら、Pilch & Hyla (2017)では、「自分—否定語」の試行タイプにおけるD-IRAP得点とで有意な相関を示している。本稿の研究とPilch & Hyla (2017)の違いとしては、使用したラベル刺激に「他者」か「自分ではない」かである。使用する刺激の種類により相関が示されるD-IRAP得点は異なるのか、本稿の研究からの言及は困難であるが、まずPilch & Hyla (2017)の手続きで日本人大学生においても、同様に再現されるか検証する必要がある。

また研究4では、ISEとESEで異なる傾向を示した。ISEの試行タイプである「自分—肯定語」と「自分—否定語」のD-IRAP得点が高難易度の課題後に変化し、ESEは低難易度の課題後に変化を示した。従来のISEの先行研究では、ESEとの解離により心理的不適応を示すことが明らかとなっており、共に高い水準の得点を示すことが望ましいとされている(Jordan et al., 2003)。本稿の結果から、それぞれISEやESEを高める際には、2つの自尊感情で異なるアプローチの選択が必要であることを示唆する。

第4節 本研究の課題点

「自分—否定語」の機能について

本稿の研究結果から、「自分—否定語」の組み合わせに対する評価と「自分—肯定語」に対する評価は異なる変数を予測するものとして考えられる。研究4では、「自分—肯定語」に「はい」と反応することと、「自分—否定語」に「いいえ」と反応することは、自分を肯定的に捉えようとしている点で同一の意味を指すと考えられるが、異なる傾向を示した。また研究2の楽観的思考に関しても、「自分—肯定語」のD-IRAP得点とは有意な相関を示すものの、「自分—否定語」のD-IRAP得点が有意差を示さなかった。つまり、本稿では、「自分—肯定語」と「自分—否定語」の違いについては示すことができたものの、一方で「自分—否定語」の刺激間の関係づけの強さについて新たな知見を提供できていないという課題点がある。

自己肯定の肯定と自己否定の否定に分けてESEを検証した福留他(2017)では、自己肯定への肯定の得点より、自己否定への否定の得点の方が、ストレス指標の得点と有意に高く負の相関を示したと報告している。このことから、自己否定への否定を示す者ほど心理的

な適応度が高いのではないかと考察している(福留他, 2017)。ESE と ISE がそれぞれ異なる特性を持つことが報告されていることから、福留他 (2017)の傾向は示されない可能性もあるものの、参考になると考えられる。

今後は、「自分—否定語」の組み合わせについて、自分=否定を示す者や自分≠否定を示す者がどのような傾向を示すのかについて検討する必要がある。その際には、本稿のように、各刺激の組み合わせごとに等位と相違の関係性を検証できる IRAP による測定が望ましいと考えられる。

IRAP で測定する ISE と他の尺度測定する ISE の違い

本稿では、終始 ISE の尺度として IRAP のみで検証を実施した。そのため、IAT や NLT など多くの研究で用いられてきた ISE の尺度との比較を行えていないという課題点がある。IRAP の利点として、4つの試行タイプごとに D-IRAP 得点を算出することで、既存の潜在的尺度以上に詳細な検討ができる点が挙げられている。この利点を活かし、Stewart et al. (2017)のように IAT で測定した ISE の補足を行っている。しかしながら、IRAP が他の ISE を測定する尺度以上に、心理的特徴を予測できるということを明らかにしたわけではない。ISE を測定する尺度間で有意な相関が示されていないことから、IRAP により測定する ISE が、より正確に予測できる心理的特徴や行動傾向を検討する必要がある。今後、IRAP の有用性を高めるには、尺度間での精査が必要となるであろう。

第 5 節 臨床的意義及び今後の展望

「自分—肯定語」に対する関係づけを研究することへの臨床的意義

本稿の研究の結果では、「自分—肯定語」の関係づけによる他の心理的特性との関連性や実験的操作により関係づけを強める手続きについて、主に明らかとしてきた。今後この領域を検討するためには、「自分—肯定語」の関係づけの過程について、より明らかにする必要があるであろう。木下・大月 (2011)では、自分の行動の観察及び言語的反応から形成されると仮定されているが、細部に関してまだ不明確な点が多い。例えば、研究 4 では、高難易度課題の実施による「自分—肯定語」の D-IRAP 得点の変化に着目したが、自身の行動を観察し言語的に反応していたのかは、本稿の知見のみでの断定が困難である。この言語的反応について、客観的に測定する必要があると考えられる。例えば、自身の行動をビデオ等でモニタリングし、言語的に評価を求める。この手続きを繰り返し実施した

後に、IRAPによりISEを測定するといった方法が挙げられる。その結果、自身の行動に対して肯定的な言語的評価を与える者ほど、自分＝肯定語の関係性の強度が強まると予想される。

また、このような実験的操作を実施せずとも、自分＝肯定語の関係性が強い者や「自分－肯定語」に対して「いいえ」を選択することが素早く、自分≠肯定語の刺激間関係性が強い者などが、どのような人生や経験を通して関係づけられてきたかを検証する必要がある。

IRAPは、刺激間関係性及び強度の測定を目的として開発されたアセスメントツールであることから、IRAPの結果からどのような心理的特徴や行動を予測できるのか、今後とも精査することで、より活用機会が増えると考えられる。

臨床場面での応用

IRAPは、RFTを基盤とした刺激間関係づけの強度を測定する尺度であるが、一方でRFTを基盤としたアクセプタンス&コミットメントセラピー(以下、ACTとする; Hayes, Strosahl, & Wilson, 1999)という心理療法がある。ACTでは、自己評価の低下によって引き起こる心理的な不適応についても言及している。例えば、「自分はダメな人間だ」など「自分」と否定的な意味合いを示す刺激との結びつきの強度が強まるような、内的な言語反応の頻度が増えるほど、現実の出来事よりその考え方を正しいと認識するようになると言われている(Bach & Moran, 2008)。そのような状態を低減させるための方法として、いくつかの技法を考案しており、一定の効果が報告されている(Ruiz, 2010)。このような自己評価の程度についてのアセスメントや、介入後の効果指標としてのIRAPによるISEの測定を活用できる可能性がある。木下他(2012)では、ACTの技法の効果をIRAPにより検証した。その結果、ACTの技法の効果がIRAPの結果に反映されていた。このことから、ACTとIRAPの親和性が高く、IRAPによる測定した自己評価が臨床領域で活用されることも期待される。

第11章 本稿の総括

本稿では、日本人大学生を対象にIRAPによりRFTの観点からISEの検証を行った。特にISEの試行タイプである「自分－肯定語」及び「自分－否定語」を自己評価として、この2つの試行タイプそれぞれの関係性や強度に着目した。しかしながら、第10章でも

述べたように、本稿の研究のみでは明らかとなっていない部分が多いと考えられる。

その一方で、本稿の知見は、今後の IRAP における ISE 及び RFT における自己評価の研究における 1 つの方向性を示したものであるともいえる。そのため、本稿は、当該研究領域において、微力ながら知見の蓄積に貢献できたものと考えられる。

引用文献

- 阿部 美帆・今野 裕之 (2005). 状態自尊感情尺度の作成の試み パーソナリティ研究, *14*, 125-126.
- 安藤 清志 (1987). さまざまな測定尺度 末永俊朗(編) 社会心理学入門 東京大学出版会 pp.211-228.
- Baccus, J. R., Baldwin, M. W., & Packer, D. J. (2004). Increasing implicit self-esteem through classical conditioning. *Psychological Science, 15*, 498–502.
- Bach, P. A. & Moran, D. J. (2008). *ACT in Practice: case conceptualization in acceptance an commitment therapy*. Oakland: New Harbinger Publications. (バツハ P. A., モラン D. J. 武藤 崇・吉岡 昌子・石川 健介・熊野 宏明 (監訳) (2009). ACT を実践する. 星和書店.)
- Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., Power, P., Hayden, E., Milne, R., & Stewart, I. (2006). Do you really know what you believe? Developing the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) as a direct measure of implicit beliefs. *The Irish Psychologist, 32*, 169–177.
- Barnes-Holmes, Y., Barnes-Holmes, D., Roche, B., & Smeets, P. M. (2001). Exemplar training and a derived transformation of function in accordance with symmetry. *The Psychological Record, 51*, 287–308.
- Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., Stewart, I., & Boles, S. (2010a). A sketch of the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) and the relational elaboration and coherence (REC) model. *The Psychological Record, 60*, 527–542.
- Barnes-Holmes, D., Murphy, A., Barnes-Holmes, Y., & Stewart, I. (2010b). The Implicit Relational Assessment Procedure: Exploring the impact of private versus public contexts and the response latency criterion on pro-white and anti-black stereotyping among white Irish individuals. *The Psychological Record, 60*, 57–66.
- Bluemke, M., & Friese, M. (2008). Reliability and validity of the Single-Target IAT (ST-IAT): Assessing automatic affect towards multiple attitude objects. *European Journal of Social Psychology, 38*, 977-997.
- Bosson, J. K., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Zeigler-Hill, V., Jordan, C. H., & Kernis, M. H. (2008). Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical

- and empirical review. *Social and Personality Psychology Compass*, 2, 1415–1439.
- Bosson, J. K., Swann, W. B., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631–643.
- ブラックレッジ, J.T. ・モーラン, D.J. 著 木下 奈緒子訳 (2009). 臨床家のための「関係フレーム理論」入門. こころのりんしょう à la carte, 28, 87-97.
- Brissette, I., Scheier, M. F., & Carver, C. S. (2002). The role of optimism in social network development, coping, and psychological adjustment during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 102–111.
- Bushman, B.J., Baumeister, R.F., Thomaes, S., Ryu, E., Begeer, S., & West, S.G. (2009). Looking again, and harder, for a link between low self-esteem and aggression. *Journal of personality*, 77, 427-446.
- Campbell, C., Barnes-Holmes, Y., Barnes-Holmes, D., & Stewart, I. (2011). Exploring screen presentations in the implicit relational assessment procedure (IRAP). *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, 11, 377-388.
- Carmines, E. G., & Zeller, R. A. (1979). *Reliability and validity assessment*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Creemers, D. M., Scholte, R. J., Engels, R. E., Prinstein, M. J., & Wiers, R. W. (2012). Implicit and explicit self-esteem as concurrent predictors of suicidal ideation, depressive symptoms, and loneliness. *Journal of Behaviour Therapy and Experimental Psychiatry*, 43, 638-646.
- Creemers, D.M., Scholte, R. J., Engels, R. E., Prinstein, M. J., & Wiers, R.W. (2013). Damaged self-esteem is associated with internalizing problems. *Frontiers in Psychology*, 4, 1-7.
- Dawson, D. L., Barnes-Holmes, D., Gresswell, D. M., Hart, A. J. P., & Gore, N. J. (2009). Assessing the implicit beliefs of sexual offenders using the Implicit Relational Assessment Procedure: A first study. *Sexual Abuse: A Journal of Research and Treatment*, 21, 57-75.
- Derogatis, L. R., & Melisaratos, N. (1983). The Brief Symptom Inventory: An introductory report. *Psychological Medicine*, 13, 595–605.

- De Houwer, J. (2003). The extrinsic affective Simon task. *Experimental Psychology*, *50*, 77–85.
- De Raedt, R., Remue, J., Loeys, T., Hooley, J. M., & Baeken, C. (2017). The effect of transcranial direct current stimulation of the prefrontal cortex on implicit self-esteem is mediated by rumination after criticism. *Behaviour Research and Therapy*, *99*, 138–146.
- De Raedt, R., Schacht, R., Franck, E., & De Houwer, J. (2006). Self-esteem and depression revisited: Implicit positive self-esteem in depressed patients? *Behaviour Research and Therapy*, *44*, 1017–1028.
- Dijksterhuis, A. (2004) I like myself but I don't know why: Enhancing implicit self-esteem by subliminal evaluative conditioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, *86*, 345–355.
- Dimaro, L. V., Roberts, N. A., Moghaddam, N. G., Dawson, D. L., Brown, I., & Reuber, M. (2015). Implicit and explicit self-esteem discrepancies in people with psychogenic non epileptic seizures. *Epilepsy & Behavior*, *46*, 109–117.
- Drake, C. E., Kramer, S., Habib, R., Schuler, K., Blankenship, L., & Locke, J. (2015). Honest politics: Evaluating candidate perceptions for the 2012 U.S. election with the implicit relational assessment procedure. *Journal of Contextual Behavioral Science*, *4*, 129–138.
- Dymond, S., Roche, B., Forsyth, J. P., Whelan, R., & Rhoden, J. (2007). Transformation of avoidance response function. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, *88*, 249–262.
- Edwards, A.L. (1953). The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *Journal of Applied Psychology*, *37*, 90–93.
- Edwards, A.L. (1957). *The social desirability assessment and research*, New York: Dryden.
- 遠藤 辰雄・井上 祥治・蘭 千寿 (1992). セルフエスティームの心理学——自己価値の探求—— ナカニシヤ出版.
- 遠藤 由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, *39*, 150–167.
- 遠藤 由美 (2013). 自尊感情 藤永 保 (監修) 最新心理学事典 平凡社.

- Ferrans, C. E., & Powers, M. J. (1985). Quality of Life Index: Development and psychometric properties. *Advances in Nursing Science*, 8, 15-24.
- Finn, M., Barnes-Holmes, D., & McEntegart, C. (2018). Exploring the Single-Trial-Type-Dominance-Effect in the IRAP: Developing a Differential Arbitrarily Applicable Relational Responding Effects (DAARRE) Model. *The Psychological Record*, 68, 11-25.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85, 93-99.
- 藤井 勉 (2016). 大学生の潜在的・顕在的自尊心が試験後の感情に及ぼす影響——特に潜在的自尊心のバッファリング効果に注目して—— 人文科学研究, 34, 449-470.
- 藤井 勉・澤田 匡人 (2014). 自尊感情とシャーデンフロイデ——潜在連合テストを用いた関連性の検討—— 感情心理学研究, 3, 114-123.
- Freeman, D., Garety, P. A., Bebbington, P. E., Smith, B., Rollinson, R., Fowler, D., et al. (2005). Psychological investigation of the structure of paranoia in a non-clinical population. *British Journal of Psychiatry*, 186, 427-435.
- 福留 広大・藤田 尚文・戸谷 彰宏・小林 渚・古川 善也・森永 康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の2側面——「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」—— 教育心理学研究, 65, 183-196.
- Gawronski, B., & De Houwer, J. (2014). *Implicit measures in social and personality psychology*. In H. T. Reis, & C. M. Judd (Eds.), *Handbook of research methods in social and personality psychology* (2nd edition). New York, NY: Cambridge University Press. 283-310.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Pinel, E., Simon, L., & Jordan, K (1993). Effects of self-esteem on vulnerability-denying defensive distortions: Further evidence of an anxiety-buffering function of self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 29, 229-251.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*,

79, 1022-1038.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology, 85*, 197-216.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1464-1480.

原島 雅之・小口 孝司(2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果
実験社会心理学研究, 47, 69-77.

長谷川 芳典 (2015). スキナー以後の心理学 (23) 言語行動、ルール支配行動、関係フレーム理論 岡山大学文学部紀要, 64, 1-30.

長谷川 芳典 (2017). スキナー以後の心理学 (25) 「関係反応」概念をめぐる議論 岡山大学文学部紀要, 67, 1-19.

Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (2001). *Relational frame theory: A post-Skinnerian account of human language and cognition*. New York: Kluwer/Plenum.

Hayes, S. C., Strosahl, K. D., & Wilson, K. G. (1999). *Acceptance and Commitment Therapy: an experiential approach to behavior change*. New York: Guilford press.

星野 命 (1970). 感情の心理と教育 児童心理, 24, 1445-1477.

Hughes, S., & Barnes-Holmes, D. (2013). A Functional Approach to the Study of Implicit Cognition: The IRAP and the REC model. In B. Roche & S. Dymond.(Eds.). *Advances in Relational Frame Theory & Contextual Behavioural Science: Research & Applications*. New Harbinger Publications.

Hussey, I., Thompson, M., McEntegart, C., Barnes-Holmes, D., & Barnes-Holmes, Y. (2015). Interpreting and inverting with less cursing: A guide to interpreting IRAP data. *Journal of Contextual Behavioral Science, 4*, 157-162.

Holland, R. W., Wennekers, A. M., Bijlstra, G., Jongenelen, M. M., & van Knippenberg, A. (2009). Self-symbols as implicit motivators. *Social Cognition, 27*, 579-600.

稲垣 勉・澤田 匡人 (2018). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と他者軽視の関連——不一致の「大きさ」と「方向」も含めて—— 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 27, 221-229.

- 稲垣 勉・澤海 崇文・相川 充 (2018). 潜在的自尊心のバッファリング効果の検討——困難課題後の感情を指標として—— 教育テスト研究センター年報, 3, 37-39.
- 市村 賢士郎・上田 祥行・楠 見孝 (2017). 清音ひらがな 5 文字のアナグラムデータベースの作成 心理学研究, 88, 241-250.
- 市川 玲子・望月 聡 (2015). パーソナリティ障害と顕在的・潜在的自尊心感情間の乖離との関連 心理学研究, 86, 434-444.
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer course*. London: Macmillan. (ジェームズ, W. 今田 寛(訳)(1992). 心理学 (上) 岩波文庫)
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969-978.
- Karpinski, A. (2004). Measuring self-esteem using the Implicit Association Test: the role of the other. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 22-34.
- 片受 靖・濱 洋子 (2016). 潜在的・顕在的自尊心の高低と抑うつとの関連について 立正大学心理研究所紀要, 14, 101-108.
- 川崎 直樹・小玉 正博 (2010). 潜在的自尊心と自己愛傾向との関連——Implicit Association Test 及び Name Letter Task を用いたマスク・モデルの検討—— パーソナリティ研究, 19, 59-61.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 80-84.
- Kesting, M. L., Bredenkohl, M., Klenke, J., Westermann, S., & Lincoln, T. M. (2013). The impact of social stress on self-esteem and paranoid ideation. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 44, 122-128.
- Kilroe, H., Murphy, C., Barnes-Holmes, D., & Barnes-Holmes, Y. (2014). Using the T-IRAP in-teractive computer programme and applied behavior analysis to teach relational responding in children with autism. *Behavioral Development Bulletin*, 19, 60-81.
- Kim, H. S., & Moore, M. T. (2019). Symptoms of depression and the discrepancy between implicit and explicit self-esteem. *Journal of Behavior Therapy and Experimental*

- Psychiatry*, 63, 1-5.
- 北山 忍・唐澤 真弓 (1995). 自己——文化心理学的視座——実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- Kitayama, S., & Uchida, Y. (2003). Explicit self-criticism and implicit self-regard: Evaluating self and friend in two cultures. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 476-482.
- Kishita, N., Takashi, M., Ohtsuki, T., & Barnes-Holmes, D. (2014). Measuring the Effect of Cognitive Defusion using the Implicit Relational Assessment Procedure: An Experimental Analysis with a Highly Socially Anxious Sample. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 3, 8-15.
- 木下 奈緒子・大月 友 (2011). 関係フレーム理論——RFT と ACT の「関係フレームづけ」を目指して—— 武藤 崇(編) ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー)ハンドブック——臨床行動分析によるマインドフルネスなアプローチ——(pp.37-52) 星和書店
- 木下 奈緒子・大月 友・酒井 美枝・武藤 崇 (2012). 行動的アセスメントによる脱フュージョンの効果測定——Implicit Relational Assessment Procedure (2010)を用いた検討—— 行動療法研究, 38, 237-246.
- 小柳 恭治・石川 信一・大久保 幸郎・石井 栄助 (1960). 日本語三音節名詞の熟知価 心理学研究, 30, 357-365.
- 桑原 知子 (1996). 人格二面性測定の試み——NEGATIVE 語を加えて—— 教育心理学研究, 34, 31-38.
- Lammers, C. H., & Roepke, S. (2010). Discrepancies between explicit and implicit self-esteem are linked to symptom severity in borderline personality disorder. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 41, 357-364.
- Leech, A., Barnes-Holmes, D., & Madden, L. (2016). The implicit relational assessment procedure (IRAP) as a measure of spider fear, avoidance, and approach. *The Psychological Record*, 66, 337-349.
- 中島 定彦 (1995). 見本合わせ手続きとその変法 行動分析学研究, 8, 160-176.,
- 並川 努・脇田 貴文・野口 裕之(2006). 評定尺度法に関する諸問題の検討 1——Rosenberg 自尊感情尺度を用いた予備的検討—— 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 96.
- Nicholson, E., & Barnes-Holmes, D. (2012). Developing an implicit measure of disgust

- propensity and disgust sensitivity: Examining the role of implicit disgust propensity and sensitivity in obsessive compulsive tendencies. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, *43*, 922–930.
- 野口 明子 (1964). 社会的要求性 (social desirability)に関する研究 教育心理学研究, *12*, 111–122.
- Nosek, B.A., Banaji, M.R. (2001). The go / no-go association task. *Social Cognition*, *19*, 625–64.
- Nuttin, J. M., Jr. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, *15*, 353–361.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*, 224–253.
- Maloney, E., Foody, M., & Murphy, C. (2020). Do Response Options in the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) Matter? A Comparison of Contextual Relations versus Relational Coherent Indicators. *The Psychological Record*, *70*, 205–214.
- McInteggart, C. (2016). GO-IRAP Software and Manual. Association for Contextual Behavioral Science. https://contextualscience.org/goirap_software_and_manual (March 6, 2018).
- Millon, T., & Davis, R. (1996). *Disorders of personality: DSM-IV and beyond*. New York: Wiley-Interscience.
- 森 敏昭・清水 益治・石田 潤・富永 美穂子・Hiew, C. C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係 学校教育実践学研究, *8*, 179–187.
- Murphy, C., MacCarthaigh, S., & Barnes-Holmes, D. (2014). Implicit Relational Assessment Procedure and attractiveness bias: directionality of bias and influence of gender of participants. *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, *14*, 333–351.
- 箕浦 有希久・成田 健一 (2013). 2 項目自尊感情尺度の提案——評価と受容の 2 側面に注目して—— 人文論究 (関西学院大学), *63*, 129–147.
- 武藤 崇 (2011a). 言語行動とは何か 武藤 崇(編) ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック——臨床行動分析によるマインドフルネスなアプローチ

——(pp.19–35) 星和書店

武藤 崇 (2011b). 行動分析学と ACT ——精神病理, 「素朴な」心理療法のアジェンダ, メタファー, そして ACT モデル—— 武藤 崇(編) ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック——臨床行動分析によるマインドフルネスなアプローチ——(pp.79–102) 星和書店

大月 友・木下 奈緒子 (2011). Implicit Relational Assessment Procedure(IRAP) ——潜在的認知に対する行動分析的アプローチ—— 武藤 崇(編) ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック——臨床行動分析によるマインドフルネスなアプローチ——(pp.177–190) 星和書店

O'Brien, E. J., Bartoletti, M., Leitzel, J. D., & O'Brien, J. P. (2006). Global self-esteem: Divergent and convergent validity issues. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers: A sourcebook of current perspectives*. New York, NY: Psychology Press, pp. 26–35.

小塩 真司 (2016). レジリエンス——回復する心—— 中間玲子(編) 自尊感情の心理学 ——理解を深める「取扱説明書」——(pp.120-130) 金子書房

小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成—— カウンセリング研究, *35*, 57-65.

小塩 真司・西野 拓朗・速水 敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, *17*, 250–260.

Pilch, I., & Hyla, M. (2017). Narcissism and self-esteem revisited: The relationships between the subscales of the NPI and explicit/implicit self-esteem. *Polish Psychological Bulletin*, *48*, 264-278.

Power, P. M., Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., & Stewart, I.(2009). The Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) as a measure of implicit relative preferences: A first study. *The Psychological Record*, *59*, 621–640.

Remue, J., De Houwer, J., Barnes-Holmes, D., Vanderhasselt, M. A., De Raedt, R. (2013) Self-esteem revisited: Performance on the implicit relational assessment procedure as a measure of self-versus ideal self-related cognitions in dysphoria. *Cognition & Emotion*, *27*, 1441–1449.

Remue, J., Hughes, S., De Houwer, J., and De Raedt, R. (2014). To be or want to be:

- disentangling the role of actual versus ideal self in implicit self-esteem. *PLoS One* 9:e108837.
- Robins, R. W., Tracy, J. L., Trzesniewski, K., Potter, J., & Gosling, S. D. (2001). Personality correlates of self-esteem. *Journal of Research in Personality*, 35, 463–482.
- Rönspies, J., Schmidt, A. F., Melnikova, A., Krumova, R., Zolfagari, A., & Banse, R. (2015). Indirect measurement of sexual orientation: Comparison of the implicit relational assessment procedure, viewing time, and choice reaction time tasks. *Archives of Sexual Behavior*, 44, 1483-1492.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M., & Owens, T. J. (2001) . Low self-esteem people. A collective portrait. T. J. Owens, S. Stryker, & N. Goodman (Eds.), *Extending self-esteem theory and research: Sociological and psychological currents*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, pp. 400-436.
- Rubin, M., and Hewstone, M. (1998). Social identity theory's self-esteem hypothesis: A review and some suggestions for clarification. *Personality and Social Psychology Review*, 2, 40-62.
- Rudolph, A., Schröder-Abé, M., Riketta, M., & Schütz, A. (2010). Easier when done than said! Implicit self-esteem predicts observed or spontaneous behavior, but not self-reported or controlled behavior. *Journal of Psychology*, 218, 12-19.
- Ruiz (2010). A Review of Acceptance and Commitment Therapy (ACT) Empirical Evidence: Correlational, Experimental Psychopathology, Component and Outcome Studies. *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, 10, 125-162.
- 佐藤 徳 (2016). 自尊感情の進化——関係性モニターとしての自尊感情—— 中間 玲子(編) 自尊感情の心理学——理解を深める「取扱説明書」——(pp.172-191) 金子書房
- Scanlon, G., McEntegart, C., Barnes-Holmes, Y., & Barnes-Holmes, D. (2014). Using the implicit relational assessment procedure (IRAP) to assess implicit gender bias and self-esteem in typically developing children and children with ADHD and with

- dyslexia. *Behavioral Development Bulletin*, 19, 48–59.
- Schmeichel, B. J., Gailliot, M. T., Filardo, E., McGregor, I., Gitter, S., & Baumeister, R. F. (2009). Terror management theory and self-esteem revisited: The roles of implicit and explicit self-esteem in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1077-1087.
- Schmitt, D. P., & Allik, J. (2005). Simultaneous administration of the Rosenberg self-esteem scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 623–642.
- Schröder-Abé, M., Rudolph, A., Wiesner, A., & Schütz, A. (2007). Self-esteem discrepancies and defensive reactions to social feedback. *International Journal of Psychology*, 42, 174–183.
- Seligman, M.E. P. (1990). *LEARNED OPTIMISM*. Arthur Pine Associates Inc., New York. (セリグマン, M. E. P., 山村 宣子 (監訳) (1991). オプティミストはなぜ成功するか——ポジティブ心理学の父が教える楽観主義の身につけ方—— 講談社)
- Sidman, M., & Tailby, W. (1982). Conditional discrimination vs. matching to sample: An expansion of the testing paradigm. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 37, 5–22.
- 潮村 公弘 (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性 下斗米 淳 (編) 自己心理学6——社会心理学へのアプローチ——(pp.48-62) 金子書房
- Stewart, C., Rogers, F., Pilch, M., Stewart, I., Barnes-Holmes, Y., & Westermann, S. (2017). The effect of social exclusion on state paranoia and explicit and implicit self-esteem in a non-clinical sample. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 57, 62-69.
- 鈴木 有美 (2006). 大学生のレジリエンスと向社会的行動との関連——主観的ウェルビーイングを精神的健康の指標として—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 53, 29-36.
- 田中 千晶・兒玉 憲一 (2010). レジリエンスと自尊感情, 抑うつ症状, コーピング方略との関連 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要, 9, 67-79.
- 丹藤 克也 (2018). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と取調べ迎合性との関連 人間学研究論集, 7, 17-27.

- Timko, C. A., England, E. L., Herbert, J. D., & Forman, E. M. (2010). The Implicit Relational Assessment Procedure as a measure of self-esteem. *The Psychology Record, 60*, 679-698.
- Törneke, N. (2010). *Learning RFT: An Introduction to relational frame theory and its clinical applications*. New Harbinger Publications. (トールネケ, N. (著) 武藤 崇・熊野 宏昭(監訳). (2013). 関係フレーム理論 (RFT) をまなぶ——言語行動理論・ACT 入門—— 星和書店)
- 津田 恭充・伊藤 義美 (2012). 潜在的自尊心および顕在的自尊心とパラノイア——イニシヤル選好課題と星座選好課題を用いた検討—— 対人社会心理学研究, *12*, 103-109.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, *30*, 64-68.
- Vahey, N. A., Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., & Stewart, I. (2009). A first test of the Implicit Relational Assessment Procedure as a measure of self-esteem: Irish prisoner groups and university students. *The Psychological Record, 59*, 371-388.
- VandenBos, G. R. (Ed.) (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC; American Psychological Association. (ファンデンボス, G. R. 繁榘 算男・四本 裕子 (監訳) (2013). APA 心理学大辞典 培風館)
- Van der Does, A. J. W. (2002). *Manual of the Dutch version of the BDI-II*. San Antonio, TX: Psychological Corporation/Lisse: Swets Test Publishers.
- Van der Kaap-Deeder, J., De Houwer, J., Hughes, S., Spruyt, A., & Vansteenkiste, M. (2018). The development and validation of an implicit measure of competence need satisfaction. *Motivation and Emotion, 42*, 615-637.
- Vater, A., Ritter, K., Schröder-Abé, M., Schütz, A., Lammers, C. H., Bosson, J. K., & Roepke, S. (2013). When grandiosity and vulnerability collide: Implicit and explicit self-esteem in patients with narcissistic personality disorder. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry, 44*, 37-47
- Volkan, V. D., & Ast, G. (1994). *Spektrum des Narzissmus [Spectrum of narcissism]*. Göttingen, Germany: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review, 107*, 101-126.

World Health Organization. (2019) ICD-10 Version: 2019. <https://icd.who.int/brows-e10/2019/en#/U07.1>. (September 14, 2020).

Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, *18*, 498–500.

Zeigler-Hill, V. (2013). The importance of self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.), *Self-esteem*. New York: Psychology Press. pp. 1–20.

参考文献

- 古谷大樹・竹内康二 (2019). 言語関係の評価を通じて測定した潜在的自尊感情—日本人大学生への Implicit Relational Assessment Procedure による検討— 感情心理学研究, *26*, 47-51.
- 古谷大樹・竹内康二 (in press). 潜在的自尊感情における「自分—肯定語」の刺激間の強さと心理的健康度に関する検証 —Implicit Relational Assessment Procedure を用いて— 感情心理学研究.

謝 辞

本論文を作成するにあたり、たくさんの方々からご指導、ご鞭撻を賜りました。

指導教員の竹内康二先生は、研究者や心理学に携わる者として、大事なことを教えていただきました。そして、先生とお会いして、人間としても成長したと感じております。心から感謝申し上げます。

早稲田大学の大月友先生には、急な申し出だったにも関わらず、論文の審査をお引き受けくださり誠にありがとうございました。深く感謝申し上げます。また、お忙しいところ、ご指導のお時間もとってください、誠にありがとうございます。先生のご指摘は、とても参考になりました。

本論文を完成させるにあたっては、明星大学の林幹也先生と丹野貴行先生からも、貴重なご意見、ご助言を賜りました。林先生は、とても参考になる意見を頂戴いたしました。先生とお話することで、潜在的自尊感情についての理解が深まりました。丹野先生は、毎回私が悩んでいる内容についての的確にご助言くださり、今回の論文につきましても、大変参考にさせていただきました。お二方にも、深く感謝申し上げます。

また、修士課程から面倒見てくださった塚本さんに深く感謝申し上げます。塚本さんがいらっしゃらなければ、途中で挫折していたかもしれません。

この他にも、様々な方々とのご縁があって、本論文を提出することができました。いつでも温かくサポートしてくださった明星大学心理学部の先生方と人文学部支援室の皆さま。また、院生の同期・後輩方、本当にありがとうございました。

最後に、長きにわたって迷惑をかけつつけている家族に、深く感謝申し上げます。